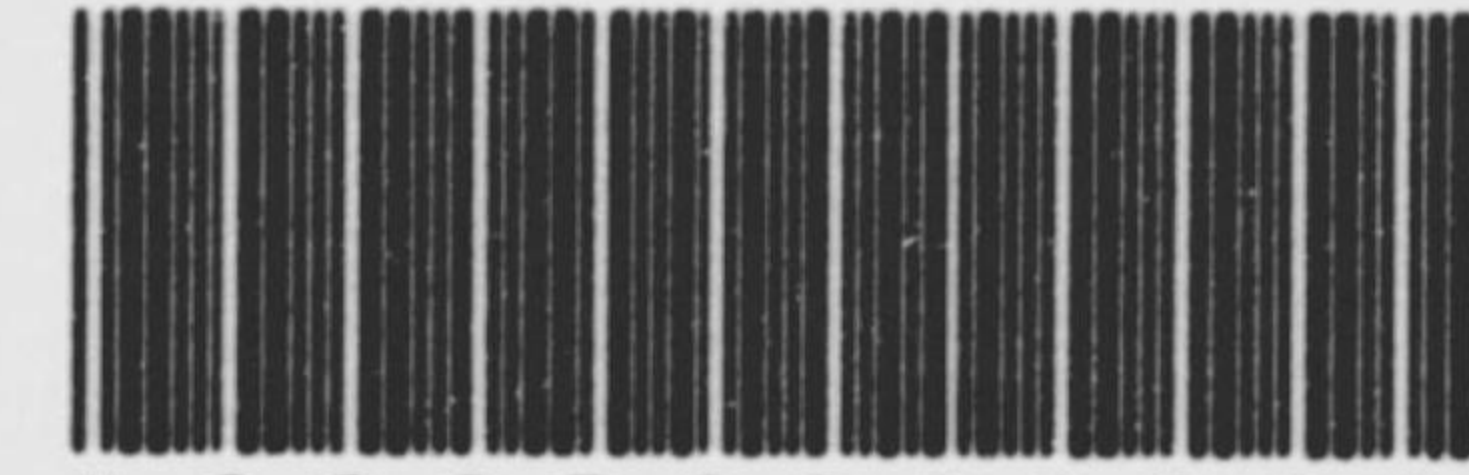


335  
H. 32



\* 0 0 2 5 8 2 9 0 0 0 \*

0025829-000

335.48-H32ウ

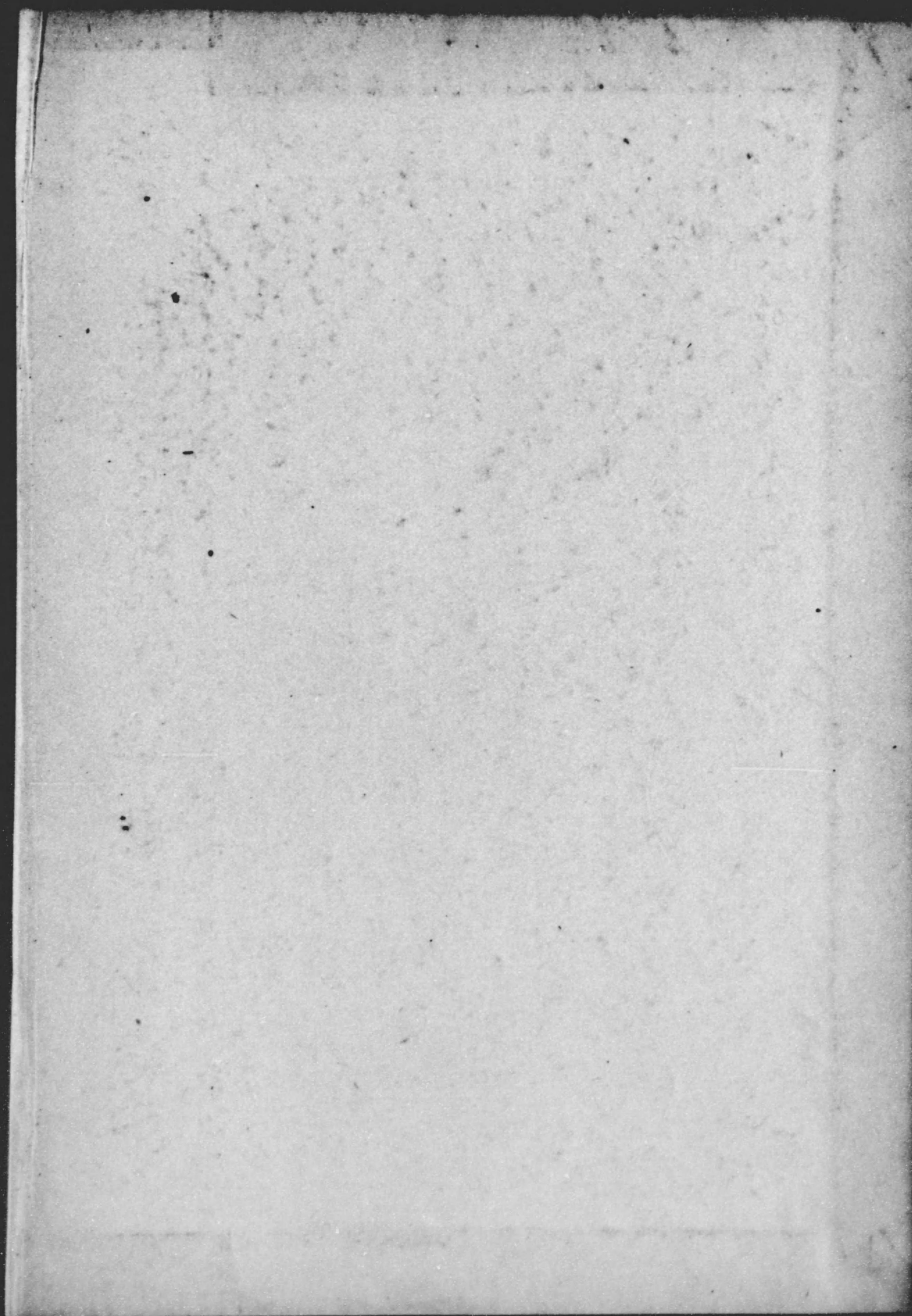
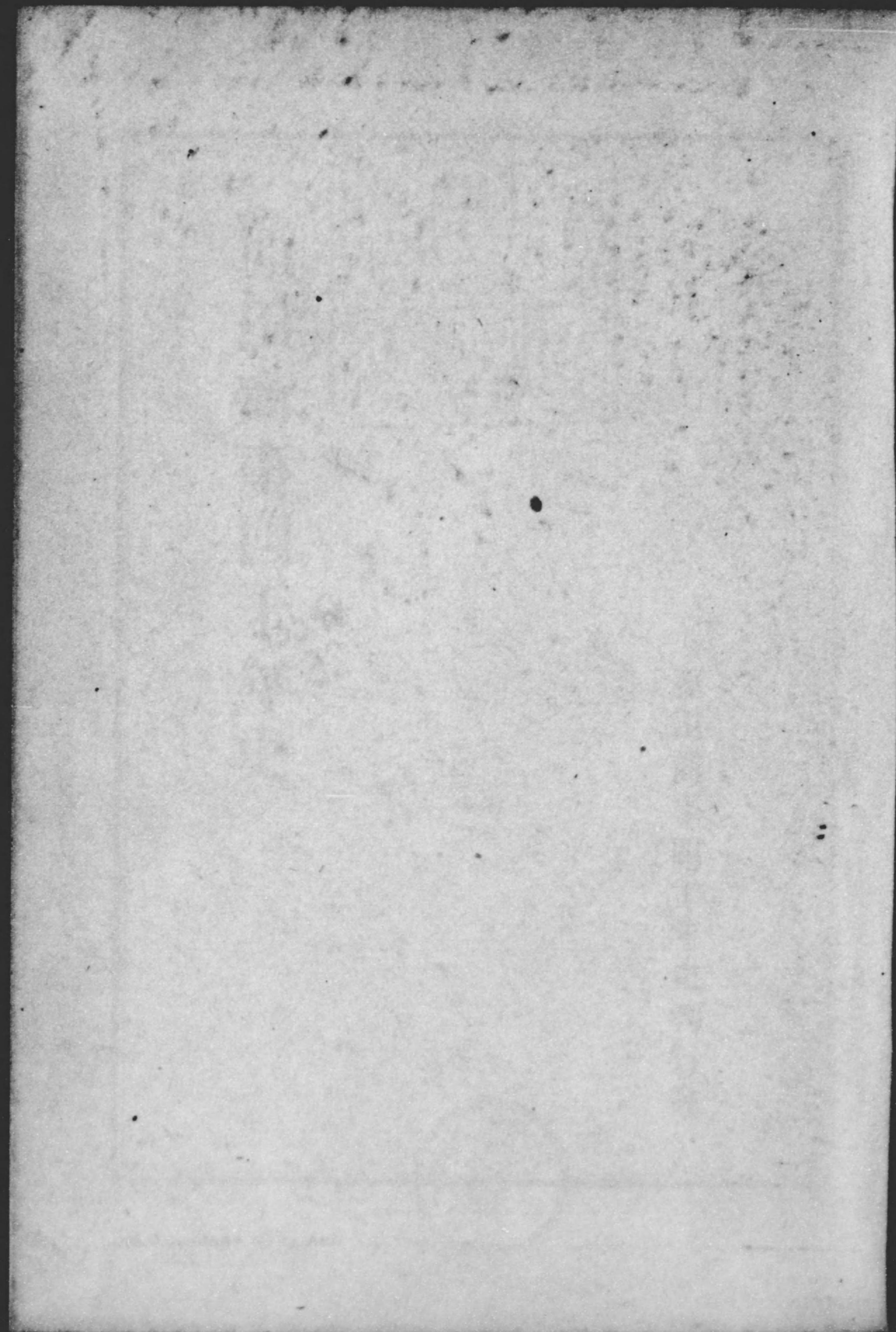
原田商事四十年史

原田商事四十年史刊行会

昭和19

ADF







335.48  
H 32



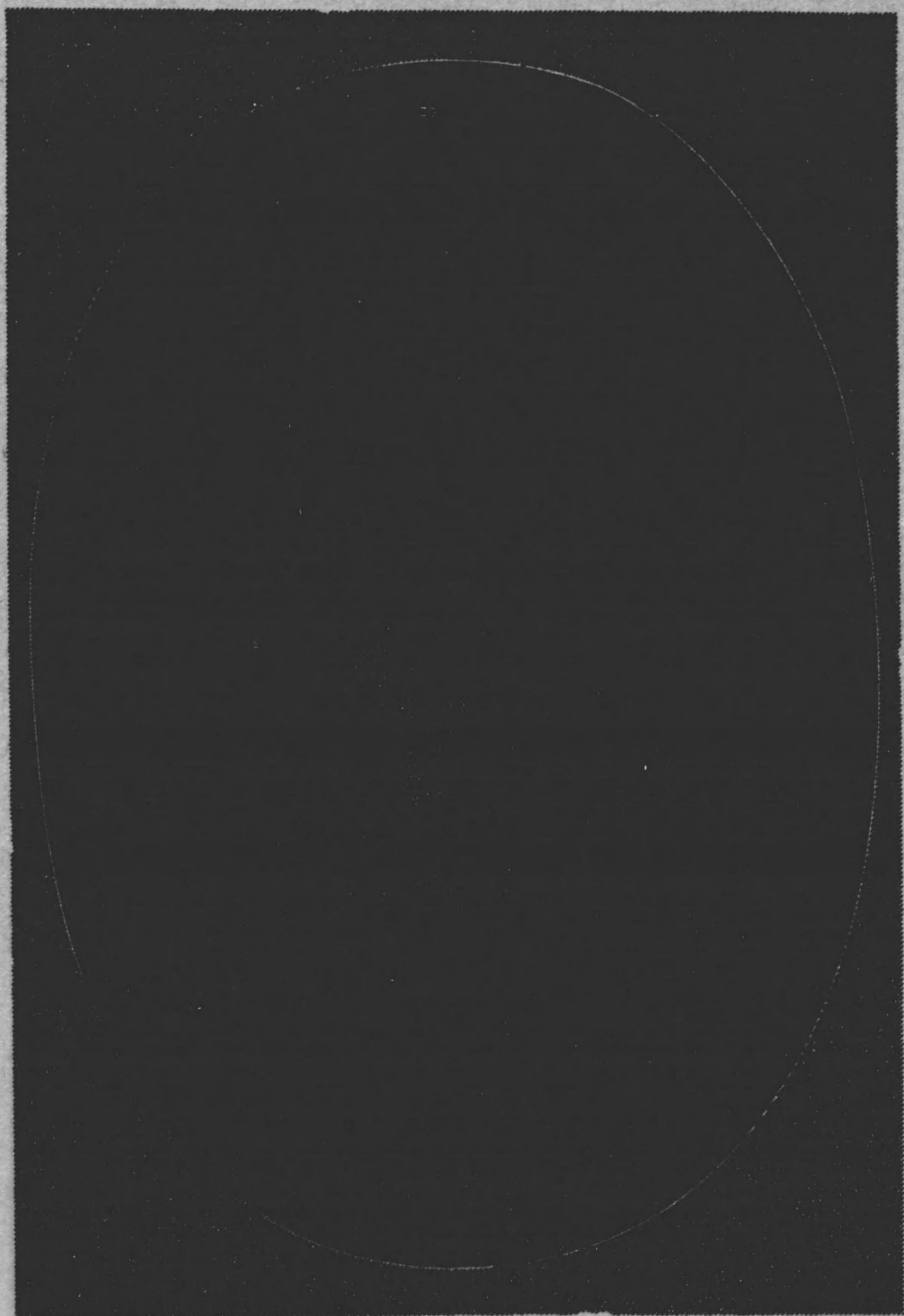
原田商事四十年史

原田商事四十年史刊行會

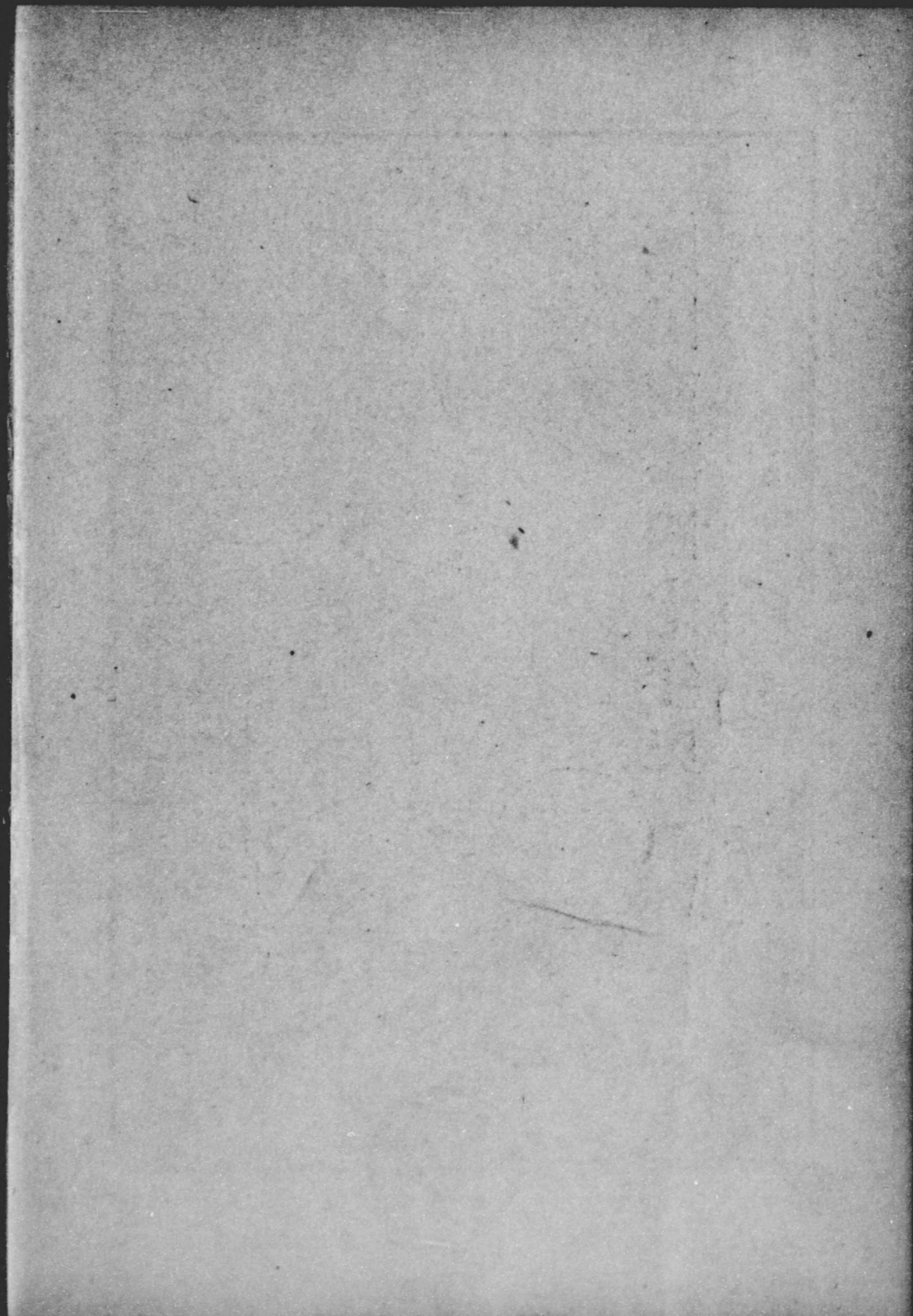


Handwritten notes: 81.000  
SE.H

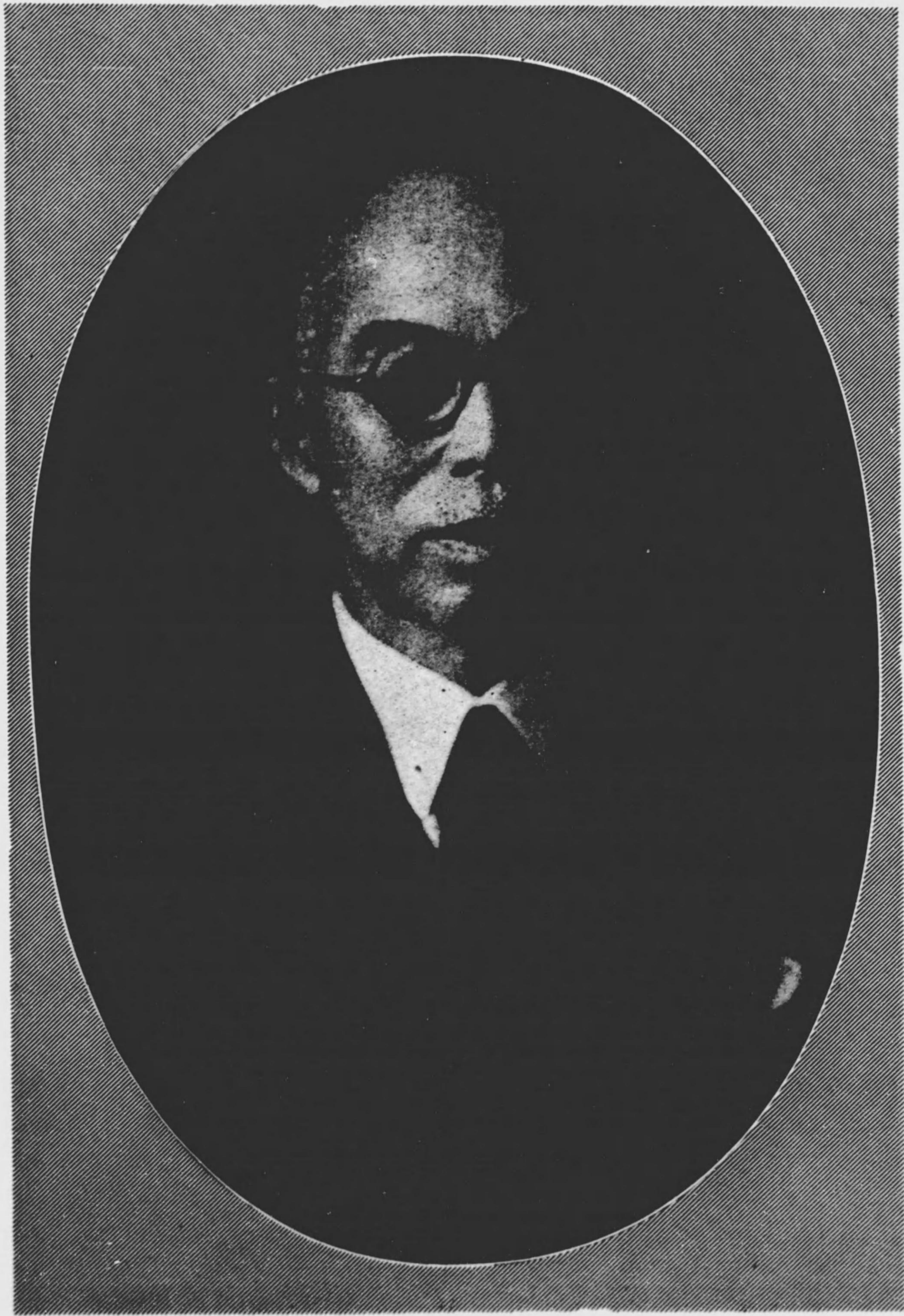




原田社長近影







原田社長近影



981  
109

## 序

本書の意圖するところは、原田商事株式會社の發展段階を、轉移する經濟構造との雙關する姿において把握せんとするものであつた。第一篇において、原田商會・個人經營原田組・合名會社原田組から現在の株式會社組織に至る諸過程を概觀し、第二篇において支店・



出張所・直傍系會社の主腦者の分擔執筆されしものを収録し、第三篇は附録として、偉大なる指導者社長原田猪八郎氏の人間的側面を盛り上げんことを企圖した。

原田社長が憂國の熱情迸しるところ、或は軍役夫二千を引具して第二軍鹽大塊敵前上陸に参加し、或は防長丸に死生を賭して軍需品輸送に當られ、或はまた戦後の滿洲經濟建設に先驅的役割を果された日露戦争後から現在迄、三聖代の世界史的大胎動期に、祖國と共

に興隆し來つた原田商事の歴史的諸段階を考察するとき、我々は今更ながら皇恩の無邊なる洽きに「御民吾」の感激を覺えざるを得ない。と同時に指導者の人格的純粹性が事業有機體の血と心を内面的に統一し、事業活動のいかに強き始源力となるかを茲に再認識せざるを得ない。

決戦下、今や國內體制の諸方策は新理念の下に結集されつつある。商事の性格にも基本的にその構造性を更改されつつあるが、原田商



事の諸劃定は既に成り、具體的な現實に逞しい進發をなしてゐることとは同慶に堪へない。

尙本書收載の内容は原田商事四十周年當時の執筆であることを諒せられたい

昭和十七年六月一日

原田商事四十年史刊行會

目次

緒言……………一

第一篇 原田商事發展史……………一

第一章 草創時代(第一期)……………三

第一節 草創當時の本邦經濟概觀……………三

第二節 二十五歳遂に獨立を決行……………九

    原田商會創立 藏内坑主の義援 日支貿易商會と取引 釜山支店設立

第三節 軍役夫二千を引具して第二軍敵前上陸に参加……………一六

    陸軍補給廠長の命により軍用品を納入 軍役夫二千を募集 碓泊場司令部  
    管轄下に活躍 鹽大塊敵前上陸に参加

第四節 ダルニー(大連)における新任務に活躍……………三三



當時のダルニー港 死生を賭して新任務を遂行 司令官の素懐と滿洲經濟  
建設の先驅的役割

第五節 北鮮航路と防長丸の座礁……………元

第二章 日露戰役後第一次歐洲大戰勃發迄

(第二期充實時代)……………元

第一節 日露戰後の經濟概観……………元

滿洲の投下資本展望 貿易・金融情勢と原田組

第二節 滿鐵會社の設立と埠頭荷役問題……………四

滿鐵會社の設立経緯 滿鐵荷役直營に反對 原田組運送部の閉鎖

第三節 原田組商事部の活動……………五

原田組商事部の獨立 滿洲奥地に商權を擴大 回覽簿に見る原田組の充實

第四節 安奉線廣軌鐵道改築に活動……………六

第三章 歐洲大戰後滿洲事變勃發迄(第三期建設時代)……………六

第一節 第一次歐洲大戰後の經濟概観……………六

第二節 奉天の大工業化と原田組の進出……………七

第三節 合名會社原田組の誕生……………八

好況による投機的思惑の禁止と堅實商策 合名會社原田組として新生

大阪・奉天兩支店の設置

第四節 歐米視察と第三國貿易への進發……………九

視察の動機、外國商社の代理店特約店締結

第五節 大正八年後における逐年別業績……………一〇

第六節 取引先の變遷と奉天兵工廠……………一〇

第四章 滿洲事變以後現在迄(第四期飛躍時代)……………一〇

第一節 滿洲事變と原田組……………一四



第二節 滿洲國の經濟建設工作……………一五〇

第三節 鐵鋼統制と原田組の對策……………一五二

第一項 原田組と鐵同志會……………一五二

第二項 原田組金物部關係各組合(昭和十一年度)……………一五三

第三項 日滿商事と滿洲鋼材組合……………一五四

第四節 原田商事株式會社として新生……………一五八

第五節 傍直系生産事業の展望……………一六〇

第六節 圓域計畫貿易と第三國貿易……………一六二

第七節 新世紀に即應しての機構改革……………一六三

第二篇 支店・出張所 直・傍系會社 發展史……………一六五

第一章 奉天支店史……………(兼)原田商事奉天支店長 出口重雄 一七〇

第二章 新京支店史……………原田商事常務取締役 小川邦雄 一七五

第三章 東京支店史……………原田商事東京支店長 砂川武夫 一七九

第四章 大阪支店史……………原田商事常務取締役 大浦徳身 一八〇

第五章 名古屋出張所史……………原田商事名古屋出張所長 米田寛 一八二

第六章 北支營業所史……………原田商事北支營業所長 大塚平八郎 一八七

第七章 撫順精機工業株式會社史……………撫順精機常務取締役 出口重雄 一八五

第八章 東北特殊鋼株式會社史……………東北特殊鋼常務工學博士 石垣豊造 一八七

第九章 滿洲亞鉛鍍株式會社史……………滿洲亞鉛鍍專務取締役 園田殿喜三 一八八

第十章 原田冷凍機株式會社史……………原田冷凍機支配人 永田己代治 一九〇

第三篇 附 錄……………一九二

第一章 原田家再興の念願……………一九四

第二章 原田社長の公的活動……………一九七



第三章 歐米に遊びて（抄録）…………… 三〇四

第四章 畏友四十年の事業史を回顧して…………… 難波勝治氏 三〇九

第五章 原田商事創立滿四拾年を祝して…………… 藤田秀助氏 三二四

後 跋…………… 三三九

### 緒言

悠久皇紀二千六百二年、歴史を護持すること高き日本民族が、潑刺たる創造力と強靱なる傳統力との總和の上に、雄渾無比の大布石をうつて、皇師神兵の征くところ赫々の大戦果を收めつつある世紀の大轉換期に際し、茲に原田商事株式會社の創業第四十周年の記念日を迎ふることは、意義一入深いものを感じると同時に、明治・大正・昭和三聖代の餘澤に浴ねきつゝ、一路向上發展、社礎愈々堅き四十年史を顧みて、皇國に生を享けたる喜びを深く胸奥に銘記せざるを得ないのである。

原田商事株式會社の創業は、明治三十五年六月下關における原田商會の開業に始る。時恰も日露戦役勃發の寸前に當り、風雲愈々急にして間もなく戦端の火蓋は祈られるに至り、幾十萬の貴き魏練を國柱となし、數十億の國帑を費し國運を賭して東亞の仇敵露國をして極東より驅逐したのであるが、此の間陸軍碇泊場司令部の編成せらるゝに方り、軍役夫二千を供給して第二軍の敵前上陸に些か貢献するところがあつた。



而して戦後に來た大陸經綸は正に滿洲大陸の政治・軍事・産業・經濟等々各部門に亘つて、その諸經營の實質的確立と急激なる開發にあり、又一に國民進出の要望にあつた。此の國家的政策に即應して、商舖を下ノ關より大連に移し滿洲開發の先驅をなし、日本と一徳一心不可分の關係に立つ滿洲帝國の建國後は、内地資本を滿洲國に投下せしむる一役を努むる等、ひそかに快心事となしてゐる一事である。

原田商事株式會社は本店を大連に置き、奉天・新京・東京・大阪に各支店を、ハルビン・北支・名古屋・小倉に各出張所を設置してゐるが、その事業は歴年的にも地域的にも商權の主體は滿洲にある。随つて流用資金の大部分は此の地に投下せられ、對外信用も亦茲に集結せられてゐると云ても過言ではない。尙近時に於ける原田商事の經營方針につき一言すれば、大連の地位が昔日と異り、統制強化に伴つて自由港としての機能を喪失し、次第に一地方都市に變じたことである。素より地方的産業も絶無といふ譯ではないが、是を滿洲國といふ大局から見れば誠に微々たるものといふべきで、今や奉天・新京の政治的・經濟的樞要の兩都市を始め、鞍山・本溪湖・撫順その他の地方工都に力を延べ、原田商事の有する人、物、資金を適度にこれらに分つところの、所謂多角的地域的經營を採り、更に北支に對しては海路

による大連、鐵路を利用し得る奉天よりして、其の連絡供給を圖ることこそ、最も有効適切なるべしと思惟され、現在着々其の方向に進みつゝある。

次に内地に於ける原田商事の現況を述べれば、大阪支店は從來エドガー・アレン鋼の販賣を主業としてゐたのであるが、事變前爲替管理強化のため輸入減退し、外國品依存を拂拭して機械工具の販賣にも手を染めるに至つた。

東京支店も十數年來大阪支店と同様の徑路を辿つて來たが、東北特殊鋼の創立以來、地理的に同社製品の販賣に力をそぐことゝし、且つ帝都に駐としての特別責務を完遂して來た。

以上は原田商事の概括的現況であるが、原田商事の直系もしくは傍系會社として、仙臺に東北特殊鋼株式會社、滿洲における撫順精機工業株式會社、原田冷凍機株式會社及び關係會社として鞍山に滿洲亞鉛鍍株式會社を有してゐる。

東北特殊鋼株式會社は、昭和十二年四月創立、同十四年夏、軍〇〇工場となつて以來、時局の要求と軍の懲滯により、第二次擴張に着手し、建築資材の缺乏等諸般の條件頗る不利なるにも拘はらず、よくこれを克服し、遂にその竣工を見るに至つた。乃ち主要工場たる鍛造工場は昭和十六年一月試運轉を舉行し、次で壓延工場は二月中旬、製鋼工場は三月に夫々試



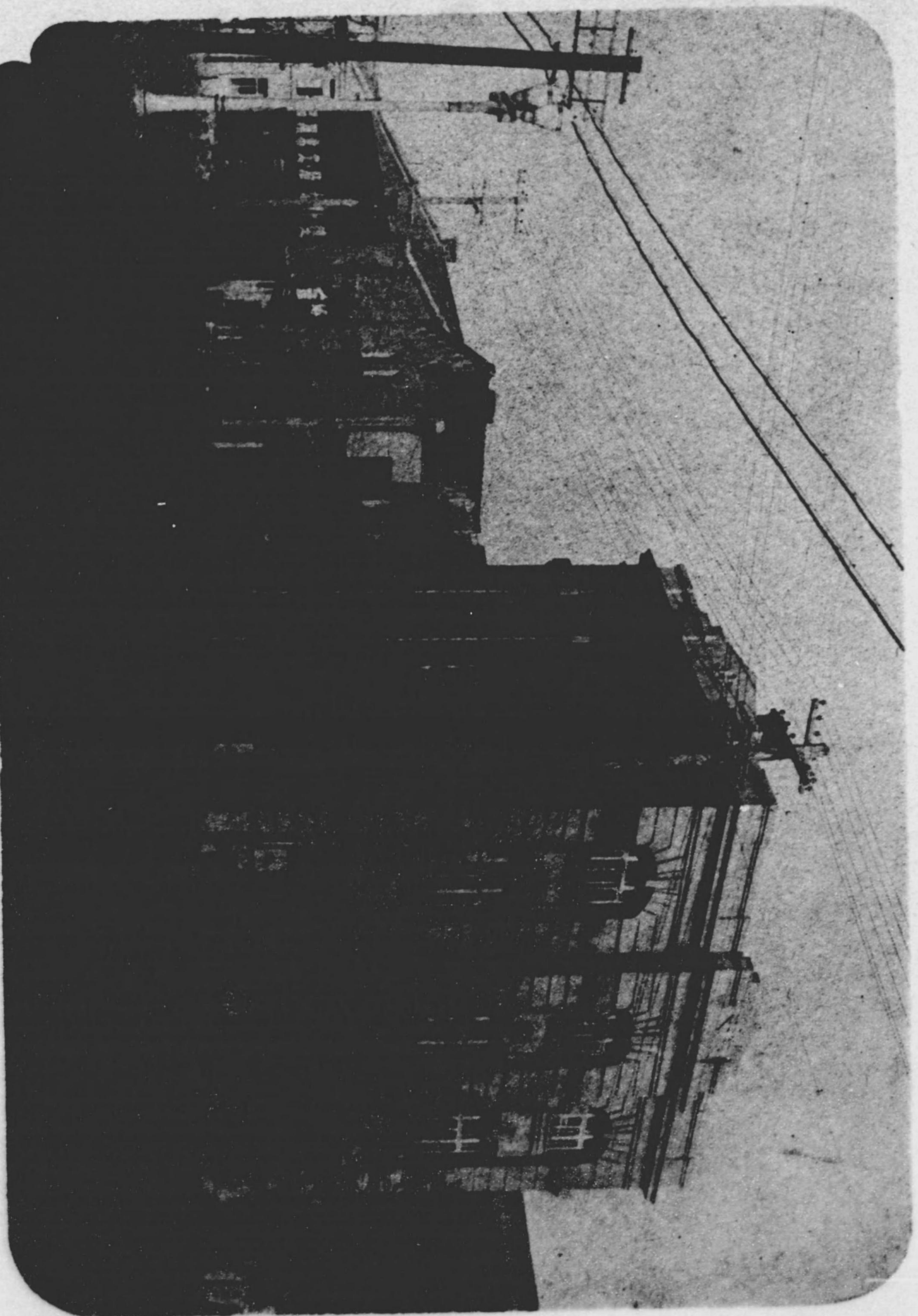
運轉火入式を行ひ、六月七日朝野貴顯の人士を招きて盛大なる竣工式を執り行ひ、今や同社製品高級高速鋼キリン・ハガネ並に、特殊工具鋼の聲價は隆々と揚り、長町工場もまた特殊鋼板用ドリル其他を短日月にして完成し、軍の賞讃を受くるなど、其の洋々たる將來性に至つては刮目すべきものがある。

撫順精機工業株式会社は幸ひ滿洲國經濟部の諒解もあり、且つ南滿陸軍〇〇廠を始め航空その他重要工業者の支援、經驗ある技術陣容の強化と相俟つて、本格的操業をつゞくるに至つたが、これら各支店ならびに直系・傍系等關係会社の現況は、夫々分擔執筆をされることになつてゐるので、茲には省略する。

回顧すれば、原田社長が年齒僅か二十有五にして獨立されてより以來滿四十年。不動の礎を築くに至つた「逞しき建設」の過程を、章を改めて叙べて見たい。

## 第一篇 原田商事發展史





原田商事大連本店





## 第一章 草創時代(第一期)

### 第一節 草創當時の本邦經濟概観

原田商事創業以來の經營對策は、全く日滿經濟の發展段階に對應しつゝ、擴大、再擴大せることは勿論であるが、かゝる觀點に基づき原田商事そのもの、創業を記述するに先だち、應當時の經濟事情に觸れて置きたい。



原田商事の前身原田商會の開業は明治三十五年であつて、この年は纖維工業の基礎が漸く確立され、即ち次表に見る如く纖維工場は工場數において五六%、職工數において六四%を占め、その中心は綿絲紡績・製絲織物業であつた。

纖維工業における機械生産が、日清戰役以後明治三十五年頃にかけて確立され、國內需要を充し、輸出に轉じた如き急激な發展に引き較べて、重工業、特に機械製造における國內生産の發展は未だ著しいものはなく、吾が國大小の工業上に利用せられたる機械の大部分は



種別	工場		合計	職工		合計
	原動力ヲ用フ ルモノ	原動力ヲ用ヒ ザルモノ		男	女	
織維工場	一、八七四	二、五〇九	四、三八三	三、六九九	二、六、四一七	二、六九、一五八
機械工場	二四九	一八七	四三六	三、三七九	九八三	三、四、三六二
化學工場	二四七	七五	一、〇〇一	三、六一五	四三、六一五	八三、三九八
飲食物工場	二五〇	七三三	九八三	一六、八三七	一三、三六	三〇、一五三
雜工場	三三〇	三三三	七三三	二〇、七二九	一一、五七九	三三、三〇八
特別工場	一五〇	一三四	二七四	四三、三六三	七、三五二	五〇、六一四
合計	二、九六〇	四、八三〇	七、八〇〇	一八五、六三三	三三三、二六九	四九八、八九一

概して外國よりの輸入品たるを追想する時轉々寒心に堪えざる状態にあり、純機械類の輸入は、二十年より三十五年の間に、二百二十萬圓から千三百二十一萬圓に激増した。

しかし乍ら、新興日本が先進諸國との對立・抗爭の裡に成長しなければならぬといふ特殊事情のために、官營工場を中心とした兵器・船舶及び鐵道用品の生産は、自給の目的を以て助長せしめられた。即ち明治三十三年の官立工場は二十七、馬力六千百、労働者三萬六千、このうち機械工場は十五、四千六百馬力、労働者三萬一千八百餘であつた。かくの如く官營

工場に於ては、重工業就中兵器運輸機の生産において特殊性を示してゐたが、總體的に見れば、重工業は微々たるものであつて、三十五年度の工場統計によれば、

工場種類	工場数	原動力工場	馬力数	原動力なき工場	労働者数
機械製造業	一三三	一〇二	五七一	二五	七、六七〇
造船業	五〇	二四	一、〇〇〇	二六	一四、八五七
器具製造業	一九〇	九六	三〇	九四	一〇、二一〇
小工場	四三六	二四九	一、八九二	一八七	三四、三六二
工場總計	七、八二二	二、九六一	九、五三七	四、八三〇	四九八、九六一

の如き未發達の状態にあつた。  
次に當時の鑛業を明治十年・二十五年と比較すれば、

年度	會社數	資本	労働者	金	銀	銅	鐵	石炭	石油
明治十年	一	一	一萬人	九三貫	二、九四五貫	六五七萬斤	八千噸	四九九千噸	一〇千石
二五年	一	一萬圓	八萬人	一七六貫	一五、八六九貫	三、四六〇萬斤	一九千噸	三、一七五千噸	三萬石
三五年	一五	一、九九九萬圓	一四萬人	七三三貫	一五、三七一貫	四、八三九萬斤	二九千噸	九、七〇二千噸	八七六千石



となつて、近代的大工業の基礎的要素である鑛業も、徐々ながら發達しつゝあつた。鑿岩機の如きは十五年に壓縮空氣を利用したシユラム機が輸入され、從來の手掘の二倍半乃至三倍の生産力を持ち諸鑛山に普及したが、三十五年に至つて、足尾にウォーターライナー機が輸入され、我國鑿岩技術を根本的に變革した。この能率はシユラム機の六・六倍、手掘の十六倍の力を持つてゐた。

鐵鋼も兵器國內自給の目的のため、官營工場において兵器製造と結合して先づ發達した。明治十五年築地造兵廠がクルップ式坩堝製鋼工場を設け、我國最初の西洋式製鋼が始められて發展の緒についたが、明治三十四年には八幡製鐵所が設立せられたのである。明治三十三年の國內生産高を見るに、銑鐵において二萬三千噸、鋼及鋼材において一千噸に過ぎず、その多くは輸入に俟つ状態で、輸入高は銑鐵合金鐵において二萬四千噸、鋼及鋼材において二十四萬三千噸に達してゐた。

貿易趨勢を統計について見れば、明治三十五年には、明治元年に比し、輸出において二十倍、輸入において二十五倍に達する發展を示してゐる。すなはち、

年 度	輸 出	同 上 指 數	輸 入	同 上 指 數	合 計
明 治 元 年	一、五五五 <small>萬圓</small>	一〇	一、〇六九 <small>萬圓</small>	五	二、六二四 <small>萬圓</small>
一〇年	二、三三四	一四	二、七四二	二二	五、〇七六
二〇年	五、二四〇	三八	四、四三〇	二〇	九、六七一
二五年	九、一一〇	五六	七、一三二	三三	一六、二四二
三〇年	一六、三二三	一〇〇	二一、九三〇	一〇〇	三八、二四三
三五年	二五、八三〇	一五八	二七、一七三	一二四	五三、〇〇三

といふ飛躍的な量的増大を示すに至つた。而して二十九年には清國との通商條約が締結せられ、次いで上海・厦門・漢口に我専有居留地の設置、上海・牛莊・芝罘・漢口等十一領事館、更に香港・新嘉坡・マニラ等における領事館の設立と、我が經濟的進出を保護する機關が設置された。そして二十年以降、天津・新嘉坡・孟買等における三井物産の支店擴張、上海・天津・牛莊・孟買・香港における正金銀行支店の設置等、日本の貿易伸張を反映し、且つ助長する諸機關の東洋諸要地における増設が行はれた。かくて三十四年輸出貿易に於て東洋貿易は約半を占むるに至り、韓國にあつては千四百餘萬圓の輸入額中、我が商品が千百



餘萬圓を占め、完全に支配權を握つたのである。

かゝる産業並に貿易の發展は信用の擴大を招來して、銀行企業の著大な伸長を齎し、明治三十五年には、全國四十六の農行銀行が設立され、總資本二千八百萬圓に上り、貸付は二千八百四十萬圓となり、一方勸業銀行は一千七百三十二萬圓であつた。そしてこの金融機關は實質的には中小商工業者及び地主・自作農を對象とし、その没落を防止する役割をもつたのである。明治三十三年の日本興業銀行法に基き、各種證券擔保貸付、各種債券の應募又は引受、預金、證券に關する信託業務を目的として日本興業銀行が設立されたのもまた明治三十五年であつた。

しかし一方、明治三十三年暮熊本第九銀行及び熊本貯蓄銀行の支拂停止を發端として、九州・關西・關東等、全國に亘つて銀行破綻が續出し、日銀の救済資金等恐慌防止策が講ぜられたが、中小銀行資本の破綻は廣汎深刻であつて、この恐慌を契機として政府もまた小銀行資本の合併政策をとり、五十萬圓以下の銀行設立を認めないことにした。此の結果、拂込資本高は増加したが、銀行數は三十四年を頂點として、以後漸減傾向を辿り、明治三十五年を迎へたのである。

## 第二節 二十五歳遂に獨立を決行

かゝる經濟情勢下にあつた明治三十五年六月一日、原田商事株式會社の前身原田商會は、下ノ關において呱呱の聲をあげたのである。時に現社長原田猪八郎氏は齡僅かに二十五。(獨立の動機については附録「原田家再興の念願」を参照されたい。)

當時、某商館に勤務されてゐた氏には開業資金とてある譯ではなく、無名の一青年に融通してくれる特志家もあらう筈がない。財産といつては三四百圓の貯蓄があるばかり。これを資本として小店舗を借り、椅子とテーブルとを都合して形ばかりの造作をしたのであるが、いかに物價の安い時でも虎の子の貯蓄は見る／＼残り尠くなつた。しかし覇氣に燃ゆる氏には、たゞ前進と突撃の意欲が動くのみで、蒼空のやうな朗かさが全身を支配し、給仕を一人備ひ入れて留守に當らせられた。

山本提督は九軍神の鬼神も哭く壯烈さを讃へて「今の若いものはなどと口はばつたきことを申すまじきもの候」と、書翰の一駒にいはれてゐるが、いつの時代にも青年の意氣は貴



く、青氣の躍動するところ歴史はつくられてゆくことを國史は實證してゐる。氏の獨立はと甚だ小ではあるが青年客氣が鬱勃するところ遂に起たしめたのであつて、これを成熟した年長者より見れば猪突にひとしく、随分あぶなかく見えたと相違ない。しかし、そのあぶなかしさ、猪突さを克服して事を爲さしめる熱情は、青年にのみ賦與された特權であつて、この青年の氣魄を昂揚させその冀足を伸張せしめることが、國家においても、事業においても、經營の妙諦と思はれる。

氏の獨立開業はまさに物質的には赤手空拳に等しかつたが、心的内容に於ては母の靈と共にある安心立命と、原田家再興の熱願とに溢れてゐたのであつて、この精神的豊富は唯一の投下資本でもあつた。

開業と同時に店を給仕に任せ——といつても稀にくる書狀の收授と單なる留守居に過ぎなかつたが——氏は筑豊の炭田、門司、若松等を商用で駆けすつた。が、何處に行つても殆んど相手にされず、何がしの汽車賃にさへ心を煩はし、一錢の出納にさへ細かい心遣ひをせねばならぬ苦難の日が續いた。

處が開業翌月のある日、田川郡（福岡縣）の藏内炭坑に赴き、藏内坑主と直接面會し氏は

率直に「私は今回下ノ關に小さい商會を始めました。熱意をもつて充分御期待に副ふべく努力いたしますから、どうか何なりと炭坑の用品を命じて下さいませんか」と、心から頼んだ。藏内炭坑は筑豊の名家藏内門閥の經營になるものであり、従つて鑛山用諸機械、補助材料等は在筑の巨商と直接取引をしてゐた炭坑であつたから、當時の原田商會など齒牙にもかからぬ存在であつたが、藏内氏はちつと氏の顔に視線をそそがれつゝ、「幾歳かね」と問はれたのである。最初質問の要旨がよく判らぬほど眞剣に取引のことを考へて居た氏は、やゝ間を置いて「二十五歳」ですと答へた。

「あんたも苦勞してゐるね。私が炭坑を始めたのは矢張二十五の時だつた。創業の當時は誰でも苦勞するものだ。しかしその苦勞が大きければ大きいだけ、きつと大きい楽しみが来るものだよ。苦勞にめげずに、自分を失はずに、あくまで至誠をもつて、がんばり通さなければならぬんだよ」。

諭されるやうな思ひ遣りの厚い優しい聲であつた。當時藏内氏は四十位の方であつたさうだが、勁々たるこの事業家の、人間としての面を割つて、海のものとも山のものともわからぬ當時の氏に接せられる氣持に、久しく人間の情愛に飢ゑてゐた氏は泪がこぼれ落ちさうに



なるのを我慢する事が出来なかつた。まごころは必ず人を動かす。否、藏内氏のやうに人生の芽夜をきり拓いて来た處世の達人は誠心を汲みとる大きい力を持たれてゐたのであらう。それから話は商用のことよりも、しんみりした苦勞のあれこれを聞いて貰つたり聞かして頂いたりしたさうであるが、聽て藏内坑主は用度課長を呼んで

「原田商會の原田君だ。何か註文してやつて呉れ、現在他に發註するやうになつてゐるものでもよいから……。」と、命ぜられた。

用度課長は要領さうに警戒的の眼で氏を見てゐたが、それでもワイヤローブ・瓦斯管など、金額にして約三千圓ばかりの註文をくれ「納期は非常に急なんだが大丈夫でせうな。遅らされると非常に迷惑するんだが……。」と、何回となく駄目を押された。氏は

「大丈夫です。必ず納期前迄に品物を納めます」。強く約束して、田川郡後藤寺から下ノ關に躍る胸を抑へて直ちに歸つたものゝ、さて一介の書生に無保證・無擔保で信用貸してくるところはなく、其の晩、夜行で大阪に急行された。そして多少の縁故を辿り、汗と油で足を棒にして心あたりを訪ねたが、商賣堅い大阪商人の一顧を得る所とならず、いまは絶對絶命、さいごの據りどころとして、神戸の大平氏に衷情をうち明けてその義俠心を懇請された

のである。

大平氏は當時かゝる炭坑用品を取扱つてゐた輸入商日支貿易商會の營業主任であり、同じ九州人として前から面識があつたので非常に同情せられ「註文傳票もあり信用貸してあげれば納品後一週間以内にキャッシュで支拂ふといふ君の氣持は良く判るし、僕個人としては君を絶對信頼してゐるので、直ぐにも貸してあげたいが、私は一個の使用人に過ぎず獨斷で宰領するわけには行かない。このマネージャーは英人で、一度信用すれば後の取引は順調に行くと思ふが、何しろ最初の事でもあり、或は駄目かも知れないが僕からも良く頼んで見てあげよう」といふことになり、大平氏からマネージャーに色々事情を割つて話して貰つたが、當の英人は「大平さんは長い交際で信用を置いてゐるが、その原田氏は一面職もない人であるから、直ちに向ふの希望を納れる譯にはいかない」と強く勿ねつけられてしまつた。併し直接逢つて話せば、國籍は違つても話は判つてくれると思ひ、大平氏の斡旋で面會し氏は自分の立場を懇々と披瀝されたのであるが、彼は「私は君と逢つて信用のできる人間だと思ふ。しかしビジネスとプライベートの問題とは又別個であつて、クレジットなしに貸す譯にはいかぬ」と頑強に否定されてしまつた。成程流石に商賣上手の英人であると一面感



心したものの、氏としては此の交渉を成立させなければ、原田商會をして獨立早々頓挫の悲運に陥らしめる結果となる。それだけではない。藏内坑主の義心に對しての人間の責務は一個の片々たる原田商會そのもの、失敗といふが如きことだけでは濟まなくなる。義に感じて成敗利鈍を問はないのは原田家を脈々として流れる血の傳統である。氏個人としての感慨はともすれば慘めにならうとし、こんなに頭を下げて聞き入れてくれない外人に見切りをつけたい氣持もあつたが、氏は原田の人間一生を買つてくれた藏内氏の道義を考へるとき、個人的感情は雲散霧消してゆくのを覺えた。その日は更に頑張つて色々頼まれたのであるが、どうしても納得してくれないので、一旦は引き下がられたもの、外に當があらう筈がない。翌日午前十時頃、再度面會を申込まれると「まだ居たのか」といつた調子の膠ない返事である。しかし氏は更に誠心を吐露して

「これをどうしても成立させて頂かねば、私の一生に懸る瀬戸際であり、恩義を感じる人に迷惑をかけねばならぬ。どうか信用貸で貸して貰ひたい」。

大平氏も側面的に協力し親身になつて頼まれたが、どうしても駄目の一點張で午後一時近くに及び、「君がそこに居ると晝食も食べに行けない。もう歸つてくれ」と言ふ。「あなたは

晝飯が食へない位ですむが、私は一生食へなくなる。どうしても駄目ですか」と應酬するとそのマネージャーは微笑さへ浮かべて釋然となり、

「君の眞剣な氣持は良く解つた。ノー・クレジットでも構はぬ 私は君を信用する」。

かくて取引は成立し、藏内坑主に迷惑をかけずに済んだのであるが、この日支貿易商會と取引をするやうになつて、「原田は日支貿易と取引をしてゐるから信用がおける」と、あちらこちらから信用貸されるやうになり、原田商會の基礎は漸次かたまつて行つたのである。大平氏は其の後故郷日向に歸られ閑日月を愉しんで居られるが、先年來達の折歡迎會が催され、談深更に及んだ。當時を追想して兩氏の感慨更に深いものがあつたであらう。

原田商會はかくの如く苦難に満ちた出發ではあつたが、順次商權を擴大しつゝ、筑豊炭田に要する各種資材を取扱ふと共に、門司港に出入する船舶用品の納入に染手し、商會そのもの、機構も、鐵鋼機械部を持つに至つた。

かうして下ノ關に於ける商會は順調な路程を辿り始め、いくらか軌道に乗つたとき、氏の心境に一轉期が來た。といふよりも、氏の性格の中にひそむ海外雄飛のひたむきな熱情が、海を隔てた向かふに腫をそゝがせ始めた。時恰も明治三十六年三月、京城より釜山に通ずる



京釜鐵道の建設が始まつたので、勃々たる雄心を抑へかねてゐた氏は直ちに釜山に向ひ、釜山支店を置いて、京釜鐵道建設資材を取扱ふことになつた。當時店員二三人乍ら、獨身の氏は海外（韓國は未だ合併前であつた）に身を置くといふだけで、何か満ち足りた氣持で縦横に活躍をされたのである。

餘談に亘るが、その當時、釜山支店の店舗の二階に間借りをされてゐた松本勝太郎氏は非常な奮闘家で、氏の畏敬措く能はないものがあつたが、果せる哉、後に松本組といふ土木建築業を經營し、現在は功成り名遂げて貴族院議員（多額納税議員）であり、老來尙矍鑠として國事に奮闘して居られる。氏との交遊四十年、淺からぬ因縁を思ふにつけ、克く成すあらんとする士は、青年時代を無爲に過すことがあつてはならぬと思ふ次第である。

### 第三節 軍役夫二千を引具して第二軍敵前上陸に参加

釜山で京釜鐵道建設資材を取扱はれてゐる間に、日露間の物擾は愈々騒然となつたので、

氏は釜山支店を人に譲つて下ノ關に歸來し、軍の仕事に専心拍車をかけられる事になつた。

既に史に明かであるやうに、明治三十三年に起つた支那の團匪事件——これは支那皇室に深い資縁をする端郡王が首領となつて義和團を起し、北京城を包圍するに至つて遂に國際問題化し、福島安正將軍が總指揮官となり、聯合軍を率ゐて鎮撫に當られたので、その重圍は解かれた。然るにロシア政府は北京に小數の兵を派遣せるのみで、竊に西伯利亞鐵道に沿ふて大軍を集結し、日本に壓迫を加ふるに至つたので、茲に七博士を始め民間國士の蹶起するところとなり、ロシア討つべしの聲は澎湃として國民的輿論となつて湧き上り、將に一觸即發の事態にまで展開してゐた。

その頃、下ノ關における原田商會は、門司に在つた陸軍補給廠の一御用達として出入を許されてゐたのであるが、明治三十七年二月初旬のある夜間一時頃、氏は陸軍補給廠から「至急出頭せよ」との急電を受けられた。數日來の風邪のため高熱に呻吟しつゝあつた氏は「いよく戦争だな」と直感し、病床を蹴つて起き上つた瞬間、惡感はずつ飛び、高熱を忘れ、急いで身仕度を整へられたのである。當時はまだ關門連絡船はなく、商用のために一隻の小舸を所有して居られたので、氏はそれに飛びのられた。纜つなつてゐた小舟のともすなを切ると



舟は潮流の早い關門海峡の星空の下を走り、如月の刺すやうに冷めたい朔風が熱ばんだ身體を絶え間なく吹き続け、陸軍補給廠内に入ると緊張し切った顔が戦端開かるの印象を濃くし、物々しい空気が漲つてゐた。

氏が豫ねて顔見知りの三井・三菱・自念組等々の首腦部の顔も見え、所長の嚴肅な司會の下に、一々宣誓を爲さしめられたのであるが、氏への命令は、官衙組織に必要な調度品並に陣營具等の資材を、一週間以内に調達すべき任務であつた。この發註命令の價格は約七、八萬圓のものであつたが、これは現在の氏にとつては一千萬圓位に相當するもので、若い血は燃えずには居られなかつたであらう。

氏は、「これで男になつたぞ」と思ふ一面、征野に立たぬ身の祖國に對する唯一の御奉公の道だと思ふと、ぢつとして居られなくなり、其の後殆んど五日間、睡魔と闘ひ風邪を克服しつゝ、店員を督勵して東奔西走、豫定の納期より二日も早く納品をなし、これが軍當局の好心證を得て、陸軍碇泊場司令部の編成せられるや、軍役夫二千の供給命令を受くる素因となつたのである。

氏の關係した陸軍碇泊場司令部の編成は、奥大將の率られる第二軍の敵前上陸に備ふる

ためのものであつて、これに要する「舸子（船頭）・運搬夫・舟大工・建築大工等軍役夫二千を二週間以内に門司に集めよ」といふ命令を受けられた。これは光榮ある任務であると同時に、二十七歳の青年にとつては容易ならぬ任務であるが、それは一面、若冠にして克く軍の囑目するに足るほどの貫録と重厚性とを當時の氏が兼ね具してゐた證左をなすものであつて我々の夙に畏敬して歇まない處である。

軍役夫二千の募集には多くの困難と障碍との諸條件が横はつてゐた。世界一の大陸軍國と呼號されてゐた露西亞帝國との興亡をかけての大戦争であるだけに、動員令も廣汎な各層に亘り、苟も征野に立てる働き盛りの人々は既に戎衣をまつて召されて行つて居た。此の中から屈強の若者二千を募ることは甚だ至難な事であると共に、軍役夫である以上、生死は既に超越して御奉公しなければならず、衛生設備も少い滿洲の、しかも硝煙漂ふさ中への決死行であつて見れば、白面の一青年の手ではなか／＼の困難事であつた。幸ひ福岡の玄洋社には、氏の先輩が居たので経過を相談すると、任侠の血に富むこの先輩は一言の下に快諾し、忽ちにして福岡・佐賀・山口・大分の四縣から、血氣盛りの若者を募つてくれたので、直ちに資格検査をし豫定の員數を得ることが出來た。資格検査といつても、船頭や、建築大工、



船大工等に経験者か未経験者かを聞き、その熟練の程度を早々に見るだけで、性行の點に於ては良民の指彈を受ける徒輩もあつたことは止むを得ない次第であつた。

次に經濟的な問題もまた氏を悩ましたのである。即ち軍役夫を引具するといつても、雜然として連れて行くわけに行かないのは當然で、揃ひの厚司あつし（印絆纏）も必要であれば、脚絆も要るし、靴も要る。それに遠く滿洲まで連れて行くとなれば、一人につき三十圓や五十圓の色々な意味での仕度金も必要である。これを二千人として計算すれば相當の金額である。

しかし、此の募集や經濟的な苦心を克服して勢揃ひを終ると、更に第三の問題が横はつてゐた。といふのは、此等の軍役夫は惚忙の裡謂はば刈り集めただけに、何等の統制もなければ規律もない。一人々々に就いて見れば、無頼漢あり、食ひ詰め者あり、前科を持つ者ありで喧嘩はする、博奕ばくちはうつ、血を見れば収まらない兇暴な者も居て、雜軍といふか、烏合の衆といふか、とに角みな相當なものであつた。しかしこれは整然たる統制を求むるのが無理であつて「要はこれら二千の個々の人間を一點に凝集させ、身命を頌ち合ふところの一大有機體をつくり上げて、軍役夫としての十二分の任務を果させることが自分の使命であつて、士氣の振作は寧ろ今後に俟ち、自分の一舉手一投足が彼らに與へる影響の大きさを考へる時

只管、神に祈るやうな自戒を以て峻嚴に自分を鞭うつた」とは、氏の述懐される處である。

概論的にいへば、忍傷沙汰を好み兇暴無頼の人間は、性格的に強烈さを持つてゐるもので善用すれば却つて大きい力量を發揮する。その由つて來る處は安心を得ず、立命することが出来ないところに起因する。氏は母堂の歿後、言ひやうのない虚無の幾日を過した経験があるだけに、彼等の氣持を理解できると同時に、軍役夫として、再び故郷に歸還し得るや否やの懸念に曝されてゐる人々が、心理的な動搖を制馭することが出來ず、刹那的の自慰に身を置いてゐるのを見ると、氏は寧ろいぢらしさを感じる位であつた。

そこで氏は一日、軍役夫二千を和布刈神社わふかりじんじゃ（門司市に鎮座）神域に詣でさせ、宮司にお願ひして「彼等は軍役夫として遠く現地に挺身するやうになつて居るから、心からの立命を得られるやうに武運長久を祈願して戴き度い」と頼んだ。宮司の神に乞ひ禱いたづられる壯重な祝詞は、二千の魂に人間としての自覺を喚びもどし、感激が二千の魂を捉へた。氏は敬虔な態度で手づから一人々々に和布刈神社の護符をもたせ

「お前達はいままで離れ／＼の生活をし、お互に顔も知らず、生國も知らずに過して來た。しかし縁あつて今度かうして生死を共に誓ひつゝ、同船して現地に御奉公するやうになつたの



であるから、祖國のため、放縱の生活に流れぬやう充分氣をつけなくてはならぬ。さういつた意味の注意を掃き清められた玉砂利の上、神の大前で懇々と諭されたのであるが、相當の年配者も、若い氏の意のあるところを酌んで、いかなる艱苦に遭遇するとも絶對に命令に服従すべきことを決然として誓つたときは、人一倍感激性の強い氏の目頭は熱くなるのを禁じ得なかつたといふ。

かくて門司港出籠、朝鮮鎮南浦に待機すること約一ヶ月、再び纜を解き、奥大將の乗船八幡丸を中心に、輸送船團七十艘、軍艦宮古の護衛で敵東洋艦隊の出沒する日本海黄海を舳舻相銜んで北上し鹽大塊沖に投錨した。大作戦下に行はれたこの鹽大塊上陸こそ、日本における敵前上陸の嚆矢であつて、それだけに周到緻密な用意と、勇猛果敢な戦闘意識が全軍を支配し、氏の總宰する軍役夫二千、亦決死の覺悟を眉宇に漲らせて、死生を白哲の一青年原田氏に委ねた。男と男との心意氣は、今吾人が考へても血湧き肉躍るを覺ゆるものがある。

それはさておき、鹽大塊沖に投錨した輸送船團からは、續々と小艇が下され、小艇には兵員並に軍用品を満載し、投錨水域から約二里の鹽大塊海岸まで必死となつて氏の號令一下舸子(船頭)は力漕する。七十艘の輸送船團から下される小艇はひつきりなしに、文字通り

織るやうに陸につく。運搬夫は揚陸、運搬に大童であり、建築大工は直ちにバラックを建てる。碇泊場司令部に屬する氏は、輸送、揚陸、建築の指圖をとつて陣頭に指揮をとると共に、軍の機密的な指令下に多くの重要任務を擔當されて、この大任を完遂されたのである。

かくして多忙な日を送るうちに、氏等の任務は終了したので更に鹽大塊よりダルニー(大連)への新任務を軍より與へられて、氏は第二の基地に移動されたのであるが、此の頃はすでに該地の陸面は陸軍によつて、海域は海軍によつて制壓され、新作戦は奥地に機動されつつあつたのである。

#### 第四節 ダルニー(大連)における新任務に活躍

大連港は露西亞が東亞侵略の據點として多大の關心を有し、ダルニーと稱してゐた。即ち一八九四年(明治二十七年)日清戦争の結果、この地方は日本に接收されたが、露・獨・佛三國の干渉によつて涙をのんで支那に還付したのである。斯くて三國干渉に成功した露國は頻りに恩を清廷に售り、時恰も歐洲方面に進出を遮斷されて居つた際であるから、こゝに愈



極東經路の一大方策を定め、一八九六年にカシニ―密約を、次で一八九八年にはハバロフ條約を締結し、これによつて關東州の租借權と東清鐵道南滿線の敷設權とを併せ有するに至つた。

そこで露國は旅順を以て東方經綸の策源地と定め、この地に海陸軍及び民政諸官衙を集中して銳意防備を治めると同時に、大連灣内の一地點を卜して、歐亞連絡の一大商港を新開し滿洲經營の基礎を確立せんと企て、租借の翌月には實勢を踏査し、今の大連の地を選定して大規模な商港と市街とを建設することにしたのである。

ダルニー建設に要した經費は、第一期において築港費千八百萬留、建市費二百二十萬留で一九〇四年には、進んで第二期に移り、豫算三千萬留を計上して、埠頭四倍の擴張を計畫し將に工を起さんとしたが、時たましく日露の國交斷絶し、已むなく工事を中止するに至つたものゝ、大連は戰禍を蒙ること少なかつただけに、堂々たる發電所等もあり、市街は放射狀に區劃され立派な官衙もあつた。

氏が軍役夫二千を引具し、鹽大塊よりダルニーに移り、軍の命令で新任務につかれたのは丁度此の頃で、露國の企圖する大築港計畫は未だ半ばにも達してゐなかつた。

今の第一埠頭の如きも南岸の岸壁が半分ほどでき、北部は半成で、それより先は東の方にむかつて斜に飛石形をもつてブロックが水面から出てゐるのみで、附近一帶は紺碧の海であつた。甲埠頭は岸壁だけは完全に竣工して居たが、背後には貧弱な屋根だけの上屋が二棟ばかりあるのみで、いまの埠頭事務所や、十九號以下大倉庫の建てられてゐる附近は、大きな池が埋立未了のまゝ残つてゐる状態であつた。

第二埠頭の東側と北側は、だいたい岸壁が出来上つて居つたが、西側は先端三分の一ばかりが完成してゐるだけで、二三箇所は機械水雷に破壊された跡がまざくと残つて居り、その一部には鐵製の架け出し棧橋が一箇所あつた。

この第二埠頭は當時荷役の中心であつたが、食庫もなく、上屋もロシアの残していつた亞鉛板圍ひの蒲鉾型屋根のものが一つと、その外は戰時中に陸軍の手で作つた屋根ばかりの吹抜の上屋が四五箇所あるのみであつた。埠頭から今の大廣場あたりまでは一面の野原で、あちこちに僅の人家が散在してゐるに過ぎなかつた。

防波堤は東防波堤が僅に捨石工事に着手し、北防波堤は其の東側が半成してゐるのみで西半部はまだ着手してなかつた。浚渫工事は第二埠頭及び第一埠頭間において、一度浚渫を行



つた跡があるも、その他は殆んど未着手であり、第二埠頭西側に棧橋工事を施し、所々に埋築護岸工事に着手した跡を存してゐた。而して露國時代の築港工事用船舶、機械類は影を没し唯だ僅に二箇の軌道と起重機を殘存せるばかり他には何等施設の見るべきものはなかつたが、しかし六千噸級の汽船は自由に出入し同時に十一隻を繫留することを得、流石に露國が東方經略の基地たるにふさはしい構想と規模とを有してゐたことは否定できない。

このダルニーにおいて、氏が軍から依頼された任務は、世界の視聽を鍾めつゝ一舉喜望峰南端を迂廻し、印度洋を歴して北上し、日本艦隊と輸贏を決せんとするバルチック艦隊の出沒前に、軍用品をダルニー港に揚陸するにあつた。このために内地より決死行の軍役夫二千の外に、支那苦力三千を雇傭されたのであるが、時間を争ふこの重任を遂行するために、氏は常に銅錢をポケットに脹らむほど用意し、眞面目に働く苦力には褒賞としてこれを與へて鞭撻された。懶惰な苦力も銅錢ほしさに精一杯に力量を發揮し仕事は意外に進捗する。能率をあげるために、このやうな新戦術・新方式を次々とうたれて苦力を督勵し陣頭に立たれた。次々に御用船は入つてくるし、軍需品の揚陸は細心緻密な計畫下に行はないと直ちに滞つてしまふ。軍の行動に支障を來さないやう、輜重の運搬をやるには二千の軍役夫と三千の苦力

を手足のやうに使役しなければならなかつたであらうし、その仕事は作戦計畫と緊密な連繫に立つものであつただけに、氏の心勞は蓋し想像に餘りがある。

丁度その頃、死生を賭しての活躍を物語る一エピソードがある。あの日は確か八月十日旅順總攻撃の日と記憶してゐる」と、氏は語られてゐる。日中は無風帯で脂汗がぎと／＼と身體をつゝんで居たが夕刻から微風が出ていくらか凌ぎ易くなつた。氏の船が揚陸の軍需品移動の目的をもつてこれらを塔載し、水雷の敷設してある危険な三山島の東水道を、極度に警戒しつゝ水脈を曳いて通過してゐると赤旗が海中にひらめいてゐた。まだ敷設水雷の實體を見た事がなかつたので、よもやこれが敷設水雷の標識であるとは知らず、單なる水先標的ぐらゐに思つて、船員があはや水棹を水雷にぶち當てようとした瞬間、氏は「これが敷設水雷かも知れないぞ」と直覺的に豫感し、鮮人の船長を怒鳴りつけて突嗟にこれを躲し、危機一發といふところで、あやふく難を免れた事もあつた。

更にまたこの頃、氏は氏等の屬してゐた司令官と共に南山に登られた事がある。司令官は脚下に擴がるダルニーの市街を俯瞰して、慨嘆久しうされた後、徐ろに氏を顧みて

「ダルニーは全く立派な街だ。日本の咽喉を扼する此の地點が、同じ東洋人たる日本人でな



く露西亞の手に經營され來つたことは遺憾に堪へないね。北方に目を放せば正に十方碧落とでも形容したい程の大曠野が擴がつてゐるではないか。日本人も大陸にじつくり足をふみしめて、大陸經營に生命をうちこむ氣概がなくては嘘だね。軍人はいつか戦が終末にくる時、盾を收めて故國に歸らねばならぬが、經濟經營は軍人の占據した地點に、其の精神を承け繼いで建設して行かなければならぬ。原田君君は未だ若い。我々が血を流した此の曠野に、眞赤な大輪の花を咲かせてくれ。經濟建設が後に伴はぬ軍事的行動では勇士の靈も安らかに眠れないのだ。是非、君ら若い者で勇士の靈を微笑ませてくれ！」と、語られた。

あの日の司令官の切々たる嗟嘆と、慨々たる鼓舞激勵の言々句々は、今尙耳朶に鳴るのを覺ゆると氏は語られてゐるが、司令官のこの素志を果すべく、後に下ノ關における原田商會の本據を大連に移し、目覺しい努力によつて、戦後の滿洲經濟建設に寄與されたのである。實に事業を携へて渡滿したものは、氏を以て日本人の先驅となすのであつて、憂國の情と祖國愛と、將來を達觀するその慧眼とには敬服の外なく、今日滿洲帝國の興隆を見るにつけ、氏もまた心ひそかに快心の笑をもらされてゐる事であらう。

ダルニーにおける新任務も支障なく果した氏の物々たる雄心は、更に小成に安んぜず、軍役夫請負によつて得た報酬を以て、海運業に目を轉ぜられ、愛國の至情湧くところ北鮮航路に手を染められるに至つた。

### 第五節 北鮮航路と防長丸の座礁

前節において述べたる如く、三十七年の夏新任務を帯びてダルニーに赴き、軍の兵站線確保に邁進した氏は、滿洲の物資が極度に窮乏し住民は生活苦に喘いでゐる現状を解決する方法はないものかと眞剣に考へらるゝに至つた。

由來、山東は物資が頗る豊かであるところなので、旅順が陥落後は戦後經營の一方策として、山東の物資を滿洲に運び、滿洲の豊富なる天産物を山東に交易するため、沿岸貿易に従事せんと思はれたが、機は未だ戦時のためそこに至らず、氏は志を北韓航路に伸ぶるやうになられた。

船は當時の時價にして十萬圓あまりの汽船防長丸。積載量は六〇〇噸であつた。大阪の物



資を北朝鮮に送り、北朝鮮の滞貨を商工都市大阪に交易消化せんとする意圖ではあつたが、寧ろそれは軍の後方任務に精魂を傾倒して來た氏を、男と見こんでの痛切な軍の希望であつたのである。

當時、裏日本や北鮮航路は、露西亞の浦鹽艦隊が出没して危険極りなく、定期船は何れも休航して居た。輸送船常陸丸や佐渡丸の悲痛な遭難は未だ生々しい現實として残つて居た時であり、事實いつ何處の島影より、或はまた濃霧の中より、速力二十浬程度の甲裝巡洋艦が出現し停船を命ずるかも知れないし、それ位ならまだしも、我が主力艦隊との正面衝突を避ける敵艦は早徳として光龍を我に浴びせ、舷側に魚雷を發射せしめるか測り知れなかつた。

従つて日本海は輸送船團の如く、護衛艦のつくものは別として、汽船といふ汽船は殆んど全部屏息し、日本海は一の船影だに見ず、將に死の海と化した觀があつた。しかも航路の確保は一日も早く爲さねばならぬ國情にあつたのであつて、軍の氏に期待し要望する處もまたこゝにあつた。氏の北鮮航路への進出は祖國の寄托に副はんとするものであり、就航されるや恰も同航路を獨占した形にあつた。それだけに防長丸の北韓における人氣は大したものであつたが、氏を始め船員一同は、何時死ねるか、死處をいづかに得るかといふことのみが頭

を支配し、備けようとか、損があつたとかいふことを念頭に置くほどの餘裕もなかつた。

氏は明治三十八年春、一度下ノ關の原田商會に歸られ、防長丸に乗りこんで、北韓視察に出發された。同年六月、軍の命を受けて、糧秣、軍需品を塔載すると共に、軍隊輸送のために夜半十二時過、元山を解纜、敵露國浦鹽艦隊の出没に警戒しつゝ、清津港に向はれたのである。

左舷はるかに見えてゐた燈臺の光は、輪轉舵の廻るにつれ船尾へかはり、北韓の浪は怒り氣味の牙をむき、防長丸の舷側には容赦のない浪がひつきりなしに襲ひかゝり、ざわ／＼と泡をかみながら海へ落ちていつた。濛々と吐き出す黒煙は一本煙突の天邊から逆落しに吹きちぎれ、暗い浪間へ落ちるかと思ふと忽ち風に煽られてぱつと舞ひ上つた。船尾燈が見えなくなるゝと舷の橋燈がすつと宙に浮かび、その橋頭が低くなる瞬間に船尾燈が浪より高くなる。

霧の中をゆく船はたえ間なく警笛を鳴らしてゐたし、人影の少ない甲板のむなしい灯りを掠めて海鳥が横切ることあつた。霧の夜敵艦出沒警戒の氣苦勞はあつたが、船主兼事務長である二十八歳の氏には、祖國に直接的に寄與してゐるのだといふ感激に、死生を外にして心愜しいものがあつた。橋燈は霧のために光達距離をちぢめてはゐるが、遮蔽燈にてらされ



る羅針盤は正確に清津への海路に船を向かしめてゐた。氏は安心してぐつすり寝に就かれた。朝、霧は豫想外に深く、朝飯後、氏は船室にもどりベットに横はつて書籍を繙讀されてゐたが、餘りにも汽笛がはげしく鳴り続けるので、デッキに駆け上られた途端、ゴーツと地唸りのやうな異様な音響がしたと思ふと、激震のため二三米、前のめりにのめられた。

「座礁だ！」氏はさう直覺されたのである。

果せる哉、防長丸は袖屏風のやうに立ちはだかつた巨大な岩と岩との間にのし上げて進退を失つてゐた。船長は

「相済みません」としきりに謝る。氏は、

「濟むも濟まないもない。濃霧のための不可抗力だ。そんなことよりも、この船には軍需品だけではなく、多くの國家の干城が乗つて居られるのだ。後退して離礁し近くの陸地へつけよう！」

と、船長や水夫長を督勵されて、最善を盡くされた結果、船はやつとの事で、グツ！グツ！と後退し離礁する事ができた。

が、既に船腹からは海水が容赦なく浸入し始め、機關室は刻々と海水のため自由を奪はれ

出して來た。しかも咫尺を辯ぜぬ濃霧の中であつて見れば、船は徒らに潮流に弄ばれるまゝで、一寸二寸……沈下し始めてゆく。流石に乗員は軍の精銳が大部分であつたため、秩序は整然として居たものゝ、もしこれが普通乗客をのせ大混亂に陥るやうなことがあつたならばどうであつたらうかと、いま考へても慄然たらざるを得ないと、氏は述懐されてゐる。

このとき、氏は突嗟に「針路、西北！」と叫ばれた。

元山から清津に向ふ船であり、漂流を續けてゐた譯でもないのに、針路を西北にとりさへすれば必ず陸地に着くことができるであらう。假令、沈没をまぬがれないとしても、沈没までの幾時間かに最善の努力を盡くすことが、多くの人命を預つてゐる氏の最後の責任と思はれたからである。さうする間にも船艙は次々に増水し、沈下の度も漸く激しくなつて來た。かうなると兵員も「こゝで犬死するのは残念だ！」と齒軋りして残念がるに至つた。

氏は船員たちも斯かる危険な航海に連れ出した自分をさぞ呪咀してゐるだらうと思ひ、敵の砲撃か機雷に當つての爆沈ならばまだしも、座礁のために國家の干城を喪ひ、船員の家族を悲痛のどん底に沈ませるかと思ふと、死んでも死にきれない自責の念に、鞭うたれざるを得なかつたのである。



既に海面は舷側をのんですれ、近くなつた。が防長丸は死力を盡して濃霧の中を突進してゐる。凝然と佇立してゐる氏は僅かの時間が長い長いものに感ぜられ「自分の命もこゝで終りだ」と考へられた瞬間、二十八年の生涯が走馬燈の如く急角度に頭に閃き「原田家再興の念願も、北韓の濃霧の中に波と共に終焉を告げるんだ」と、いつともなく個人的感傷に陥らんとする雑念をうち拂ひ、

「船艙内の重量物を海中に抛り込み、人命だけはどんなことがあつても救助しよう。いざとなれば船を見捨て、全員を端艇に收容しよう！」と、最後の吐をきめられた折も折、

「陸が見えるぞ！ 陸が見える！」歡喜の聲が電波の如く飛んだ。

と見る。何たる天祐。濃霧の中に一尺といふのか、一寸といふのか、その裂け目から北韓の山肌がくつきりと目に痛いほどしみついた。

「陸だ！ 陸だ！」乗員は肩をたゞき合つて喜び、海水の汲出作業は一段と活潑になつて行つたのであつたが、氏はこの時ほど、生死に對する神秘感と、天祐神助といふ四文字の中にひそむ人慮の測り知り得ない神秘性を感じたことはなかつたと言はれてゐる。

今次大東亞戰緒戦のハワイ真珠灣攻撃に際しても、漠々たる密雲の裂け目から軍港を一眸

に收め得て、果敢壯烈な大空襲が敢行されたといふ。この種の例は枚擧にいとまがないほどあると實戦の將軍は語られたことがあるが、氏には天祐神助の有難さが、感動をもつて納得できるであらう。死なうと思つても死ねないこともあり、生きようと願つても壘の上で死ぬこともある。總てこれ神意によるものであつて、要は死生に執着することなく、神の御意志のままに、誠心をもつて人生を貫くにある。

かういふ感慨を乗せつゝ、防長丸は海岸に辛ふじて着いたのであつたが、何しろ二間もある岩壁がそゝり立ち、どうすることも出来ないでボートを下し、軍人及び其の他の船客を乗せ、又、岩壁にはロープをつけて、糧秣、軍需品一切を揚陸された。最後に氏と船長外高級船員がボートに移るとき、既に防長丸の船影は三分の二だけ海中に没し、ブリツヂが三分の一だけ残るに過ぎなかつた。遭難を聞き傳へて應援に來た土地の住民に聞くと、こゝは城津から西南約十二三哩の漁村だといふことであつた。

やがて氏は「全員上陸、人命異状なし。糧秣並に軍需品も總て揚陸せり」との報告をうけて、安堵の後に肉體的な疲勞が一時に押し寄せて來た。しかし氏はこれでは未だ自分の責任は果し得てゐないと考へられ、船員を四方に派し、漁村の屈強な若者を徵集、軍の協力を得





て天幕をばり露營の準備を完了したとき「マストの上に黒いものが動いてゐます」との報告を受けられた。

人員點呼の結果一人の残留者も居ない筈だが、と不審に思はれ、船長に双眼鏡で覗かせる。彼は頻りに小首をひねつて居たが「あれは主廚司で飼つてゐた猫です」といふ返事である。氏は何を考へられたのか、船員に命じ、端艇カタマに乘らしめ、マストの頂端まで追ひつめられ、海浪にともすれば足をさらはれさうな猫を救助せしめられた。恐怖に戦くこのマスコットは何事かを訴へるやうに船員の腕の中に鳴きつゞける物悲しい聲を聞くにつれ、總ての生命を救助し得た歡喜に、氏は咽喉が熱くなるのを覺えられた。

物質的には防長丸の沈没によつて借債を蒙り、今後の仕事の上に一大障害とはなつたものの、猫さへ救ひ得て心の借債を負はなかつたこの喜び。若し人一人だに犠牲として北韓の海に生命を絶たしめたならば、氏の一生はどんなに憂鬱なものであり暗澹たるものであつたであらう。海運業に對する氏の勃々たる雄心は頓挫したとはいへ、人生航路には燈臺が輝いてゐる。物質的借債は努力によつて保償することが出来るが、心の借債は時と共に苦惱を増すであらうからである。

防長丸が城津附近に於て擱坐沈没後、氏はこれに附帶するものゝ整理を完了してから海運業より手を引き、再び滿洲に渡つてダルニーに赴き、前年來従事しつゝあつた陸軍御用船の荷役作業や輜重の運搬に従事されることになつた。

かくするうちに皇軍は明治三十八年三月十日奉天を占領し、五月にはバルチック艦隊を日本海に殲滅して赫々たる戦勝を博し、餘力尙露國の極東抗戦力を一掃せんとするに方り、米國大統領ルーズベルトが突如として我國に講和を勸告し來り、同時に露西亞政府に向つても亦同様の通牒を發し來つた。而して遂にポーツマスにおいて講和條約が締結せられるやうになつたので、日本各部隊は歸還することになり、このために氏は軍の引揚げに要する埠頭場荷役を擔當せられるやうになり茲に第二期の活躍期に入つた。



## 第二章 日露戰役後第一次歐洲大戰勃發迄 (第二期充實時代)

### 第一節 日露戰後の經濟概観

日露戰役後の滿洲經濟狀況を概観するに先立ち、日清戰後後の滿洲における經濟情勢を瞥見すれば、日本市場と結びつけられた油房業の飛躍的發展、他方では帝政ロシアの東支鐵道の具體化とそれに伴ふロシア資本による北滿食料品生産工業の勃興、ならびにそれに依る土着油房の衰退において看取せられる。而して資本主流線はロシア資本であつたが、日露戰役を劃期として、日本資本がロシア資本にかはり主流的地位を占むるやうになつた。この時期はいふまでもなく大陸國策會社として明治三十九年十一月に設立された滿鐵の發展史によつて明確に性格づけられる。第一に綿製品の商品市場として、第二に鐵、石炭等の原料資源供給地として、第三に資本輸出の目的地として、大和民族の血で清められた滿洲に、日本資本

は滿鐵を動脈體系として、南から北に注入されていった。而して日本資本による滿洲商品市場の支配と日本資本の手になる多くの近代的な機械制大工業が滿洲に導入された。

明治四十三年には滿洲市場における日本綿製品の獨占的地位が確立したし、龐大な移住苦力の上に立つ大量・單一耕作下の國際商品大豆は、明治四十一年三井物産(翌年には露商ナタンソン)によつて、直接歐洲市場に結びつけられた。これらは土着産業に對して如何なる變化をもたらしたであらうか。一方では滿洲に残存した零細な織布業は原料絲として今や從來の獨占的な印度絲に代つて日本絲を持つこととなり、日本商業資本が(買辦的土着資本とともに)それらの問屋制手工業を零細工場制手工業へ組織化していったし、他方では單一耕作下の農民生産並に農産物市場を支配してきた土着商業・高利貸付資本の役割の中へ巨大な日本商業資本がわりこんできた。

次に我國産業の基礎的原料資材供給源としての滿洲は、まづ日本資本によつて最初の第一歩から開發されなければならなかつたが、それは滿鐵を中心とする撫順、鞍山、本溪湖等における近代的採炭製鐵業の投資によつて實現された。かくて原料供給源としての滿洲は、日本に高い利潤を約束する自由な絶好の投資地でもあつた。



産業のこの基幹部門を礎臺として、それに附隨する諸産業、製油工業（撫順油母頁岩）電氣事業、鐵道工場、機械工業、セメント工業から、油房、燐寸、硝子、染料等の化學工業、ならびに紡績、毛織、製紙、煙草製造業の雜工業に至る機械制大工業が、發展的に滿洲へ移植せられるに至つた。<sup>(註一)</sup>

日本内地の貿易について見れば、日清役後一億圓を超ゆるに過ぎなかつた輸出額は、日露役後三十九年には四億圓臺を突破し、大正三年には六億圓に迫つた。輸入額も三十九年に四億圓以上となり大正元年には六億圓を超え、輸出入貿易總額は、明治三十年には三億八千餘萬圓に過ぎなかつたものが、三十九年には八億四千餘萬圓となり、大正三年には實に十一億八千餘萬圓に激増した。この驚異的な貿易の發展は、日露役を中心とした我國經濟の急激にして大規模な發達を如實に物語るものであらう。

歐洲の強大國帝政ロシアに對する戰勝は、新興日本の國際的地位を著しく高め、日本はここに名實共に東洋の指導的勢力となつたのみならず、世界列強の一に加はつたのである。而して清韓等の東洋市場に對する支配權は急激に強化され、南洋諸國への我市場をも擴大せしめた。

かゝる貿易の伸長は、云ふまでもなく近代的産業の發展に照應するものであつて、明治三十八年發行の「戰後經濟論」は「特に吾人快心の一事は日本が單純なる原料供給國たる位置より脱して、益々工業國たらんとする一事之也。換言すれば支那韓國の經濟上の位置を脱して歐米の諸大邦と伍さんとしつゝある事之也」といひ、明治末期の貿易につき「明治商工史」は左の如く論じてゐる。

顧るに我國近時工業殊に機械工業の發達進歩は年と共に著しく其製品は國內の需要を充すの外更に海外に其販路を求めんとす。然れども先進工業國たる歐米諸國に對しては其規模に於て將た技巧に於て未だ及ばざること遠く、従つて此等諸國の市場に於て其製品と輸贏を争ふて必勝を期する能はずと雖も、之に反し東洋諸國は産業の發達文化の開明共に未だ我國に及ばずして我製品は優に其需要を充たし得……我國近時の發達に係る機械的工業製品就中綿絲・綿布・莫大小製品・燐寸……時計及機械の如き、實に此等東洋諸國を以て最大需要市場となす」

と述べてゐる。

いまこれを原田商事の發展過程について見れば、祖國の興隆發展に照合して充實時代とも言ひ得るであらう。更に細論すれば日露戰役終了後明治四十年迄は立上りの時代であつて、



同四十一年より大正三年迄は充實の時代であり、これを綜合すれば人間成人の時代とも稱する事ができる。

日露の戦は出動兵力百萬、その費用無慮十九億と謂はれてゐるが、ポーツマスの媾和談判の結果、南樺太の割地のほかは無償金となつて終幕を告げるに至り、民心は失望より憤慨にかはつて彼の有名な國民大會から日比谷の焼打事件にまで發展し、財界もまた萎靡沮喪して一時は小恐慌を憂慮された。

然るに三十九年春から猛然景況の好轉を見るに至つたのは、素より昂められた國民の反撥心に基づくものであらうが、直接の導火的動機となつたのは(一)外資の輸入(二)投資の方向轉換(三)金融緩慢の諸點と云へ得よう。

即ち償金こそ收め得なかつたが、媾和當時尙ほ成立外債の在倫敦正貨四億圓を有し、且つ輸入せられた正貨もまた尠くなく、兌換券發行高は戦前の二億三千萬圓に比し、三億四千萬圓にも達した。而して物價の騰貴、諸業純益は増進を來すと共に、他面國庫債券に吸收された資本は拂込と共に何れかに放下さるべきであり、又この間頻りに行はれた各地私立鐵道の國有化の結果、從來鐵道株式の形式を採つて居た龐大な資本も亦何れかに放資し得べき状態

となつて居た。以上諸般の事情が相綜合して三十八年末より著しく金融の緩慢を呈するに至つたのである。かくて企業の利益増進と資金の潤澤と竝立しては企業熱は熾烈とならざるを得ないのであつて、熱狂は三十九年下期を最頂とするが、同年を通じて計畫された資本總額のみでも實に十億圓に達した。而して是等人心に爆發の機會を與へたものは、同年六月勅令を以て發表せらるゝや應募額が實に千七十八倍に達したといはれる南滿洲鐵道株式會社の創立であつた。

かてゝ加へて戦後對外國の信用は戦勝によつて倍加し、外國貿易は急激に増加して、熱狂的なしかし一時的な好景氣を齎したのである。

原田商會は當時創業後幾何も経過してゐない事として、事業上の飛躍には恵まれなかつたが、社長原田猪八郎氏は、此の間に處して滿洲大陸への進出を斷行し、滿洲において軍事關係への供給ならびに請負等はその方針が樹立され實行に移されつゝあつた。

明治四十年より明治四十二年迄は不況沈衰の時期で、外資流入と言ふ借金政策による企業情況はその限度を超過して、企業熱の反動、株式市場の反落、紐育恐慌の影響を受けて、銀行の破綻等も起り全く苦悶の時代であつた。政府も茲に於いて大藏省證券三千七百萬圓の債



還を行ひ、更に四十二年に入つては限度一億圓を以て國庫債券の便宜割引償還の道を開くに決し、この間財政問題に絡んで更迭した新内閣桂藏相の、年々國債五千萬圓の現金償還聲明に、市場は漸く生氣を回復するの氣運に向かつたのである。

滿洲において滿鐵會社は、政府の資金難のため諸事難行の時代であつたが、逐次諸般の開發事業は其の端を發し、滿鐵としては寧ろ積極性に轉じて、奉天・本溪湖・安東・營口方面に活動方策を執りつゝある時で、原田組としても、社長原田猪八郎氏の陣頭活躍時代でもあつた。

かくて明治四十三年頃より次第に中間恢復期に進み、大正二、三年頃までにかけて、滿洲の事業は整備發展し、原田組もまた充實せられつゝ次の飛躍時代を迎へたのである。

(註一) 飯田繁氏「滿洲國資本問題の展開」参照。

## 第二節 滿鐵會社の設立と埠頭荷役問題

滿鐵會社の前身が東清鐵道南滿支線であることはいふまでもない。日露戦争の勃發後、日

本軍は破竹の勢を以て露軍を破り、明治三十七年五月には早くも第二軍の精銳が金州城附近の東支鐵道沿線に肉薄したのであつた。爾來日本軍は連戰連勝露軍を北へ北へと掃蕩し、占領したる鐵道は野戰鐵道提理部これを管理し、翌三十八年七月には遠く昌圖まで我軍の輸送開通を見た。しかし當時は軍事輸送のみで、唯だ大連・旅順間のみは特に貨客の便乗便載を許されてゐたのである。

とまれ日本は之に依つて、露國より東清鐵道に屬せる長春・大連間の鐵道及其の支線、ならびに炭礦其他一切の權利を繼承し、十月四平街停車場において我が福島少將と露のオラノフスキー少將との間に日露撤兵並に鐵道授受の協定をなし、十一月からは昌圖以南の一般輸送を開始して茲に始めて鐵道營業の體をなしたのである。

滿鐵會社と原田商事株式會社とは淺からぬ因縁を有する。個人經營原田組より合名會社原田組へ、更に原田商事株式會社への發展過程において、滿鐵は最大の顧客であり、深い連繫を有する。かゝる意味に於て滿鐵會社の設立經緯をここに述べたい。

先に述べたる如く福島少將とオラノフスキー少將とが四平街において鐵道授受の協定を締結した前日(十月十二日)戦後の財政窮乏のため滿鐵經營の能否を危んでゐた我が政府當局



は、米人ハリマンの滿鐵買収の提議に應じ、賣買豫備契約の覺書を交換したのである。かくて十九億の國幣と十幾萬の英鎊を犠牲にして獲た唯一のものといつても良い滿鐵は米人に買却され、滿洲は外國資本との自由競争市場に委されようとしたが、小村外相の卓見と熱意により、滿鐵百年の計の礎は樹立しうる事ができた。

やがて滿鐵經營に關する政府の方針も決定し、明治三十八年十二月二十二日北京に於て成立した日清條約附屬協約に據り長春（寬城子）以南の鐵道及撫順・煙臺其他の炭坑經營並に安奉線の改築及經營に關し清國政府の承認を得、政府が此等事業を擔當する機關として、六月七日勅令を以て南滿洲鐵道株式會社設立の件を公布されたのである。七月十三日には兒玉大將を委員長とする滿鐵創立委員八十名が任命されるに至つた。

八月一日には外務・大藏・逓信三大臣より、會社設立事務に關する左の如き内容の命令書が公布されたのである。

- 一、鐵道を會社の營業開始の日より起算し滿三箇年以内に四呎八吋の軌間に改築し、大連・長春間鐵道の内大連・蘇家屯間は復線となすこと。
- 二、沿道主要なる諸般の設備をなし、線路の港灣に達する地點に於て水陸運輸の連絡に必要な設備を

なすこと。

- 三、鐵道の便益の爲め鑛業に撫順及煙臺の炭坑採掘・水運業・電氣業・倉庫業・鐵道附屬地に於ける土地及家屋の經營、其他政府の認可を受けたる營業等の附帶事業を營むこと。
- 四、政府の認可を受け鐵道及附帶事業の用地内に於ける土木・教育・衛生等に關し必要なる施設を爲すこと。
- 五、鐵道及附帶事業の用地内の居住民に對し手数料を徴收し、其他必要なる費用の分賦を爲すこと。
- 六、資本總額二億圓の内半額は政府に於て出資すること。
- 七、滿鐵會社の利益金が政府以外の一般株主に對し配當年六分に達せざる場合は、政府は會社設立後十五年間を限り配當金六分に至る迄之を補給すること。
- 八、政府は滿鐵會社の社債元利金支拂に對して保證すること。

等々が其の内容の主要なるものである。

設立委員は右の勅令書に遵據して事務を管理し、同年八月十八日逓信大臣より定款の認可を得たので、政府の出資に充つべき鐵道及其附屬財産並に炭坑、其評價額一億圓を基礎にして、それ以外の株式は支那政府及日支兩國民より募集する事となつた。當時財界は戦後の疲



弊に呻吟してゐたが、結果は忽ちにして千倍以上の應募となり、白熱的人氣を湧かしたことは、當時の國民の意氣が如何に軒昂にして愛國の熱情に溢れてゐたかを察知し得る。

十一月一日逕信大臣より會社設立の認可を得、同月二十八日創立總會を開き、二十七日東京に本社を、大連に支社を設置し、會社は寺内設立委員長より一切の事務及財産目録の引繼を受け、十二月七日設立の登記をなしたのである。

初代總裁後藤新平伯は、畏くも十一月九日特に御陪食を仰附けられた後、御座所において、南滿洲鐵道ノ事業ハ困難ニシテ其關係スル所重大ナリ十分盡力セムコトヲ望ムと優渥なる御言葉を賜はつた程である。

斯くて麻布狸穴上の川村伯邸に本社看板を掲げ、少壯有爲の社員四十名は不眠不休の努力を續け、十二月二十日副總裁中村是公氏は六名の理事と共に渡滿し、明治四十年二月十一日紀元節を卜して、初めて假事務所を大連市兒玉町元民政部跡に設置した。而して四月一日野戰鐵道提理部其他の官憲より鐵道其他の引渡を受け、茲に滿鐵會社は巨大な進發をなすに至つたのである。

従つて滿鐵本來の使命は右の設立經過にも見る如く、鐵道經營が主であるが、附帶事業と

して大連埠頭の經營一切の全權も賦與されてゐたので、原田氏は前記麻布狸穴上の滿鐵本社に經歷書を提出され、更に直接本社を訪れて、

「自分は埠頭荷役に従事すること二年間、多少の經驗もあり、現在も人夫五、六百人、支那苦力二千人を使傭してゐる。どうか今まで通り埠頭の陸揚一切の荷役請負をさせて頂き度い」

と頼まれたのに對し、三井出身の某理事は、この請願に對して「何れそのうちに相談の上返事をする」と答へるのみに止まるので、氏は一應歸連してその諾否を待たれたのである。

處がこれに對して一應の挨拶もなく、突然、貨物保管と作業の統一ならびに港灣利用の能率上、埠頭に於ける荷役一切は滿鐵直營となすと公表されてしまつた。當時第一埠頭と甲埠頭に於てのみ汽船の著離をなし、甲埠頭は主として陸軍運輸部の専有に屬し、第一埠頭の一部及び第二埠頭の荷役は氏の率ゐられる原田組、磯部組、郵船組、神戸組、大阪組等が主として當つてゐたので、是等が合同團結して、

「我々の既得權を認め、我々に仕事を任せて貰ひ度い」と強硬に反對したが容るゝ所とならなかつたので、氏は軍の仕事も残つて居たし、主力を軍の仕事に當らんと決意されるに至つ



た。

然るに、それまで靜觀してゐた大連市民が承知せず「大滿鐵ともあらうものが荷役にまで手を擴げるには及ぶまい。宜しく從來これに挺身し功勞を盡くして來た經驗者に任すべきでこれをオミットすべきではない。滿鐵は滿鐵本來の鐵道經營に専心すべし」と、反對氣勢が擧るやうになつた。

これに呼應して大連實業會も猛烈な反對を展開したので、氏もまたその急先鋒となつて處女演説をなされたこともあつた。この大連實業會といふのは關東州在住の實業家有志等が相諮つて實業上の意見交換をなし且つ親睦を計らんが爲に、明治三十九年一月大連市磐城町菊屋で一夕の會合を催したのが奇縁で丙午茶話會と初め稱してゐたが、是れは大連に於ける實業團體の濫觴でもあつた。三月に至り丙午茶話會を實業團體の組織に改め、以て實業家相互の福利を増進し傍ら親交を敦うする機關とすべきことに決議し、名も大連實業會と改めたが、是れ實に大連商工會議所の前身であつた。

氏も當時いまだ二十九歳の血氣盛りであり、大連實業會の音頭をとつて反對演説を爲された事など思ひ浮べ、氏もまた今昔の感に堪へぬものがあらう。

かくて氏は滿鐵荷役直營の反對派の急先鋒となつて最後まで頑張り通し、反對派が買収されて行くのを見ながら、盟約を離すことが出來ずして遂に孤立無援の立場となり、原田組運送部は致命的打撃を受けて終に閉鎖しなければならなくなつた。

若しこの時、氏がうまく立ち廻られたならば、原田組商事部はその地盤を基礎にして大きい存在となり得たであらうが、それは氏の良心を裏切るものであり、義に生きて權勢に阿ねることを潔しとしなかつた祖先の靈をけがすものであつて、假令敗れたりとはいへ、今でも氏のひそかに衿持されて居る處であらう。

かうして長い間、原田商會から原田組へ發展するまで、運送部商事部の兩部機能の上に活躍されて來た氏の事業は、運送部に終止符をうち、商事部に専念される事となつた。

### 第三節 原田組商事部の活動

原田組商事部獨立と共に店舗を大連市盤城町に持つに至つた。下ノ關における原田商會は軍の仕事に關係してゐる時代に閉鎖したのであつたが、茲に愈々本來の事業に邁進すること



になった。時に明治三十九年四月である。この頃が原田組として事業擴張に伴ふ經營諸部面に對する最も苦難時代であつて、明治三十九年から四十一年にかけ、内地の大中資本家が大陸に殺到し、滿鐵への必死の賣込み、利権あさりの爭奪戦が醜いまでに演ぜられた。

原田組も機械、鐵材等を滿鐵に納入してゐたが、三井物産、大倉組、古川等も諸種の資材を納入し、何れも滿鐵の發展と共に事業も擴大していつた。

當時原田組の取引主體は滿鐵であり、先に述べた鐵材、機械の外、工具、塗料、油類等をも納入してゐた。鐵材は大阪の岸本商店の代理店であり、ペンキは日本ペイント、石油はスタンダード石油會社のそれ、代理店であり、その他、内地の主要メーカー、商店の代理店を兼ねても居た。滿鐵は草創時代でもあつたりしたので、埠頭の改築或は建設に要する繫船用のブイを納めたり、チェーンなど數十萬圓の注文を受けたり、貨車のカバーなど一時に五、六十萬圓の注文を受け、大阪、東京、神戸などの帆布職（帆を仕立てる職人）を動員して納入した事もあつた。

滿鐵はこのやうに大小の商人が出入して連絡を缺ぎ、資材の購入に當つても困難を感ずることが多かつたので、原田氏の大連商工會々長時代、商工會の肝入りで此等を整理統一し、

資材購入上の便宜を計り非常な貢獻を爲されたので、滿鐵二十周年記念日の佳日、功績により滿鐵會社々長安廣伴一郎氏より感謝狀と銀盃を贈呈された事がある。

氏はまたさういつたこともあつた代り、滿鐵から誤解を受けられた事もあつた。前にも記したやうに原田組は相當廣く商勢を張り、日本防水布會社の代理店もやつて、滿鐵従業員の雨衣を相當納入してゐた。明治四十三年のある日滿鐵から「見積りをさせたいから、日本防水布會社の社長に御足勞願ひたい」と申入れがあつた。氏は商用の爲め遼陽に居られて留守中のことであつたが、日本防水布會社々長矢野氏は内地から態々來連し滿鐵用度課で假入札をなし注文を受ける事になった。然るに如何なる事情が内在してゐたのか、係から「都合にて分割注文とし半分丈けにする」と斷つて來た。

矢野氏は衆議院議員もしてゐる位の人であるから「内地から態々呼び寄せ、しかも入札値段も公表せず僅かに半数の注文とは首肯できぬ。入札價格を發表して公平なる處置をせられたい」と、舌鋒鋭く時の滿鐵理事長國澤新兵衛氏に膝詰談判をされたのである。そこで國澤氏は用度課長を叱責し、用度課長はその係を責め、係は原田組が中傷したのであらうと、嫌疑を懸けられたり恨まれたりして、其の後約半年間は注文を貰へない事があつたのである。



其の時氏が痛切に考へられた事は、滿鐵といふ一つの大きい事業體に、蟻の甘きにつくが如く寄生しようとするから、その當局の、しかも一係の一顰一笑によつて事業そのものが左右されることになるのである。永年の努力と智囊と精魂とを傾けつくす、謂はば自分の天職とも考へ得る事業が、しかく基礎の脆弱なものであり他律的であり浮動的なものであつて良いだらうか。といふ事であつた。しかして事業の現在並びに將來のことに想倒する時、滿鐵を全對象とする依存性を離脱して、もつと確固たる經營方針に立脚すべき必要に迫られた。

目を廻かに轉すれば、滿洲奥地の人々は自然恣意的な生活條件に甘んじて、近代的文化の恩澤から除外されて居る。奉天然り、長春然り、哈爾濱亦然り。況んや其の奥地の居住民は未開拓の分野ではないか。これらの人々を潤ほしつゝ、自分も亦、潤ほされることが商事の道義でもあり、經營の妙諦ではないか。氏はさう考へられると、從來の謂はば受動的な經營方針を一擲して、能動的に働きかけるべく、滿洲奥地に向かつて東奔西走を初められたのである。

之を更に國家的に見れば、滿鐵といふ日本資本の經營する主體と單に取引するだけでは、日本の貨幣が滿鐵に入つたり原田組に入つたりするだけで、國富を富ます所以のものではな

い。海外發展を志した動機は、祖國に何物かを寄與せんとする熱情に出でたものである以上、もつと大きい意欲が動くべきだ。滿人の金を吸収し支那人と取引をすることによつて、小にしては原田組の、大にしては日本國家の富を増大すること、これが取りも直さず御奉公になるものだと氏は考へられ、奉天・遼陽・營口・長春・ハルビン等々奥地と取引をはじめて、滿洲・支那の顧客を獲得するに寧日がなかつたのである。

奥地活動の副産物といふ譯でもないが、大倉組の本溪湖煤鐵公司マイツァッコンスが新事業を開始するに當り、各種の資材、物資を供給して歓迎され、撫順炭礦が操業稼行せられるや鑛山用品を納入した事もあり、何れも原田組が先鞭をつけたのである。

大正元年八月末日付「回覽簿」<sup>(註2)</sup>によれば、  
「奥地販賣ハ將來愈々力ヲ注グ考ナリ。是ハ近キ將來ニ於テ事實トシテ顯ハス積リニテ目下考究中ナリ」と、這般の消息が物語られてゐる。

(註2) 原田組「回覽簿」とは、巻頭に「本帳簿ハ當店內外ニ於ケル普ク重要ノ事項ヲ記載シ是ヲ各位ニ通知スルモノニ付御了讀ノ上ハ各自捺印セラレ度シ。明治四十二年七月二十六日起」と記載せられたる如き趣旨を以て始る。



尙こゝで「回覽簿」の記事を引用した機會に、同簿を通じて、此の期における原田組發展の跡を辿つて見ようと思ふ。

明治四十四年四月一日

自今事務分擔左ノ通り相定ム

尤モ目下無人ノ時ナレバ各自補助シ以テ用務ノ敏活ヲ謀ル

一、埠頭方面

一、旅順方面 販賣ニ關スル一切

一、奥地一帯

一、販賣ニ關スル一切ノ帳簿ノ整理

右 味岡君

一、滿鐵用度課 見積及納入迄一切

一、民政署・郵便局其他官衙

一、地場賣ニ關スル一切ノ事 販賣

一、購買ニ關スル一切ノ用務帳簿整理迄

右 村原君

一、埠頭方面販賣味岡君ノ助手

一、貨物引取り及ビ倉入レ荷改迄

一、店舗内商品ノ整理

一、郵便切手ノ出納、其他臨時ノ用事

右 定吉

一、民政署、郵便局、水道其他

一、地場賣（西崗子ヲ含ム）村原君ノ助手

一、販賣セシ貨物ノ發送

一、倉庫内商品ノ整理、其他臨時ノ用事

右 美代吉

大正元年八月末日

自今事務ノ分掌左ノ通り相定ム

村 原

一、地方仕入ニ關スル一切ノ事務

一、滿鐵見積納品迄ノ用務

主人不在中、店務ノ監督、金錢出納用務ヲナス事

立 花

一、船舶納品ニ關スル一切ノ業務

一、支那商並ニ油房等ノ販賣ニ關スル業務

右二項ノミトナシタルハ船舶納品ニ重キヲ置キシガ故ナリ。支那人ニ對シテハ王ヲ助手トシテ使用スベシ。

第三節 原田組商事部の活動



若シ船舶頻繁ノ時ハ森本ヲ助手トシテ使用シ、尙足ラザレバ更ニ相當ノ方法ヲ講究スル事

藤 永

一、市内官衙並ニ各得意廻リ

一、荷物引取り並ニ荷改迄及倉庫帳ノ一部

市中官衙並ニ各得意先ハ今后大ニ力ヲ注入スル考ナルヲ以テ當務者ハ充分ノ努力ヲ要スベシ。自然夫ガ爲メ荷物引取りノ餘暇ナキ時ハ更ニ相當ノ方法ヲ講スルコト

阪 田(註、後の小田村氏)

一、店賣一切ノ用務

一、販賣ニ關スル帳簿ノ記帳

一、倉庫帳ノ一部並ニ商品ノ整理

一、販賣書類ノ應答、荷物註文品ノ發送

店ニ在ツテ店務ヲ執ルハ最モ細心ノ注意ヲ要スルモノナリ、新入店ノ者トシテ少シク任ノ重キガ如キ感ナキニアラザレドモ當分ハ先輩ノ人ニ就キ充分ニ指示ヲ仰ギ、漸次ニ練磨スルノ覺悟ヲ要ス。帳簿ハ販賣、倉庫ノ二種アリ、是ヲ整理スルハ多大ノ努力ヲ要ス。

森 本

一、各事務ノ助手

一、發着書信ノ記帳並ニ取扱

一、切手ノ整理

何人ノ命令タリトモ柔順ニ其ノ命ニ從ヒ、尙進ンデ自ラ研究ノ心ヲ失ハズ充分勉勵スルコトヲ要ス

主 人

一、地方販賣ニ關スル一切ノ用務

一、金錢出納簿及原簿

奥方販賣ハ將來愈々力ヲ注グ考ナリ、是レハ近キ將來ニ於テ事實トシテ顯ハス積ニテ目下考究中ナリ

以上ノ如ク用務ノ分擔ヲ定メタリト雖モ目下少人數ノ時ナルヲ以テ各自相輔ケ、圓滿ニ店務ノ遂行ヲ謀リ、組ヲシテ繁榮ナラシムル様努力奮闘アラン事ヲ希望ス。畢竟組其者ノ發展ハ延イテ店員各位ノ發展トナル次第ナレバ協力一致シテ常ニ圓滿ナル發達ヲ遂グル事ニ努メ度キモノナリ。

大正三年三月

自今事務ノ分掌ヲ左ノ如ク改定ス

一、地方仕入係

村 原 君

一、滿鐵納品係

買入レニ關スル書信ノ發受、仕入帳並ニ仕入元帳整理、滿鐵納品諸帳簿一切、主人不在中ハ店務ノ監督、金錢出納用務ヲ掌ル。

一、船具部係

村 上 君

船舶賣込、納品迄一切ノ事務

一、販賣係

立 花 君

第三節 原田組商事部の活動



地場、船舶、官衙、油房。其他ニ對スル販賣

賣原簿記帳

地場方面ハ未ダ充分發展スベキ餘地アリト思考ス。本係ハ今後益々努力ヲ要ス

一、販賣係 地方擔任、店賣擔任

阪 田 君

一、帳簿係

地方販賣ニ關スル書信ノ發受並ニ品物ノ發送、原簿其他計算整理ノ用務

一、倉庫係

缺 員

商品ノ發受、倉庫品ノ整理、倉庫帳記帳

一、船具係

吉 本 君

船舶賣込助手、其他店務ノ補助

一、店雜務

小 川 君

書信ノ發受、切手ノ整理、其他雜務一切

右ノ通り相定ムト雖モ各人互ニ相輔ケ圓滿ニ店務ヲ執行スルコト

「回覽簿」による事務分掌の變遷は原田組の發展振を如實に示してゐること前掲引用の如くである。即ち明治四十四年四月一日付職制が示すやうに、僅に埠頭方面、旅順方面、奥地一帯を一名にて擔當し、滿鐵用度課其他官衙も亦一名を以て之に當るに比し、僅々三年の歲月を閱するか閱せざるかの大正三年三月には、地方仕入係、滿鐵納品係、船具部係、販賣係(地

場・船舶・官衙・油房等)、帳簿係、倉庫係、船具係等の諸係を整備して著しく充實してゐるのである。

しかも前述せる如く四十年より四十二年に至る恐慌期を創業草々にして迎へ、四十三年より御諒開頃までは中間的恢復期にむかつたとはいふものゝ不況の餘波は未だ全然靜まらざる時にあつて、克くこれに善處しつゝ、滿洲奥地開拓等の新方策新經營をもつて苦難を踏み超え、一步一步堅實な足どりを以て事業は擴大されて行つたのである。我々はこゝに、白面の青年にして戦後の滿洲の活天地に縦横の才腕を揮ひ、時世を達觀しては適切なる方策を以てこれに對應する青年社長原田猪八郎氏の颯爽たる俊毫振を想見するのである。とまれ此の期は原田組の充實時代と申して過言ではなく將來の飛躍は、此の期に培養蓄積されたと見るべきであらう。

尙、我々は安奉線の廣軌改築に、氏が寢食を忘れて努力されたことも、原田商事發展史の一齣として略記して置きたい。



## 第四節 安奉線廣軌鐵道改築に活躍

安奉線は周知の如く日露戰役中第一軍の軍器糧秣を輸送する目的で建設せられた輕便鐵道である。戰爭の終結と共に一時的の軍用鐵道は平和的交通機關としての性格を帯びるに至り、滿鐵は明治四十年四月一日野戰鐵道提理部から本線の引繼を受けて、軌間を四呎八吋半の廣軌線路に改築することになり、起工準備を整へて、明治四十二年一月より清國に對して鐵道線路實査のため委員の協商を要求したのである。

然るに清國は徒らに言を左右に託して容易に我が要求に應じなかつたので、交渉は一轉して奉天帝國總領事と東三省總督との間に移り、爾來我政府は累次清國に對して理を盡して應諾を求めたのであるが、六月二十四日に至り「安奉鐵道の工事は單に現在の線路を改良するに止め軌道を取擴げ線路の改築を爲すを許さず。尙、日本政府から派遣せる鐵道守備兵は即時撤退し更に同鐵道沿線の日本警察も直ちに撤去せよ」といふ無法な回答をなし來つた。

然しながら我政府はこのやうな問題で兩國の親交を毀傷することを憂ひ、更に我北京駐在

公使をして清國政府に交渉を爲さしめたのであるが、清國政府は荏苒として何等誠意ある回答を與へなかつたので、四十二年八月六日伊集院公使を通じて支那側に通告し「世界交通の利便のため條約上の權利に基き貴國の協力を俟たず自ら改築を實行する」旨の通牒を發して自由行動に出でんとしたので、北京政府もやむなく追隨することゝなつた。超えて十三日彼は伊集院公使に復牒を送つて、安奉鐵道改築の急務なるを認め、これが爲に必要な協力を爲さうとする意志を表白したので、帝國政府は小池奉天總領事をして東三省總督錫良及奉天省巡撫程往金と交渉せしめ、覺書に調印して工を起すに至つた。

然るに改築中支那側は工事保護を名として、鐵道巡警總局を草河口に設け、奉天その他に四分局を置いて大いに勢威を振つたため、日本側官憲と屢々軋轢を生じ、事毎に相對峙して劍光閃き銃聲轟くといふ小椿事は常に惹起されたのである。加ふるに當時排日風潮は猖獗を極めて居たので、これに従事するものゝ艱苦は想像に餘りがあつた。

熱血の赴くところ青年社長原田氏はこの艱苦を買つて出られたのである。遼陽から橋頭まで約十五里。二日行程であるが、五十萬樽のセメント及び枕木、軌條、煉瓦等の工食用材料を陸路馬車で運搬するのは相當に壯觀であつた。馬車臺數三百。一度に五、六十臺の馬車が



蜿蜒長蛇の列を作つて輸送に當つた。

當時、未だ馬賊が横行する綠林の活天地である上に、前述の如く支那官憲の暴壓、排日民衆の蠢動等々があつたから、氏は常に武装を凝らし、腰には護身用のピストルを下げて、身命を賭してこの資材運搬に當られた。その頃原田組に勤務してゐた森岡氏は、馬賊から襲撃をうけ、果敢に應戦したものと衆寡敵せず、全身創痍を受け、一命には關はらなかつたが所持品の全部を奪取されるといふやうな事さへあつた。

原田商事株式会社今日の基礎も、かゝる先人の努力の賜であることを、現在の社員の人々にも知つて置いて頂きたいと思ふので、老婆心ながら一言附加する次第である。

それは兎もかく、氏は防長丸遭難事件を始め、かくの如き死生の間に處すること數度、よくも今日まで生壽を得られたものと泌々痛嘆せざるを得ぬと共に、誠心をもつて、死生を宇宙に置き、いつでも自己の全能力を對象に傾倒して斃れて後やむ者の強さを思はざるを得ない。原田商事今日の發展はかゝつて氏の強烈な魂と誠心とが原動力となつてゐる事を、我々にはこゝにはつきりと認識することを得るのである。

### 第三章 歐洲大戰後滿洲事變勃發迄

#### (第三期建設時代)

##### 第一節 第一次歐洲大戰後の經濟概観

大正三年、バルカンの一角セルビヤに祈られた一發の銃火は、全歐を一瞬に戰禍にたゞきこみ、遂には全世界に波及するに至り、吾國の生産、消費經濟、商取引の部面は未曾有の活況を呈したことは、事新しく論ずるまでもない事であつて、原田組は其の主要扱商品たる鐵材、機械等によつて大幅な利潤を得たのである。

大正四年一月より開始された日支交渉は、反面に於てこれを契機として深刻な排日の因子を蒔いたとはいへ、同年五月ともかく一應解決した結果、我國は關東州租借地及び南滿洲鐵道附屬地のほか、南滿洲及び東部内蒙古の廣汎なる地域に亘つて特種權益を得、殊に南滿に



においては居住及び營業の自由ならびに土地の商租を公認せられるに至つて、邦人の經濟的發展の前途は甚だ有望となつた。

このためには至急専門的金融機關を設置すべきの要が朝野の間に眞劍なる課題として擡頭し、大正五年大隈内閣は政府案として「滿洲銀行法案」を第三十七議會に提出したのである。然るにこの法案は衆議院を通過したものゝ、貴族院において否決され、大隈内閣の瓦解によつて遂に流産となつた。しかし日支兩國經濟を緊密化し、支那人をして日本經濟に信倚せしむるためには、此の種金融機關の設立は當面の急務であるため、大正六年十月、寺内内閣は滿洲銀行に代つて、朝鮮銀行と東洋拓殖會社を滿洲に進駐せしめて、所期の目的を果さんとした。爾來朝鮮銀行は滿洲各樞要の地に支店出張所を設け滿洲における中央銀行的地歩を占め、東拓も奉天、大連、哈爾濱に支店を設立して營業地域を擴充した。

先にも簡単に觸れたる如く、第一次歐洲大戰後財界の好況によつて、滿洲の經濟界は著しい發展を示し、大正七年の貿易額は六億九千萬圓に上り、從來日本より滿洲に投下した總資本額は二億圓を超え、事業會社の數は四百三十八社、工場生産額一億圓を突破するに至つた。超えてその翌八年には、更に一層の躍進振を示し、新事業は蔚然として勃興し、企業會社は

間斷なく設立され、貿易は激増した。更に株式、商品、不動産の如きは天井知らずの奔騰を演じ、資金の需要もまた頓に増し、朝鮮銀行や東拓を以てのみしては、黄金時代と化した滿洲の全經濟を賄ふことは困難になつた。殊に外商は巨大資本を背景にして、日本資本に代位せんとするまでの活躍を試みんとするに至り、かくては我が國の滿洲における特殊地位を危殆に陥れることになるを以て、滿洲に本店を有する強力なる中央金融機關を設置すべき要望が起り、大正九年一月、全滿洲の有力者百四名が聯合して、關係各大臣、拓殖局長官、法政局長官、貴衆兩院議長、政友會・憲政會兩政黨および關東長官宛に、滿洲中央銀行設立建議案を提出した。しかしこの建議案もまた、大正九年春、帝國議會が突如解散したために、遂に提案を見るに至らなかつたのである。

歐洲大戰に原因して勃興した財界の好況は、大正八年においてその絶頂に達し、大小の俄成金が巷に氾濫する狀況を呈し、黄金の洪水に陶醉する状態であつた。しかし財界の危機は識者をしてひそかに憂へしめて居たのであつて、内地においては、大正八年の初期には既に大戰終熄による船舶・鐵・化學品等の價格が暴落し、長期貸出は抑制され、計畫投資は減する反面、不渡手形は著しく増加して動搖の因子は相當深刻に胚胎してゐたのであるが、狂亂的



投機は九年に入つても尙衰へず、こゝに於て東京大阪方面の銀行家は協議の上、大阪側は大正九年一月二十三日、東京側は同二十六日、いづれも定期預金利率を六分五厘に改定し、二月一日より実施することに決定したほどである。

さうしてゐる間に、ひそかに疑惧してゐた反動は意外にも早く來た。大正九年三月十五日世界的大パニックは日本の財界を襲つたのである。もともと滿洲にあつても、銀行家は前年末より新規の貸出を警戒し、只管回収にのみ専念するに至つたので、金融は圓滑を缺ぎ金利は騰貴する一方であつた。二月に入り特産物の出廻りも面白くなく、輸入品の賣行も亦香ばしくなくなつて、銀行資金の回収は益々困難となり、當時財界は暗雲低迷し不安は刻々と漲り來つた。果然三月十五日東京株式市場に大動搖があり、三月の發會において五百四十五圓であつた新東株は一氣に三百九十五圓までに下落した。

かくて大連株式市場に於ける五品株も五十圓安を演じ、諸株また暴落、株式界は全く恐慌状態に陥つたのである。特産市場もまた豆粕受渡不能問題で立會を停止し、鈔票は二百三十四圓を高値として爾來漸落、綿糸、砂糖、麥粉等の輸入品も一齊に暴落して取引がなくなつた。殊に滿鐵の増資及び社債は行惱み、新規事業中止の發表は、滿洲財界に一大衝動を與へ、

銀行は徹底的に警戒して新規の貸出に應ぜず金融は梗塞又梗塞、永年斯界に覇を稱へて居た巨商はもちろん、中小成金に到つては慘澹たるものがあつた。

時あたかも建値問題が起り、大連の財界は混亂に加ふるに混亂を以てし、商取引は平年の半額にも及ばず、賣掛資金の回収困難、不渡手形の増加、工場の閉鎖、訴訟事件の簇出等、財界は蕭條を極め、市中一般の金融は杜絶の状態となり、低利資金を要望する聲が全滿に澎湃として起るに至り、大正十一年五月滿洲商工會議所聯合會において、大連・奉天・營口の三商議より、低利資金融通を政府に要望するの案が提出された。

この低利資金融通問題は迂餘曲折を経たる後、三百五十萬圓が認可され、同年十二月に至つて貸出を開始したが、貸出利率は大連市内最低一割一分、その他の地方は一割二分といふ高率であつたため一人の利用者もなかつた。大正十二年四月、第二回滿洲商議聯合會において金利引下方に關し當局に要望するの案が滿場一致をもつて可決し、同年五月政府に請願した。政府もまた滿洲財界救済の必要を認めて居たので、同年七月愈々滿洲疏通資金として特に大藏省預金部より八百萬圓を年七分の利率を以て鮮銀及び東拓に融通し、兩機關は自己の資金二千萬圓を加へ、合計二千八百萬圓を比較的低利にて新に貸出すことになつた。



しかし乍ら不況の一路を辿りつゝあつた財界には、これらのあらゆる方策も狂瀾を既倒にかへすことはできなかつた。殊に大正十二年九月一日突如として天錫の如く下つた關東大震災は、金融機關に對して最も深刻な打撃を與へたのである。これに先だち、日本内地においては、大正十一年京都の日本積善銀行破綻に始まつた關西諸銀行の取付は、東京及び九州にも波及して、取付二十七行中休業したるもの十一行に達してゐた。尙またそれに先だつては大正九年四月、大阪の増田ビル・ブローカー銀行の休業に端を發して、六月大津銀行の休業に至る僅か二ヶ月の間に取付銀行四十五、うち休業二十行にも達してゐたし、同年十一月農工貯蓄銀行の休業を端緒として東京を中心とする第二次の取付騒ぎは、取付十二行内休業五行を出して困憊の極に達してゐた。

そこへ起つた大震災は東京市の損害高だけで六十七億圓、府内銀行本支店數五百四十二行中、焼失倒壊したもの三百四十四、又東京銀行集會所社員銀行中無事なるもの八行といふ大被害を受け、全市銀行は完全にその機能を喪失したのである。

大正十五年後半の財界は、震災の善後處理も一段落を觀せ、輸入も漸減して國際收支も稍改善され、一方においては圓價の急騰による物價の暴落と輸出貿易の不振とがあつたが、新

設増資資本は前年に比し四割増を示す等、財界は徐々に恢復の氣配を示し、前途好轉しないまでも悪化はすまいし、金解禁といふ劃期的事實によつて記念せられるであらうとの期待と好望との裡にあけた。然るに昭和二年一月第五十二議會に「震災手形損失補償公債法案」ならびに「震災手形善後處理法案」に端を發して、東京渡邊銀行及びその姉妹銀行たるあかぢ貯蓄銀行が休業するに至り、流言蜚語は盛に飛んで取付は次第に擴大し、同年四月には神戸六十五銀行（鈴木商店關係）が連日の取付で遂に休業を發表するに至るや、株式市場は全く恐慌市場と化した。

かくて鈴木商店に對し三億五千萬圓の債權を有する臺灣銀行も最悪の状態に陥り、臺灣銀行救済の緊急勅令案が密院に諮詢せられ、その反對論が公になつて遂に全國的銀行取付を捲き起し、同年四月末日モラトリアムの施行を見るに至つた。

この恐慌期にあつて、滿洲産業經濟の根幹をなす滿鐵も其經濟上一大難關に遭遇した。即ち大正九年度の事業費は一億一千万圓餘の豫算を編成したが、その事業資源は財界の動搖に伴ふ不安定・不確定なものに屬する見込豫算であつた。假にこれを確定的なものとしても、大正八年度の事業費は豫算の繰越しであり、財源の大部分は用度品となつて固定してゐたの



で五千六百萬圓餘の不足を生じ、事業の大半は中止せざるを得ない状態にあつた。このためには撫順炭販賣代の可及的速なる回収、沿線各附屬地の建築、土木その他諸施設事業の極端なる経費の緊縮、更に營業及び事業に要する諸材料の低廉購入といふ方策がとられた。而して低廉購入をなさんがために大阪出張所に商事係を置き、從來滿洲商人の手を経由した購買物品は直接内地より購入して財政難の當面を切抜けんとするに至つたので、滿洲土木建築業者・滿鐵御用商人は一大恐慌を來し、延いては滿洲經濟界に一大ショックを與へんしたのである。

この問題は在滿邦人全體の利害休戚に甚大なる關係を有するのみならず、滿鐵の事業縮少といふが如きことは帝國の滿洲經營上の消長に關する重大問題でもあるので、全滿實業團體は驟起し、上京委員を選んで、滿鐵事業資金五千萬圓の調達を當路に請願するに至つた。かくて滿鐵委員や上京委員の努力により、政府も植民地政策の重要性を認識して、滿鐵申請の一億一千萬圓を九千萬圓に切下げ、滿鐵事業資金の確保に保證を與へようとするに至つたが既に上京委員の上京中に、滿鐵は社員の能率増進・風紀刷新・冗費節約の名目を以て九千名の解職を聲明したため、五萬の従業員は不安の境を彷徨し、不穩の空氣が漲り物情頗る騒然

たるものがあつた。

以上、要するに第一次歐洲大戰後大正八年に至る黄金時代と、大正九年一大バニツク襲來後相次ぐ恐慌に疲弊困憊しきつた時代とを此の期に内包するのであつて、原田組の對策もまたこの經濟界の動向に順應して、商策が堅實に執られ來つたのである。

此の間政治的には張作霖の勃興、全盛、兵工廠の創設、爆死、或は郭松齡事件等一聯の特記すべき事件があつたが、日支交渉における土地商租權問題を直接契機として、反日排日の風潮は日を逐ふて高まり、滿洲事變勃發前東三省支那側が、わが權益を侵害せる重なるもの<sup>(註3)</sup>五十四件に及び、在滿邦人の生命の危険さへ生ずるに至つて、彼我の對立極めて險惡となつた。尋常の打開策は今や總ての解決を得べくもなく、山雨將に至らんとするの情勢にあつたが、果せる哉、昭和六年九月十八日夜半柳條溝鐵路の爆破は遂に滿洲事變となるに至つた。

原田組の商權は此の期において、諸分野に亘つて建設され、牢固たる社礎を築き、次の飛躍期に一大躍進を遂げたのである。以下節を改めて、この期における原田組の發展段階を辿つて見たい。

(註3) 關東軍參謀部發行「滿洲事變關係雜錄」參照。



## 第二節 奉天の大工業化と原田組の進出

奉天における邦人の経済的活動は、日露戦争を直接契機とするが、當時の資本移動は小規模のものに限定され、大資本を以て組織的に経済的基礎をこゝに培養せんとするものはなかつた。然るに此の間、金融部面は生産事業もしくは営業部門の先驅的役割を擔當しつつあつたのであつて、明治三十九年の横濱正金銀行の奉天支店開設、四十二年十二月の安田系正隆銀行奉天支店の創設、大正二年朝鮮銀行の進出等は、内地における諸企業の奉天進出を誘導する氣運を醸成しつつあつた。かてゝ加へて大正四年の日支交渉は、邦人の活動舞臺を全滿に提供すると共に、奉天はその経済的中心の地位を獲得したのである。しかし奉天が地方的一大集散地の地位から、近代的大工業都市に轉位したのは、何といつても第一次歐洲大戰以後であつて、奉天工業化の基因はこれを三つに求め得る。

その第一は歐洲大戰後の財界好況である。この戦争景氣の原因として左の如きものが上げられてゐる。

(一) 歐米品の輸入杜絶乃至激減

(二) 歐米の生産減退に伴ふ輸出の増加

(三) 交戦國に向けて軍需品の輸出増加

(四) 世界的船腹不足に起因する海運界・造船事業の隆盛

その第二は撫順炭礦の大規模送電の完成である。同礦の大山坑發電工場は大正二年に發電機五基、容量四、五〇〇キロワットの規模となり、大正三年十一月に至り、多年の懸案であつた粗悪炭の處分法として、硫安並クレオソート油を得ると同時に發生ガスを燃焼して、蒸氣タービンで發電するモンド瓦斯發電工場が設置せられた。かくて大正九年には、モンド工場で容量一二、〇〇〇キロワット、大山坑發電工場で七、〇〇〇キロワットの容量を有するに至り、奉天工業化の原動力をなした。

その第三の原因としては金融部門の整備である。前記金融機關に加ふるに東洋拓殖株式會社の進出は、近代産業都市へと變貌せんとする奉天の金融輸血路となつて、その發展を急速に促進せしめた。周知の如く東拓は大正六年七月議會の協賛を経て會社法を改正し、社業の根本に刷新を加へて營業地域の制限を撤廢した。かくて業務の種類および範圍を著しく擴大



して、滿蒙方面への果敢的進出を企圖すると共に、漸次南洋方面に觸手を伸すに至つた。奉天における東拓の營業状態は、大正六年十月支店設置と共に長期低利資金供給の途を拓いたため、資金の需要が増大し、大正七年度奉天支店において、土地、建物、商租權其他不動産上の權利、工場財團又は有價證券を擔保として貸出した金額は、一千三十萬圓に上つた。また同社の全滿における貸付總金額は三千百六十二萬圓餘で、これを大正六年度に比較すると二千百拾九萬圓といふ激増を示し、東拓の異常的な躍進を推測し得るのである。

以上三つの要因により奉天における土地熱、企業熱は旺然として起り、大正五年末には早くも資本金一千萬圓（四分一拂込）の南滿洲製糖株式會社が創設されて滿洲民間工業の一番ポツクを劃し、七年十二月には資本金一千萬圓（四分一拂込）の滿蒙毛織株式會社が生れ、翌八年二月には資本金三百萬圓の滿蒙纖維工業株式會社が帝國製麻系によつて設立された。當時これを鐵西三大工業と稱し、滿洲における一大工業都市としての奉天の基礎をなしたものである。同時に鐵道附屬地における家屋の新築が相踵ぎ、滿鐵側の市街地整備等によつて、奉天は未曾有の活況を呈した。

また日本側商工業の發展は、必然的に支那側商工業の股盛を促し、民國七年には東三省官

銀號、中國銀行、交通銀行等の出資によつて、資本金十萬元の奉天純益線織公司（綿麻布製織）が設立され、九年には資本金三十二萬元餘にて八王寺啤酒汽水公司の誕生、十年には資本金五十萬元でマツチ製造會社惠臨火柴公司、十二年には資本金四十二萬元の肇新窯業公司（陶磁器・煉瓦・瓦製造）等が、それ／＼創設を見て、民間工業は著しく擡頭の氣運にあつたのである。

茲において原田組社長原田氏の慧眼は、奉天の持つ洋々たる將來性に矚目され、大正六年八月一日、奉天出張所（後に支店）を開設し、これら新興事業の必要とする資材を納入して同支店の基礎を確立されたのである。尙、この間の経緯は第二篇奉天支店史において出口氏が委曲を盡されてゐるので重複を避けて省略する。

同日（大正六年八月一日）付の回覽簿を見るに、「奉天出張所設置の件」として、

「滿洲事業界の發展と時勢の進運に伴ひ、今回奉天に出張所を開設するの機運に到達せるは各位と共に同慶に堪へざる所なり。由來奉天の地は南滿洲に於ける政治的中心として目せられしも、今や滿鮮鐵路系の統一となりてより、更に經濟的中心地たるに至るべし、現に同地方に於ては新たに工業會社の設立せられる由、耳にするに至つては益々同地將來の多望なる論を俟たざる所なり。斯の時に當り出張所



を設置し、同地方に於ける需要に應ぜんとするは、眞に時宜に適するの計畫たるを信す。

左れば任に赴くの人には素より充分の努力をなし、益々發展の域に進め度く、本店各位においては一致共力して斯の新設商店の爲め應分の利便を謀る事に努められんことを希望す。

一、場所 奉天新市街

二、主任 坂田信一、當分の間支那人王家謨を助手として派遣す。

と、記述してゐるが、更に回覽簿次頁には、奉天出張所開設に伴ふ事務分掌を發表して、原田組發展の一段階に對處せられてゐる。

大正六年八月一日

自今店務ノ分掌左ノ通り相定ム

仕入部

村原藤次郎

一、仕入係

一、滿鐵納品係

地方仕入ニ關スル事務、仕入品ノ考査、物價調査、滿鐵納品ニ關スル一切ノ事務、店主不在中店務ノ監督

安田萬次郎

一、仕入係

一、代理店係

地方仕入ニ關スル書信ノ發受、仕入ニ關スル帳簿ノ記帳、其他ノ事項、代理店ニ關スル一切ノ事務

谷澤辨藏

一、滿鐵納品係

滿鐵ニ納入スル現品ノ受取及是ニ關スル事務

(兼務) 小川邦雄

一、地場仕入係

地場仕入ニ關スル事務及ビ記帳

矢部敬藏

一、地方販賣係

一、官衙販賣係(兼務)

地方販賣ニ關スル書信ノ發受其他一切ノ事務、諸官衙及地場ニ於ケル會社ヘノ賣込

小川邦雄

一、地場販賣係

地場販賣ニ關スル事項

三好久一

第二節 奉天の大工業化と原田組の進出



一、官衙販賣係

諸官衙其他ノ納品事務

井 暮 慶 太 郎

一、地場販賣係助手

地場販賣係ヲ助ケ諸種ノ事務ヲ補助ス

松 本 安 之 助

船 具 部

一、船 具 係

船具用品賣込ニ關スル一切ノ事務

(兼任) 井 暮 慶 太 郎

一、船具係助手

船具係ヲ助ケ事務ノ補助ヲナス

活 田 兼 一

倉庫現品係

一、倉庫現品係

倉庫品ノ發着及現品ノ整理、店卸表作製、其他現品ニ關スル事務

金 崎 勝 興

一、埠頭引取係

仕入貨物ノ引取及ビ是ニ關スル一切ノ事務

谷 澤 辨 藏

一、倉庫品記帳係

商品發着ニ關スル商品カードノ整理及ビ是ニ關スル事務

經理記簿係

一、會 計 係

主 人  
沖 田 久 一

一、帳 簿 係

販賣帳簿ノ整理、其他諸統計表作製

林 有 倫

一、用 度 係

書信ノ發送、切手ノ整理監督、店舗用ノ物品ノ買入及ビ保管ニ關スル事務

一、信書ノ發受 一、其他雜務

支那人分掌

一、販 賣 係

夏 祖 蔭 陳 興 周 張 子 厚

一、倉庫現品係

劉 喜 明

一、貨物運搬係

李 金 甫

第二節 奉天の大工業化と原田組の進出



## 一、雜務 張壽慶

以上ノ通り相定ムト雖モ各自相輔ケ圓滿ニ店務ノ進行ニ努メラレンコトヲ希フ

かくて本店の事務分掌を擴充強化し、その強力な背景を基礎地盤として、奉天出張所は建設の第一歩を踏み出したわけであるが、當初の店舗は浪速通郵便局西側江之島町で、取扱商品は「鐵鋼金物を主體として、大阪帶革ベルト、ビツカー、皮製品、工具等であつたが、特筆すべきものとして、SKFボールベアリングは本溪湖煤鐵公司に一手に納入」(第二篇奉天支店史参照)してゐた。

しかして現在の奉天市千代田通りの店舗は大正九年に新築、こゝを據點として大正十二年頃から本格的な活動期に入つたのである。

## 第三節 合名會社原田組の誕生

第一次歐洲大戰が招來した好況の波に乗つて、滿鐵の鐵道を中心とする建設擴充を始め、

製鐵、炭礦、機械の各種新事業が澎湃として勃興を見たので、金資本の需要は俄かに増加し同時に金券の普及によつて支那側通貨の相場が一層激しく動搖し、大いに投機賣買を助成したことは争へぬ事實であつた。殊に大正六年露國政府は、外國爲替取引を禁じた爲め、浦鹽方面に於ける輸出入の露貨對金圓の出合は、これを長春其の他の南滿市場に求むるやうになり、これに應ずる錢舖は先づ支那貨幣にて露貨を買入れ、更に日本金券を大連市場にて賣買するに及んで、益々金銀取引を頻繁にした。

大正七年中に於ける大連市場の賣買高は一千三百萬圓を突破し、大連市中の各銀行並に金融會社の株式擔保貸出額は七百八十萬圓に達したが、このうち滿洲の株式は八割五分を占めてゐたのである。それが翌八年に至つて株式會社は次々に設立され、市中一般の株式熱は白熱化し、借金をしてまで株の賣買に手を出すといふ熱狂振りで、同年大連市場における賣買高は六千四百萬圓の多きに上つた。

これは獨り大連のみならず全滿に謂へることであつて「奉天經濟史三十年史」は、此の間の事情を次の如く語つてゐる。すなはち「歐洲大戰による好景氣の餘波は各種事業會社續々として創立され、株式の普遍化するに従ひ一般市民も資金の證券化に誘惑されたるのみなら



ず、一方證券金融が大いに圓滑となり來つた爲め世人の株式賣買に熱中するもの漸く多く、一會社の創立計畫さるるや其の創立前既に株式申込が豫定株式數に數十倍すると云ふ現象を呈した。而して此の結果は遂にプレミアムを生じ株の割宛權利さへ得れば何等の資金勞苦も要せずして一株につき何十圓の權利金を即時に利得されると云ふ株式熱狂時代を出現し、中にはプレミアムの利得のみを目的とした空虛の事業を計畫發表する所謂會社屋さへも出現するに至り、後年奉天財界に救ふべからざる禍根を貽すに至つたのである。現在の滿洲取引所の前身である奉天證券信託株式會社、奉天取引所信託、東亞證券株式會社等の株式は、何れも三十圓以上五十圓前後のプレミアム付きで賣買されたのであつた。斯くして一般株式の賣買が發達するに従ひ、株式仲買人も二十數名の多きに達し大正八年の最盛時には奉天證券信託の株式市場に於いては、一日二、三萬株乃至は五、六萬株の「大手合」を見るに至つたほどである。

この熱狂に魅された當時の原田組の社員中には

「あそこの店は五十萬圓、どこは百萬圓儲かつた。原田組ももつと積極的に出ないと馬鹿を見て笑はれますよ」

と進言する者もあつたが、原田氏は

「今は買へば上る。賣れば儲かつてゐるが、これは變調でいつ反動が來るかわからぬ。仕事を必ず完成しようといふ氣構へを持つてゐる者は危険な投機は避くべきである。地味に見え廻りくどい氣がするかも知れぬが、どこまでも堅實を求むべきで、思惑で仕入するのは絶対にいけない。ステップ・バイ・ステップでいけ。それが原田組の經營信條だ」

さう言つて懇々とたしなめ、思惑的投機を絶対に禁止されてゐた。

前述したやうに、戦後の好況によつて滿洲の經濟界は著しく膨脹し、大正七年の貿易額は約七億圓、内地よりの滿洲投下資本總額は二億圓を超え、事業會社數四三八、生産額一億圓餘といふ勢ひで、翌八年には更に飛躍的な發展を示した。新事業は蔚然として勃興し、企業會社は間斷なく設立され、貿易は激増し株式・商品・不動産の如きは天井知らずの奔騰を演じ、全滿は黄金時代と化した。

従つて大連の所謂有力者は、殆んど一人で幾十の重役を兼ね、一舉にして巨萬の財富を獲たが、氏は泡沫會社の重役とならず、只管原田組の經營に没頭されてゐた。四六時中、氏の腦裏を往來するものは、今後の飛躍に具へる原田組としての對策ばかりで、一獲千金の如き山



師的投機は誠實な氏の一顧を得るところとならなかつた。大正七年一月四日付の左記「回覽簿」記載のものは、原田組の事業に専念せんとする氏の心境を語るものと考へられる。

大正七年一月四日

自今店務分擔別紙ノ通り相定ム

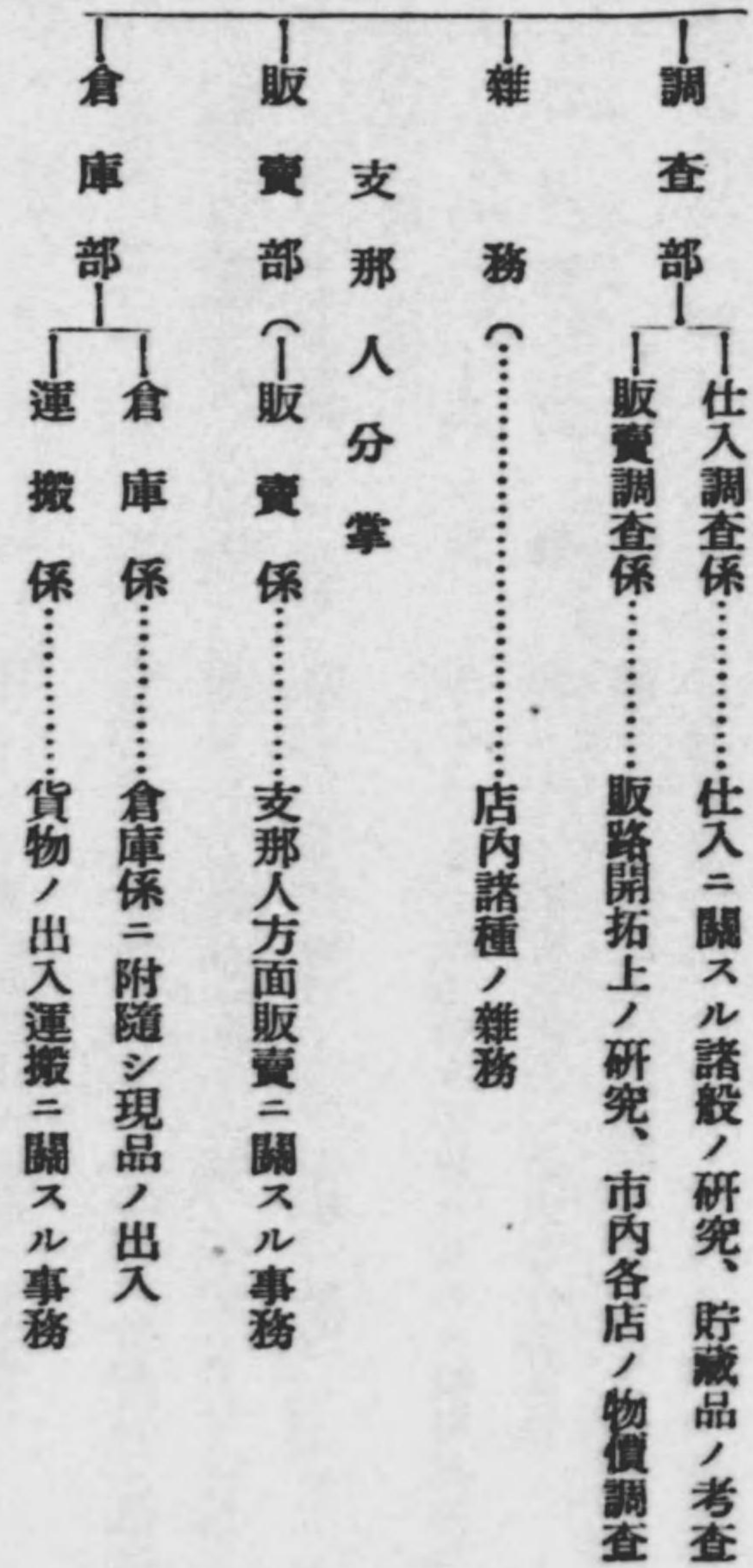
但シ如斯定ムルト雖モ各自相輔ケ以テ圓滿ニ店務ノ進捗ヲ圖リ店運ノ隆昌ヲ來ス様努力セラレシコトヲ希望ス  
販賣部ノ中ニ店賣・地場販賣係・官衙係ヲ分別セルハ本年此ノ方面ニ對シ大ニ努力ノ必要ヲ感ゼシニ依ル  
船具係ニ二人ノ兼務ヲ置キシハ現品ノ調達等ニ敏速ヲ要スルニ依ル  
支店係ヲ置キシハ將來支店トノ關係益々繁多ナランコトヲ想像セシニ由ル  
計理部中調度係ハ店用品ノ調達保管並ニ郵便切手等ノ出納ヲ充分嚴重ニスル必要ヲ認メタルニ依リ此係ヲ置ク  
調査部ヲ新設セシハ將來店務ノ發展ヲ來サントスル時ハ常ニ研究調査ヲ怠ラザルヲ要ス仍テ特ニ是ヲ設ケ時々各自ノ研究資料ヲ披瀝シ意見ノ交換ヲ爲サント欲ス  
但シ本係員以外ニ於テモ参加スルコトヲ要ス

(別紙)

事務分掌







職制を絶えず更改しては發展する現實の商勢に適應せしめ、一意原田組の躍進に他事なかつた氏も、撫順の開発のために、内地の阪本格氏や右近又雄氏等と資本金百萬圓で撫順鐵工所を創立された事があるが、大正九年恐慌の襲來前に撫順炭礦に譲渡されてゐたので一錢損の失も見られなかつた。

かくて歐洲大戰並に大戰後の好況に際し、思惑に走らず、黙々とたゞき上げられた原田組は社礎いよ／＼鞏固となり、大正七年から大連のメイン・ストリート山縣通に新築中の三層樓の近代的ビルが竣成したので、大正八年の一月、木の香藪郁たる新事務所へ移轉を完了し、

同時に個人名儀の原田組を解消して合名會社原田組が誕生するに至つた。

すなはち勞資協調の精神に則つて、従業員の主だつた人々の功勞に酬るため出資社員とし、合名會社原田組として美はしい協同組織の下に新しく、しかし古い傳統を以て再生の一步を力強く踏み出した。

大正八年一月八日付回覽簿を披見すると「從來拙者（编者註原田氏）が經營し來りし吾が原田組は幸に時勢の好響と店員諸士の努力とに依り今日の好果を得しは眞に同慶の至りに堪えざる所なり。而して現時に於ける社會の趨勢を見れば、到底舊來の如き保守的營業振りを以て甘んずる能はず、進んで積極的活動を要するの時期に到達せるのみならず、多年勤續せる諸士の將來に就き深く考慮を廻らせば、此際勞資一致の方針を建て諸氏と其の利害を共にせんと欲し、拙者の營業に屬する一切を譲渡し合名會社原田組を組織し、毎決算期に於て其の利益の幾半を配當し聊か其の功勞に酬ゆる所あらんとす。願くば諸士が從來拙者に與へられたる誠意を更に合名會社原田組に盡され、益々當組の發展に努力せられ度く茲に諸氏が從來の勞を謝し併せて將來の奮闘を希望するもの也」と、原田氏は店員諸士に合名會社に新生せんとする原田組の趣旨を披瀝してゐられる。



而して合名會社設立と同時に、原田組規定に基き左の理事が任命された。

代表社員	原田猪八郎
理事	村原藤二郎
同	安田萬次郎
同	富岡忠治
同	大阪支店長
同	奉天支店長
同	小田村信一

更に一月十二日午後六時より大連市ヤマトホテルに於て、合名會社原田組の創立披露會が盛大に舉行された。同日付回覽簿には「店主今回大阪出張所改稱及組織變更並大阪支店長新任披露ノ爲メ左記日程ニ依リ旅行ヌ」として、一月十四日より三十日まで、原田氏は大阪に旅行されて居る。奉天出張所も大阪出張所と同じく合名會社設立と同時に支店として昇格し、主任であつた小田村（舊姓坂田）信一氏は奉天支店長に任命されたのである。

次に社史の特筆すべき一頁として、左に個人經營原田組より合名會社原田組に飛躍した當時の定款ならびに規定を掲げる。

### 合名會社原田組定款

#### 第一章 總 則

第一條 本會社ハ合名組織ニシテ合名會社原田組ト稱ス

第二條 本會社營業ノ目的左ノ如シ

- 一、鐵鋼・機械・器具其他工業用品ノ賣買
- 二、商品賣買ノ代理業
- 三、前二項ノ事項ヲ助成補益スル業務

第三條 本會社ハ本店ヲ大連市ニ支店ヲ支那奉天、大阪市及東京市ニ置キ尙必要ニ應ジ其他ノ地ニ支店又ハ出張所ヲ置ク

第四條 略

第五條 本會社ノ存立期間ハ本定款作製ノ日ヨリ滿二十ケ年トス  
但シ總社員ノ同意ニヨリ延長スルコトヲ得

#### 第二章 社員及出資

第六條 略

#### 第三章 業務ノ執行及會社ノ代表

第七條 本會社ハ原田猪八郎ヲ代表社員ト定メ業務ヲ執行セシム

#### 第三節 合名會社原田組の誕生



第八條 業務執行社員ノ任期ハ二十箇年トス

第九條 業務執行社員ノ報酬ハ社員ノ過半数ヲ以テ別ニ之ヲ定ム

第四章 計 算

第十條 營業年度ハ毎月五月及十一月ノ二期トス

第十一條 業務執行社員ハ營業年度ノ終リニ於テ計算ヲ爲シ左ニ掲クル書類ヲ社員ニ提示シテ其承認ヲ求ムルコトヲ要ス

- 一、財産目録
- 二、貸借対照表
- 三、營業報告書
- 四、損益計算書
- 五、利益配當ニ關スル議案

第十二條 本會社ノ損益計算ハ其期間ノ總益金ヨリ總損金ヲ控除シタルモノヲ純益金トス

第十三條 純益金ハ總社員ノ同意ヲ得テ左ノ通り處分スルモノトス

- 一、積立金 百分ノ十五
- 二、社員配當金 百分ノ五十
- 三、従業員配當金 百分ノ十五
- 四、賞與金 若 干
- 五、後期繰越金 若 干

第十四條 各社員ノ損益分配ノ割合ハ第六條ニ掲ケタル出資額ニヨル

第五章 總 會

第十五條 社員總會ハ毎年六月及十二月之ヲ招集シ其他必要 場合ハ臨時之ヲ招集スルコトヲ得

第十六條 本會社ハ業務上重要ナル事項ニ關シ意見ヲ求ムル爲メ社員總會ノ決議ヲ以テ顧問及相談役ヲ置クコトヲ得

第六章 附 則

第十七條 本定款ニ定メザル事項ハ商法ノ規程ニ依ルモノトス

大正八年一月七日

合名會社原田組規定

一 總 則

- 一、當會社ハ本店ヲ大通ニ支店ヲ大阪・東京・奉天ニ置キ其他必要ノ地ニ支店及出張所ヲ設置スルコトヲ得
- 二、當會社ノ業務ニ從事スルモノハ總テ本會社定款及本規程ヲ遵守シ社内ノ秩序ヲ保チ營業ノ發展ヲ圖ルモノトス
- 三、本規定ハ商法其他ノ法令並ニ當會社定款ニ抵觸スルコトナキヲ本旨トス
- 四、本規程ニ記載セザル事項ニシテ臨時ノ處置ヲ要スルモノハ順次上役ヲ經テ店主ノ旨ヲ受ケ或ハ實行者自ラ其實ニ任シ最善ノ處置ヲ爲スモノトス

職 制

一、當會社ノ定款ニ基キ原田猪八郎ヲ代表社員ト定メ店主ト稱ス

第三節 合名會社原田組の誕生



二、當會社ニ左ノ職員ヲ置ク

理事	事 (重役ト稱ス)	名以上
店員		若干
店務見習		若干
備人		若干

三、理事ハ社員總會ノ決議ヲ以テ社員又ハ社員以外ノモノヨリ選任スルモノトス

四、理事ハ店主ヲ補佐シ重役會議ニ出席シ營業上重要ノ事項ヲ審議シ一般ノ事務ヲ指揮監督ス

五、重役會議ハ社員及理事ヲ以テ之ヲ組織ス

六、店員以下ハ各上長ノ命ヲ受ケテ店務ヲ分掌ス

三 事務分掌

一、當會社ノ事務ヲ左ノ通り分課ス。但シ業務ノ繁閑緩急ニ應ジ互ニ補助スルモノトス

人事課

店主室 調査課

外國課

庶務課—文書係、外事係、庶務係

總務部 計理課—會計係、記簿係

商品課—第一倉庫係、第二倉庫係、記簿係、發送係、到着係

營業部

購買課—地方係、支店係、地場係

販賣課—地方係、支店係、地場係、船舶係、支那商係、滿鐵係、官衙會社係、納品調査係

二、各部ニ部長ヲ置キ部内事務ノ整理統一ヲ圖ラシメ且ツ他部トノ連絡ヲ圓滑ナラシム

三、支店出張所ニ支店長主任ヲ置キ本規定ニ定ムル所ニ準據シ各事務ヲ經理セシム

四 營業方針

一、當會社ハ賣買共其取引先ヲ選擇シ常ニ誠心誠意ヲ以テ事ニ當リ苟モ誑詐欺瞞ノ行爲アルベカラズ

二、當會社ハ一切投機的射的的賣買ヲ爲サザルモノトス (註、傍點編者)

三、金錢及商品ノ出納ハ最嚴密細心ノ注意ヲ拂ヒ遺漏ナキヲ期スベシ

四、簿表ハ常ニ正確丁寧ニ記載シ一目瞭然タラシムルコトヲ要ス

五 服務紀律

一、當會社ノ従事員ハ左ノ各項ヲ服膺違背スベカラズ

イ、自己分擔ノ事務ニ對シテハ熱誠之ヲ處理シ其職責ヲ全ウセムコトニ努力スベシ

ロ、自己分擔ノ事務ハ勿論常ニ店務ノ全般ニ注意シ營業上ノ利益ニ關スル事柄ハ最大トモ遲滞ナク店主又ハ他ノ主任者ニ申出ヅベシ

ハ、業行ヲ慎ミ勤儉ヲ旨トシ輕佻浮華ノ時弊ニ染マズ専ラ立身齊家ノ道ニ心懸クベシ

ニ、長幼上下ノ分ヲ守リ互ニ和合親睦ヲ旨トシ愉快ニ日々ノ業務ヲ處理スベシ

ホ、商機ニ關スル事項ハ素ヨリ當會社ニ係ル諸般ノ事項ハ決シテ他ニ漏洩スベカラズ



- ハ、許可無く當店以外ノ業務ニ關係シ或ハ自己又ハ他人ノ爲メ營利的ノ事業ヲ營ムベカラズ
- ト、營業ニ關聯シ金錢ノ貸借ヲナシ又ハ贈受獎勵ヲナスベカラズ
- チ、顧客ノ待遇ハ力メテ鄭重懇切ニ取扱ヒ應對禮ヲ厚ウシ取引上満足セシムルコトニ注意スベシ
- 二、執務時間 略
- 三、病氣缺勤 略
- 四、事故缺勤 略
- 五、休業日 略
- 六、創業記念日(六月一日)當夜ハ各支店ヲ通ジ晚餐會ヲ開キ既往將來ニ關スル感想談話會ヲ催シ或ハ名士ヲ聘シテ談話ヲ聽取スル等有益ニシテ意義アル清興ヲナスモノトス
- 七、當直勤務 略

六 職員ノ待遇

- 一、當會社ハ店主(資本主)ト店員トノ間ノ利害ヲ一致セシメ業務ノ隆盛發展ニ資シ且従業員個々ノ福利ヲ増進セントスル目的ヲ以テ毎決算期ニ於テ利益配當金及賞與金ノ制ヲ設クルモノトス
- 二、當會社ハ店主ノ獨裁ヲ避ケ勉メテ平等公正ヲ得ンタメ店員中功勞手腕アル人又ハ人格閱歷アル人ヲ理事ニ推薦シ會社ノ重役トシテ事ニ當ラシム
- 三、利益配當金及賞與金ハ理事ハ店主、店員ハ重役會ニ於テ其額ヲ査定スルモノトス
- 四、(以下略)

- 七 積立金規定
- 八 懲罰規定 略

附 則

一、本規程ハ重役會ノ決議ヲ以テ改訂加除スルコトヲ得  
 大正八年一月七日

合名會社原田組事務分掌規程

- 第一條 本社ニ左ノ一室二部ヲ置ク  
 店主室、總務部、營業部
- 第二條 店主室ニ人事課・調査課・外國課ヲ置ク  
 人事課ハ左ノ事務ヲ掌ル
  - 社員ノ進退・賞罰ニ關スル事項
  - 社員ノ給與・待遇ニ關スル事項
  - 社員ノ共濟及慰籍ニ關スル事項
  - 社員ノ訓練及規律ニ關スル事項
- 調査課ハ左ノ事務ヲ掌ル
  - 營業上諸般ノ調査研究ニ關スル事項

第三節 合名會社原田組の誕生



營業上諸般ノ統計ニ關スル事項

外國課ハ左ノ事務ヲ掌ル

外國貿易ニ關スル諸般ノ事務

第三條

總務部ニ庶務課・計理課・商品課ヲ置ク

庶務課ヲ三係ニ分チ左ノ事務ヲ掌ル

文書係 文書ノ發受保管ニ關スル事項

外事係 官公署並ニ營業ニ屬セザル交渉事項

庶務係 日誌及記録ニ關スル事項並ニ他係ニ屬セザル諸般ノ事項

計理課ヲ二係ニ分チ左ノ事務ヲ掌ル

會計係 金錢ノ出納保管・財産ノ管理・賣懸代金ノ回收・其他一般會計事務並ニ調度ニ關スル事項

記簿係 計算及記簿ニ關スル事項

商品課ヲ五係ニ分チ左ノ事務ヲ掌ル

第一倉庫係 在庫品ノ出納・整理保管・貯藏品ノ補充ニ關スル事項

第二倉庫係 第一倉庫係ニ同ジ

記簿係 出納物品ノ記帳ニ關スル事項

發送係 發送荷物ニ關スル事項

到着係 到着荷物ノ取引事務

第四條

營業部ニ購買課・販賣課ヲ置ク

購買課ヲ三係ニ分チ左ノ事務ヲ掌ル

地方係 地方買入ニ關スル諸般ノ事務並ニ記帳

支店係 大阪支店ニ關スル諸般ノ事項

地場係 地場買入ニ關スル事務並ニ記帳

販賣課ヲ八係ニ分チ左ノ事務ヲ掌ル

地方係 地方販賣ニ關スル事項

支店係 奉天支店ニ關スル事項

地場係 地場販賣ニ關スル事項

船具係 船舶納品ニ關スル事項

支那商係 支那人方面販賣ニ關スル事項

會社官衙係 會社並官衙方面納品ニ關スル事項

滿鐵係 滿鐵納品ニ關スル事項

納品調査係 各方面納品ニ關スル調査事項 以上

本規定ハ大正八年十二月一日ヨリ實施ス

第四節 歐米視察と第三國貿易への進發

前節において述べたる如く、合名會社原田組は投機的事業ならびに思惑的取引を避けて堅



實一途に經營されて来たため、パニックによる直接的な打撃は殆んど受けなかつた。たゞ物價の低落によつて業績が幾分不振になつたのは歎むを得ないことであつた。「回覽簿」は此の間の事情を左の如く語つてゐる。

「營業狀態は曩に回覽致候如く未だ吾人の満足を得る程度の成績を示すに至らずは遺憾に堪へざる所なり。乍去、現今四國の情況、萎靡沈靜の時に於て幾分の利潤を得たるは聊か慰むる所なきに非ず。是れ必竟平素各位の精勵の結晶として感謝する所なり。

今此の利益の一部を割き利害亨通の趣旨に基き利益配當金を提供し各位の勞に酬みんと欲す。願くは將來益々奮勵し、店務の發展向上に細心の注意を拂ひ、更により以上の成績を擧ぐることに努められんことを希望する次第なり。

尙配當金及賞與金は各位半歳の勞苦の結晶なるが故、濫費を避け有効の使途に充てられ度重ねて注意致候」

財界の活況は樞花一朝の夢にも等しく、逆轉して深刻な不況と變つた。人の出處行藏は天の時に順應することが賢策であつて、不振の禍を轉じて福となさしむる積極的意圖こそ、總ての難關を克服する唯一の鍵である。世界的大パニックは、獨り日本財界のみならず、世界

圏の經濟を大混亂に陥れはしたが、一面日本の地位は世界的水準に飛躍したので、必然的に商事に携る原田組も亦、日滿經濟ブロックの中に局踳することなく、氣宇を世界的規模における經濟にまで擴大さるべきを要請されるに至つた。

そこで店主原田氏は、かういふ時にいくらあせつても駄目だ、第二段の飛躍を期するため歐米を視察して、輸入商品の性格検討、國際情勢の實情をつぶさに調査し、日本・滿洲の物資を廣く海外に進出せしめ、且つ海外の物資を吸収して國富増大の一役に處すると共に、好況後の恐慌的ペリヨードに對處すべき科學的の經營法、近代的生产工業の將來性の研究等々を今にして爲すべきだとの目的の下に、大正十年三月、大連を後に鹿島立ちされるに至つた。その當時は餘程の地位の人か富豪であるか、或は大會社や官廳の人でなければ歐米視察には出なかつたのであるが、この歐米視察は氏の事業そのもの、上に一大エポックを齎し、後半生における直接生産事業關與への契機となると同時に、原田組そのもの、其の後の發展の上に大いに寄與する所があつたのである。

附録「歐米に遊びて」(抄録)において見る如く、原田氏は大正十年三月鹿島立ち十二月歸朝されるまで約十ヶ月、歐米の諸商工業都市を歴遊されたのであるが、その歸朝後、合名會



社原田組の事業は、商権の上に一大飛躍を齎されずには居られなかつた。滿鐵を取引主體としてゐた頃を原田組の第一期とするならば、第二期は奉天に支店を進駐して奥地貿易に力點を置いてゐた時代であらう。勿論第二期と雖も滿鐵との取引業績は一段と増大したのであるが、何れにしても日滿經濟圏の中に局踏し商事會社としての眞面目を未だ充分に發揮するに至らなかつた。然るに今や小天地を脱却して、世界經濟圏に二十年來培養して來た地力を伸暢するに至つたのである。之を以て原田組活動の第三期とでも目すべきか。試みに歐米周遊によつて得たる收穫は、その中小を除き世界的大會社にのみ限定したとしても、

- 1 英國エドガー・アレン製鋼會社の特殊鋼
- 2 英國ウキリアム・クック會社のワイヤ・ロープ
- 3 獨逸ナシヨナル・ラヂエーター會社のラヂエーター及びボイラー
- 4 獨逸ラインネツカ會社の工作機械
- 5 獨逸マンネスマン會社の鋼管
- 6 米國オスター會社の捻切機

等々の代理店ならびに取引契約を結び、大連に輸入して販路を飛躍的に擴大したのである。

即ち合名會社原田組店主原田氏の歐米視察により獲得したる日本・滿洲の代理店は英國セフキールド市ウイリアム・クック製網會社であつて、礦山用ワイヤ・ロープは本溪湖煤鐵公司、滿鐵等に採用されて多數納品をなした。尙特約店としては、獨逸ラインネツケル、イーゼンホール會社の各種工作機械、獨逸ナシヨナル・ラヂエーター會社の煖房用ボイラー・放熱器及附屬品を取引し、滿洲北支に對して多數の販賣をなしたのである。

爾來外國品の輸入旺盛を極め、米國アメリカン・ワイヤーフワブリツク會社の青金網。アドバンスポンプ・エンド・コンプレツサー會社のウォーシントンポンプ。トライモ會社、オスター會社等の工具製品等の特約をも結び相當の成績を挙げたのである。

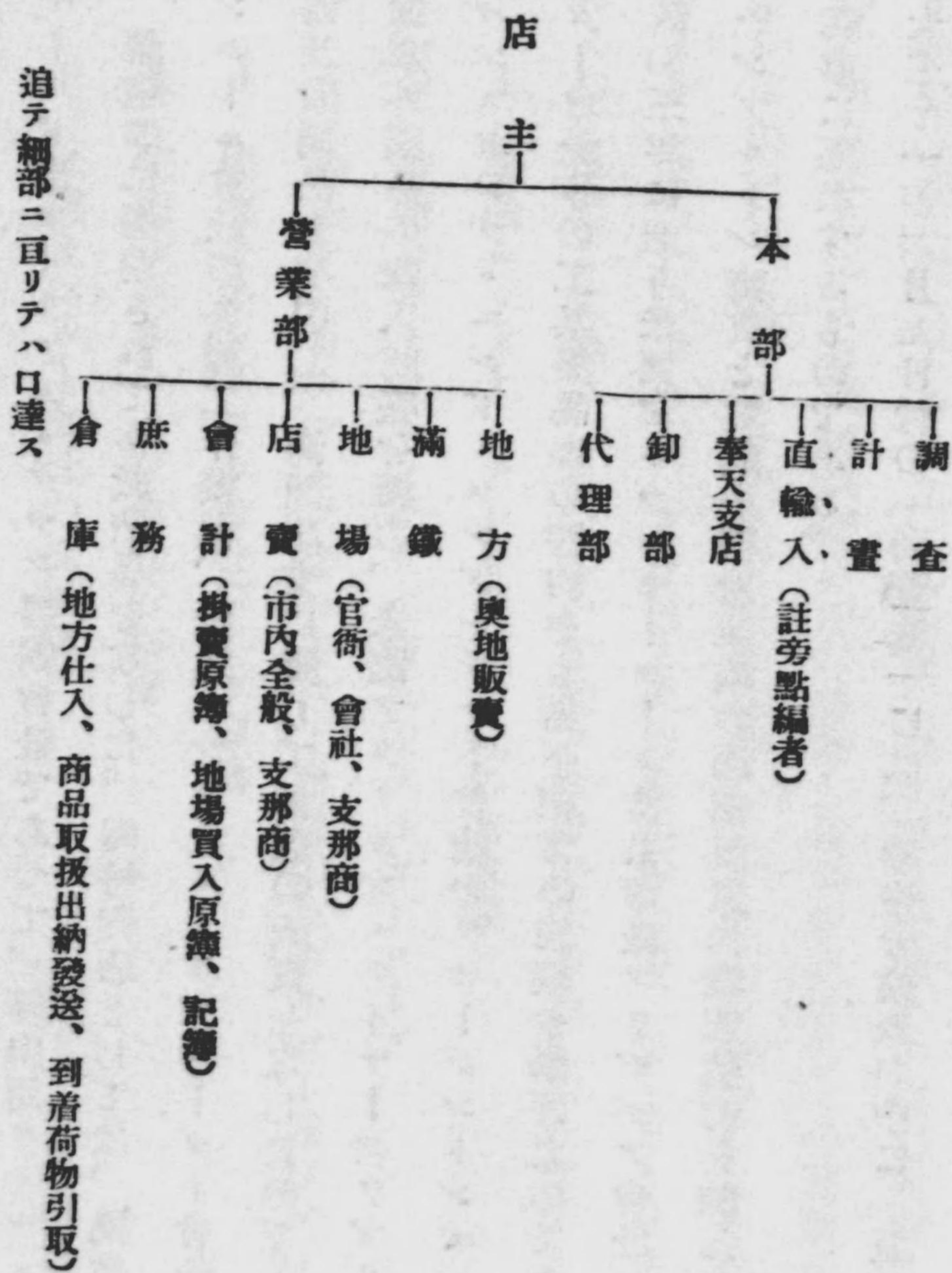
昭和三年に至り米國ゼネラルモーターズ傍系會社フリヂデア會社の支那總代理店ロースコ―ハンブルトン商會と電氣小型冷凍機の滿洲販賣代理店契約を結んだこと等、何れもこの歐米視察に胚胎するものである。

大正十一年六月九日付の「回覽簿」には、事務分擔表の中に「直輸入」の係が特設され、第三國貿易に潑刺として進發せんとする態勢がとゞのへられてゐることは看過し得ない。



大正十一年六月九日

自今事務分擔ヲ左ノ通り變更ス(ここには便宜上、係員氏名を省く)



この特設された「直輸入係」は更に發展擴充して「外國係」となり頗る業績を擧ぐるに至

つた。すなはち「回覽簿」大正十三年三月四日付の通達に依れば、

大正十三年三月四日

自今事務分掌左ノ通改定ス(便宜上こゝには係員氏名を省略す)

係名	業務ノ大要
調査	仕入品ニ關スル品質ノ比較研究、價格ノ調査
宣傳	輸入品其他ノ販賣策、宣傳方法及市内同業者トノ連絡
計畫	販路ノ開拓、擴張計畫
外國	外國貿易ニ關スル諸般ノ事務、(註旁點編者)
代理店	代理店ニ關スル總テノ事務
支店	奉天支店ニ關スル事務
地方	地方販賣ニ關スル通信其他ノ事務
満鐵	満鐵見積並ニ之ニ關聯スル凡テノ事務
納品	満鐵納品事務、未着品ノ調査督促並ニ記帳、賣上票ノ突合セ
官衙會社	各官衙會社工場ニ對スル販賣事務
華商	華商及油房方面ニ對スル販賣事務
地場	市内各方面店賣ニ關スル事務
カード	商品カードノ記入整理

第四節 歐米視察と第三國貿易への進發



會計 販賣帳簿ノ整理、請求書ノ作製、賣掛代金ノ回收  
 庶務 他係ニ屬セザル凡テノ事項  
 仕入 地方仕入品ニ關スル事務並記帳  
 倉庫 在庫品ノ保管、出納、整理  
 發送 發送荷物ノ取扱事務  
 到着 到着荷物ノ引取り事務  
 以上ノ如ク定ムト雖モ事務ノ繁簡ニ依リ相互補助スルノ義務ヲ有ス。尙細目ニ亘リテハ口達ス

由是觀是、深刻な財界の不況は、原田氏にとつては事業飛躍へのキー・ポイントでもあつた。

殊に氏の後半生に於て設立された仙臺市東北特殊鋼株式会社、撫順精機工業株式会社等の直營事業、並に氏の創立に關る鞍山市滿洲亞鉛鍍株式会社等々への事業動機並に經營理念は、歐洲視察を契機として、胸中に成竹をなさしめてゐたと言つても過言ではないのである。

歸朝よりも年代は稍々後になるが、歐洲視察の成果と關聯する事が大であるので、エドガー・アレン會社日滿總代理店引受けの經緯を本項で一言して置きたい。

原田氏は大正十四年三月、滿洲に於ける原田組の基礎も不動なものになつたので、二十二

年間居住した大連を後に、内地に歸住して京都に居をトされたところが歸住後三ヶ月經過したころ、エドガー・アレン製鋼會社の重役ゼ・シ・ウオード氏（附録「歐米に遊びて」参照）が來訪し、

「エドガー・アレン會社の支社は東京と大阪にあるが、どうか貴下において私の社の日本に於ける營業權の一切を繼承して頂き度いと、申出があつた。」

然るに氏は内地に歸住して日も尙淺く、財界との接觸も少く、當分靜觀して最も合理的な經營方式を決定したいと思つてゐられた矢先でもあつたので固辭されたが、ウ氏は辭を厚うして再三懇望して歇まない。そこで氏は

「東京・大阪にはエドガー・アレンの鋼材を取扱つてゐる店も多く、内地財界に根を張つてゐる巨商も多い。そして其等の人々は貴社製品の優秀性を認めてゐるので、きつと契約は成立すると思ふが、何故内地に歸つて日が淺い自分にそれほど熱心に懇請されるか。」

と反問すると、ウ氏は、

「いや其れは十二分に私も心得てゐる。但し巨商も多くは知つてゐるが、それは其の商店を



知つてゐるのであつて、マナージャーの性格を知らない。君なら舊知で性格も良く知つてゐるし、任せうる人柄だと思ふから頼むのだ」

と謂はれ、感激性の強い氏は目頭が熱くなるほどその意氣に感じられた。氏はエドガー・アレン會社東京・大阪の兩支社に持つ十二三萬圓のストックをどう捌かし、今後總代理店としてどう經營するかといふことよりも——否、そんな損得利害を度外視して、ウ氏のその一言に、

「やらせて戴きませう！」

と、店舗も従業員も引受けてくれといふ要求通りに快諾されたので、ウ氏も安心して歸國したのである。

かうした経緯をへて、大正十四年九月一日から、エドガーアレン製鋼會社總代理店として營業を始める事になつたのであつて、大正十四年上半年の營業報告庶務事項の中に左の記事がある。

英國セフキールド市エドガー・アレン株式會社ハ從來日本内地ニ於テ直接營業中ノ處、吾原田組ニ於テ日本及其屬領ニ於ケル販賣代理權ヲ獲得シ契約ヲ締結ス、之レガ爲メ左記ノ處ニ支店ヲ設置ス（十一月

六日登記手續完了ス）

大阪市西區立賣堀北通六丁目二十番地

東京市京橋區銀座二丁目十五番地

原田組の内地におけるスタートはかくして切られ、漸次基礎が固まつていつた。その翌年の大正十五年一月八日、新年告辭の一節に（回憶錄に依る）

「日本に於ける二箇の支店は建設の時代であり、滿洲の本支店は守成の時期である。一は進取一は自重、茲に兩々相倚り相扶けて更に吾が事業を完成せんとするものである」

と、年首の所懐を披瀝して、店員諸士の新段階に處する心構へに就き、三省を促されるところがあつた。

### 第五節 大正八年後における逐年別業績

本節においては原田組が合名會社として新發足をするに至つた大正八年から、滿洲事變勃發迄の業績を逐年別に辿ることによつて、その發展段階を見てゆきたい。本章第一節にも述



べたる如く、この年を契機として滿洲事變の起るまでは不況につぐ不況の時代であるだけに、本節において述べんとするところは、必然的に原田組の不況對策經營史もしくは苦難克服史とも謂ふが如き相貌を呈してゐるのである。

### ○大正八年度

個人經營原田組から、合名會社原田組として誕生したことは先に詳述したから茲には省略する。

歐洲戰亂勃發に依り鐵類其他工業用品の昂騰は既往數年間持續し、斯業者は何れもその利益に浴したが、七年十一月休戰條約が成立し、英米に於ける鐵類輸出解禁の報が一度傳はるや、俄然暴落に亞ぐに暴落を以てし、鐵商等の蒙る打撃は頗る甚大なるものがあつた。

原田組は常に堅實な營業方策を執り投機的思惑は避けてゐたのであるが、顧客の要求に應ずるため多少のストックは商賈當然の義務でもあるので、七年秋三井・川島の兩店を経て約三百噸の鐵を約定してゐた。然るにこの輸入が殊のほか遅れ、八年五六月の交に至つて漸く入荷した。此時既に鐵價は極度の下落を來してゐたために幾分の缺損を免れ得なかつた。

その他大阪支店を経て注文してゐた諸物貨は、同支店取扱者の更迭の爲めと、輸送の關係等によつてこれまた入荷が甚しく遅延して遲滯料を徴せられる事あり、或は價格を低下して納入したのもあり、殊に銀價の昂騰は苦力の賃銀を増し日用諸物價の騰貴は諸經費の膨脹を來す等の事があつて、經營は漸次困難となつて來た。

奉天支店は從來殆んど製糖會社を主として營業して來てゐたが、本年に至り毛織・纖維その他の工業が勃興したため意外の好成績をあげ得た。大阪支店は本春富岡理事が支店長として其の任に就き鋭意改善を謀り、九月には數名を雇聘して陣容を整へつゝあつたが、まだ活動の火蓋を切るまでに至らなかつた。

### ○大正九年度

上半期（以下、上半期とは前年十二月一日より當年五月三十一日迄、下半期とは當年六月一日より十一月三十日迄を指す）は其の當初において經濟界は順調で各種の工業も勃興し前途に相當の希望を囑し得べく觀測したので、工業用品販賣中の權威として立つ原田組も是に順應する方針を立て將に進行せんとする時に當り、俄然三月大恐慌が起り、超えて四月滿洲



一般亦其の影響を蒙りつて金融は梗塞し、將に起らんとする諸工業は中止の状態となつた。これに加ふるに滿鐵會社も亦増資行惱みの爲め資金が窮乏を告げ、九年度の事業は中止又は繰延となり滿鐵商事部の購入は頓に減少して、市内の商工業者は勿論、沿線各地の斯業者は非常な打撃を受けたのである。

本店においても是等の影響を受け業務は甚しく不振に陥り滿鐵納品を主として、本溪湖・撫順等の販賣が著しく減少した。更に鐵價に至つては八年秋末より稍々昂騰の機運に向ひ、本春に入つて益々騰貴せんとしたが、内地財界の急變は其の波動が鐵價にも及んで、四月以降漸次低下したが、思惑的商行爲を避け先物約定は勿論、貯藏を緊縮してゐたため、相場急變による損耗は免れ得た。尙、大連本店は大正七年三月より其の店舗並に倉庫を、市内山縣通十九號地及び丹波町三號地に建築中であつたが、十一月落成したので十二月一日同所に移轉した。

奉天支店は其の前半製糖會社を始め纖維・毛織等の諸工業會社創立の際のため、需品も相當の額に上り、一般もまた工業用品の需要多く稍々好況を呈したが、後半財界の變動により經營上の苦心が尠くなかつたが、幸に比較的多額の利潤を得た。尙同支店は大正八年五月か

ら、同地千代田通二十號地に店舗新築中であつたが、本年に至つて竣工を告げたので、四月二十八日移轉を完了した。

大阪支店は從來、西區立賣堀裏町に店舗を構へてゐたが、従業員の増加に伴ひ狹隘を告げ、三月二十三日、同區立賣堀南通五丁目十二番地に移轉し、後方勤務の任を完うすべく態勢を整へてゐたのである。

下半期について見れば、六月一日本店詰理事村原藤二郎氏が大阪支店長に任ぜられ、同支店長富岡忠治氏が本店勤務となつた。九月一日には店員守永壽芳氏が理事に推薦の上、本店勤務を命ぜられ、九月三十日には理事富岡忠治氏が願に依り退職してゐる。また十一月十五日には、本店船具部を閉鎖し、船舶用在庫品全部を吉田卯三郎商店に譲渡し、同店をして船舶に對する營業を繼續せしめた。

營業的方面から見れば、戰時に勃興した諸種の工業は何れも中止又は縮少を斷行し、之に加ふるに滿鐵會社においても資金の窮乏により一大整理に着手し、鞍山製鐵所及び撫順炭礦の如きは極度の緊縮をなし、滿鐵沿線における大小の事業は何れも窘窮を極むるに至つた。

奉天支店は、滿洲工業の中心地として戰時中より起業した製糖・纖維・毛織・製粉等の事



業が基礎固く着々進工したため、工業中の需要が尠くなく豫期以上の成績を挙げ、大阪支店は、村原氏が支店長に轉補して着々整理の實を挙げた。滿蒙に於ける商策は一に大阪支店の活動如何にあるのであつて、所員は後方勤務の實を舉げるために努力をいたしたのである。

### ○大正十年度

庶務的事項について見れば、一月十五日從來階下で執務しつゝあつた總務部及び營業部は此日階上に移轉し、階下は地場販賣係及び支那商係に充て他は商品見本陳列場として顧客の便を計ることゝなつた。三月一日には前述せる如く原田氏が渡歐され十一月二十三日歸連されて原田組事業の將來に大きい寄與をされ、三月十三日には豫ねて拂下を受けてゐた伏見臺七區及十一區の土地に對して家屋建築に着手した。

また先に船舶用品全部を讓渡してゐた吉田卯三郎氏が病氣に罹り、當分經營の見込がない爲に、七月貸與商品全部が返却され、吉田洋行は更に他の者によつて經營さるゝ事となつたから、本店對吉田洋行との債權は、同後繼者より返還される事となつた。

事業界は依然として沈衰状態を脱せず、財界も亦これに伴ひ、購買力は愈々減退する一方

であるため、専ら前期同様極力手持品の賣却と、堅實なる取次的營業方針を執り、更に此の難局に處すべく經費の節減をはかつた。「回覽簿」六月二十日付の記事は、此の間の事情を語つてゐる。

「大正十年度上半期ノ營業狀態ハ、曩ニ諸君ノ前ニ示シタル如ク甚ダ不成績ニ終リ遺憾不尠。一同失望ノ事ト愚考ス。必竟財界ノ不況ニ伴フ賣上ノ減少、經費ノ増大、手持品價格ノ低下ニ基因シ又止ムヲ得ザル事ナルモ、此ニ鑑ミ來期ニ於テハ此ノ失敗ヲ取返スベク協力一致、賣上ノ増進ニ勉メ、經費ノ節減ニ就テハ、ペン一本の微、紙一枚ノ細ニ至ル迄特ニ意ヲ用ヒ、此ノ上半期ニ於ケル缺損ヲ補充スルヤウ心ガケラレンコトヲ希望ス

下半期には「漸ク前期ノ缺損ヲ補償シ得タルニ止ル」も、奉天支店に於ては、牢固たる得意も定まり豫想外の好成績を得た。本期の營業報告には左の如く記されてゐる。

「惟フニ本期ハ事業界ノ不振ト財果ノ不安定トニ依リ、需要ハ例年ノ如クナラズ、加之斯ル不況時ノ常トシテ同業者ノ競争激甚トナリ從テ其ノ價格低廉ニアラザレバ賣買不可能ナル關係上、自然一般ニ利益僅少ニシテ、全ク好況時代ニ比スベクモアラズ。幸ニシテ前ニ於ケル缺損ヲ補償シ得タルヲ以テ此際吾人ハ緊禪一番、販路ノ擴張ニ勉メ、同時ニ冗費ノ支出ヲ節シ、更ニ來期ニ於テハ層一層ノ好成績ヲ得ルコトヲ囑望シテ止マザル所ナリ」。



### ○大正十一年度

本年度に於ける重要な庶務事項は左の如くである。

- 一、大正十年十二月十六日事務室ヲ階上ニ移シ、階下ヲ營業ノ一部ト見本陳列場ニ充當セシモ、萬事ニ不便多キヲ以テ、本年一月十五日再ビ階下ニ復舊執務スルコト、シ、而シテ市内販賣及華商賬房ハ倉庫ノ一部ヲ改築シテ同所ニ移ス。
- 一、代表社員原田猪八郎外遊ノ結果、將來歐米各國ヨリ直輸入目的ノ爲メ信用狀發行ノ必要上、山縣通店舖及ビ丹波町倉庫ヲ朝鮮銀行大連支店ニ擔保トシテ、一月十日登記手續ヲナス
- 一、五月三十一日大阪支店ヲ閉鎖ス
- 一、社員村原藤二郎ハ七月十八日其ノ持株全部ヲ社員原田猪八郎ニ讓渡シテ退社シ七月十九日發記手續完了ス
- 一、前期末閉鎖セシ大阪支店ノ廢止登記手續七月二十日完了ス
- 一、八月二十五日小田村信一ヲ奉天支店支配人トシテ登記手續ヲナス
- 一、理事守永壽芳ハ願ニ依リ十一月三十日退職ス

上半期について見れば、引續き市況は鈍狀で財界は不安裡に始終し、起業全く中止の狀態となつて商品の消化は意の如くならず、殊に金融の梗塞は極點に達し購買力の殺滅は豫想の外であつた。本店に於ては代表社員原田氏が約定された機械類は日を追ふて着荷したが、當時の狀態では、いまだ購買力を喚起するには至らなかつた。

特に大阪支店は、後方勤務として相當の努力を盡して來たが、營業不振の爲め購買事務は閑散となり、而も一方經費は何等削減し得られず、營業上不利となつた爲め、期末に至つて一時これを閉鎖する事となつた。

後半期もまた消極的方針による商狀にあつたが、たゞ奉天支店のみは、其の得意先である製糖會社鐵嶺分工場の建設、並に毛織工業の擴張等があり、加ふるに多年蓄積した根柢は同地方各方面における唯一の斯業として、日支兩方面よりの信用を得て、豫期以上の好成績をうる事が出來た。

### ○大正十二年度

上半期は要するに、「其ノ大半ヲ結水期ニ終始シタルト、不況襲來後事業・財界共依然ト



シテ不振ノ餘波ヲ受ケ、一般昔日ノ如キ盛況ハ望ム能ハザリシト雖モ、先ヅ相當ノ業態ヲ迎リ得タルモノト云フベシ。將來ノ經營方針ニ關シテハ目前ノ急務トシテ常ニ考查研究ヲ怠ラズ販路ノ擴張・經費ノ節約ニ意ヲ致シ難關ヲ踏破「せん」とした。

このために、五月二十九日左の如き「仕入品調査擔任決定」に關する件が實行に移され、やうになつた。

「去ル二十六日店員會ニ於テ披陳セシ仕入品ノ調査研究分擔左ノ通り相定メ候ニ付御了知相成度候。擔任者ハ其取扱品ノ仕入先、品質ノ良否、買入ノ時機、貯藏ノ數量等ヲ常ニ考究シ、取扱品ニ對スル智識ヲ向上セシメ營業上ノ利益ニ資スル所アラントス。各位ハ此ノ趣旨ニ基キ熱心ニ研究調査シ、精確ナル案ヲ建テ以テ商品仕入ノ時機ヲ謬ラザル様致サレンコトヲ希望ス

一、鐵類

(擔任者氏名略)

二、瓦斯管及附屬品並煖房用品

三、ポルトナツト、ワシヤ

四、銅、眞鍮製品

五、ペイント及刷毛、雜品

六、ロープ、油、帶革、帆布

七、外注品

右夫々頭書ノ品目ニ對スル仕入ニ就イテ調査研究ヲ命ズ。

然るに下半期に至り、九月一日母國東都における震災勃發の餘波を受けて金融は更に梗塞したが、本店にあつては前期の餘勢を以て販路の擴充に勉め、比較的順調な業績を辿つて賣上高も前期に倍加し、滯貸金及び遲滯料金の回收見込ないものを整理しても、尙相當の純益をあげ得た。

奉天支店においては、唯一の得意先とする滿蒙毛織及び南滿製糖等における購買力が依然として振はず、殊に支那側販賣については奉票下落の結果意の如くならず、又、兵工廠(次節参照)の如き官署に向かつて多大の努力を費したが、種々の事情の伏在(第二篇奉天支店史参照)せると經驗の淺いため思はしい商談もなかつた。それにも拘はらず約四割の賣上増進を示し結果において相當の成績を挙げ得たのである。

○大正十三年度

上半期母國の市況は、帝都復興材料の實需取引が旺んに行はれ、且つ見越假需要も起つて



沈滞気分は一掃せられるかの觀があつたが、滿洲においては期初既に結水期に入つたため諸工場は休止状態にあつた。しかも市場は免税輸入品が殺倒する氣運が濃厚となつて軟化の傾向あり、期央に至り是等輸入税減免品が市場に現はれるもの多きに比して消化がこれに伴はない結果、在荷漸増の氣配を呈して一般は寂寥たる状態を續けてゐた。

本店に於ては此の在荷漸増の傾向を阻止すべく、良品の薄利多賣主義をとつて豫期の成績を得、奉天支店は、兵工廠始の支那官衙方面に積極政策をとつて、これまた豫期の成果を収めた。

而して、「次期ノ事ニ就テハ今直ニ推斷ヲ許サズト雖モ、關稅ノ復活ト外國爲替ノ暴落トハ今後ニ於ケル輸入ニ不利ナルベク、之ガ對策ニ相當ノ腐心ヲ要スルコトナランモ、常ニ細心ノ注意ヲ以テ之ニ衝リ本期ニ比スレバ、活躍ノ時機ニ向フコトナレバ、勇往邁進良果ヲ結バンコト」を囑望して下半年を迎へた。

然るに八月に至り突如として財界に波紋を起した龍口銀行の破綻は、滿洲經濟界に及ぼした影響が甚大であつて、さなきだに萎縮してゐる業界をして益々險惡に陥らしめ、繁忙を極むべき建築界も異例の閑散を告げ、諸工業會社また緊縮方針を執つたから、荷動きは一層滞

滯した。しかも對外爲替異常の悪化は、得たる利益を爲替の變動によつて來る損失のために消耗される結果となつて、各業界とも、未だ擡頭の機運に達しなかつたのである。

此の間に處して、原田組は只管堅實な方針の下に積極的に行動し、奉天支店にあつては、期央において勃發した奉直再戦の雲行濃厚となるや支那側の需要著しく増大して異常の成績を收め、本店もまた賣上倍加の好成績を克ち得た。一般市場が不況を託つ渦中にあつて、獨り一頭地を抜いて多大の利潤を齎し得たのは、その營業方式の宜しきと、地盤の強靱性に起因するものではあるが、一面、各従業員が協力一致した努力の結晶と謂ふべきであらう。

### ○大正十四年度

前節「歐米視察と第三國貿易への進發」で述べたやうに、エドガー・アレン製鋼會社の日滿總代理店となつた機會に、十月十日、大阪市西區立賣堀北通六丁目二〇番地に大阪支店を復活し、東京市麴町區八重洲町一丁目一番地に東京支店を開設した。更に翌十一月二日に東京支店は東京市京橋區銀座二丁目十五番地に移轉して、新態勢を整ふるに至つたのである。

また從來本店に於ては、一部商品を店内に陳列し、他は事務室に充當してゐたが、陳列場



が狹隘になつたため擴張の要が生じ、七月十八日より店内の様態替に着手し八月二十二日に竣工した。而して倉庫の一部に在つた市内販賣及華商賬房も店内に移して執務することになつた。

上半期においては、不況は遂日深刻の度を加へ、政府の緊縮政策は金融の不良、對外爲替の不利等が交錯して業界は全く沈滞してゐた。

下半期においても、不況は依然たるものがあつて擡頭の機運に到達せず、年を加ふると共に益々不安の度を増し、前途尙混沌として逆睹し得ないものがあつた。殊に滿鐵を始め各工業會社方面の購入額は何れも事業縮少の餘波を受けて漸減の傾向があつた。従つて供給過多の關係上同業者間の競争が激甚となり、利鞘は日々に減瘦して業界一般に經營難の聲高く、殆んど利益を擧ぐる會社あるを聞かない状態であつた。

此の間、原田組本店においては、既に強固な基礎を有する一般の信用を唯一の武器とし、難關に善處すべき細心の注意と、堅實な營業方針の下に努力を傾注した爲め、前期を凌駕する賣上を示し得た。

更に奉天支店にあつては、東三省軍機製造廠を中心として、これに附隨する鐵工廠の新設

支那側建築の旺盛に依つて、鐵材及諸工具品の需要頓に加はり優良なる成績を收めた。只、大阪・東京兩支店は新設後尙淺く、漸く其の緒に就いたのみではあるが、銳意販路の開拓に勉め業績の見るべきものがあつた。然し創業費其他に豫想以上の支出を要して若干の缺損を出したが、これは過渡期として避くべからざる事であつた。

### ○大正十五年度

年首に當り店主原田猪八郎氏は左の如き所懐を披瀝して、社員を激勵されるところがあつた。

大正モ既ニ十五年トナリマシタ。匆々トシテ過ギ行ク歲月ノ速カナル、今更乍ラ驚クノ外ハ有リマセン吾人ハ今日ノ日ヲ如何ニ有意義ニ又如何ニ有効ニ費スカ、是ガ人間成否ノ分カル、所デアリマス。古イ諺デハアルガ「一年ノ計ハ元旦ニアリ」吾人ハ今ヨリ直チニ事業ニ奮闘邁進シ而シテ歳末ノ結實ヲ樂シミマセウ。

日本ニ於ケル二箇ノ支店ハ建設ノ時代デアリ、滿洲ノ本支店ハ守成ノ時期デアリマス。一ハ進取、一ハ自重、茲ニ兩々相倚リ相扶ケ更ニ吾ガ事業ヲ完成セント欲スルノデアリマス。



私ハ新春ニ當リ、各位ト共ニ左ノ事項ヲ遵守シ、人格ノ向上ト商社ノ發展ニ努メ度イト存ジマス。

- 一、吾々ハ世界無比ノ國體ノ下ニ生ヲ享ケタル事ヲ歡ビ常ニ愛國ノ精神ニ生キマセウ
- 一、吾々ハ正シキ道ニ依リ事業ヲ遂行シ苟クモ邪道ノ下ニ不淨ノ財ヲ欲シマスマイ
- 一、細心ノ注意ト最大ノ努力トハ吾人ノ生命デアリマス
- 一、如何ナル艱難モ吾人ノ試金石ト心得常ニ微笑ヲ以テ解決シマセウ
- 一、自己ノ任務ハ何事モ敏活ニ處理シ、「働イタ跡ハ氣安シ夕涼ミ」ノ風懷ヲ保チマセウ

大正十五年一月四日

店主 原田 猪 八 郎

かくて大正十五年を出發したが、圓價急激の打撃を蒙つた商社も、少くなく輸出入關係商工業者は一齊にこれが痛棒を受けた。

上半期において奉天支店は、奉直線が未だ平定に至らなかつた事と、それに伴つて同地方唯一の標準である奉天票の暴落があつた事の爲に、支那側の需要が激減したので、これが對策として特設部を新設して、積極的營業方針をとるに至つた。

下半期に至つても、銀價の暴落と奉天票の動搖不安定とは、奥地購買力に多大の悪影響を與へ、一方鐵價は當期中常に下押の過程を辿つた。九月末に歐洲鐵材シンジケート成立の入

電によつて、聊か好轉の曙光を見たが、在荷の豊富と消化力の減退とは、施すに詮なく一齊に見送りの形となり營業者の苦痛甚大なるものがあつた。

原田組にあつては従業員一同常に蘊蓄せる活氣を發揚して事に當り、貯藏品の賣捌、入荷品の處分、其他各官署諸會社等への納品をなして協力奮闘を怠らなかつた爲め、本店はその販賣額が前期に比し約八割の増加を示した。

奉天支店は奉天票の不安定に基いて常に甚大の脅威を受け、殊に支那官衙の納品は奉票若くは現大洋取引に限定させる等、不利の立場となると共に危險を伴ひ多大の苦心を要したが、特設部設置以來兵工廠等の納品は順次見るべき成績を得、大阪支店も亦、遂日業務進展の域に進むと共に漸く軌道に乗るに至つた。只、東京支店においては所員の努力尠くなかつたが經費に比して販賣高がこれに伴はない憾みがあつた。

### ○昭和二年度

歳首に方り店主原田氏より店員に對して與へられた所懷は左の如きものであつた。

歳茲ニ改マルモ世ハ諒闇ノ愁雲ニ閉サレ、國民等シク悲嘆ノ淵ニ沈ミ敬弔ノ誠ヲ奉レリ。而モ敬聖文武



ナル

今上陛下踐祚セラレ赫灼タル光明ト清新ノ希望トハ、吾人ヲシテ悲喜交々胸ニ迫ルノ感アラシム先帝ノ御登遐ハ素ヨリ哀愁動哭ノ極ミナルモ、徒ニ沈滞ニ陥リ活力ヲ失フガ如キハ忠誠ナル國民ノ爲スベキニ非ズ。吾人ハ改元第一ノ新春ヲ迎フルニ當リ、各々自己ノ常業ニ勇往邁進シ以テ忠良ノ誠ヲ致サント欲ス

惟フニ今上陛下御踐祚ニ當リ詔勅ヲ賜ヒ、「今ヤ世局ハ正ニ會通ノ運ニ際シ人文恰モ更張ノ期ニ膺ル、即チ我國ノ國是ハ日ニ進ミ日ニ新シクスルニ在リ」ト宣セラレ、國民ヲシテ勇奮祈進ノ意氣ヲ以テ處スベキヲ垂示セラレタリ。更ニ又、「浮華ヲ排ケ質實ヲ尙ビ模倣ヲ戒メ創造ヲ昂メ」ト宣マヘルハ、外來思潮ノ弊ヲ斥ケラレシ叙慮實ニ畏クモ恐レ多キ極ミナラズヤ。吾人ハ思ヒテ茲ニ致シ聖旨ヲ奉體シテ誤リナキヲ期セントス

然シテ吾ガ原田組ハ實ニ本年六月ヲ以テ開業滿二十五年ニ當レリ。其間波瀾重疊幾多ノ變遷アルモ幸ヒ今日ノ隆昌ヲ見タルハ、一ニ國家萬象ノ恩惠ト従業員諸士ノ勤勉努力ノ結晶ニシテ、眞ニ感謝ニ堪ヘザル所ナリ。幸ニ記念スベキ本年ヲ迎フル事ヲ得タルハ、諸君ト共ニ欣幸トスル所ナリ

諸君ハ斯ノ改元第一春ヲ迎フルト共ニ、吾ガ社第二十五年ノ記念ノ歳ニ逢遇セリ。願クハ詔勅ノ御趣旨ニ鑑ミ浮華ヲ去リ質實ノ氣風ヲ養ヒ、本來ノ業務ニ努力シ以テ忠誠ノ國民トナリ善良ノ社員トシテ面目

ヲ保タンコトヲ

茲ニ改元ニ際シテ聊カ素懷ヲ披瀝シ併セテ希望ヲ開陳スル所以ナリ

昭和二年一月一日

店主 原田 猪八郎

上半期について見れば、滿洲に於いては奉天票が遂に千円を突破する激落を現はし事業界の發展を阻止すること夥しく、偶々三四月の交に至りて金融界未曾有の恐慌來（本章第一節參照）は全國に渦を巻き、臺灣銀行を初め大小銀行の破綻を見るに至つた。かくて大混亂の結果は遂に非常手段として支拂猶豫令の發布を見る等、一として悲觀材料ならざるはなかつたが、本支店共に不撓不屈の努力と細心なる注意力とを以て、この難關を突破した。就中奉天支店にあつては幸ひ前期繰越の契約未納品が相當あり、しかも順調に納入を完了して賣上もまた開設以來の新記録を示し、大阪支店も基礎が漸く定まつて、前期に倍するの收穫を得ることが出來たのである。下半期の業績も亦、好調を持續し得、九月二十四日東京支店を東京市京橋區銀座二丁目十五番地から東京市京橋區本八丁堀五丁目六番地に移轉した。

### ○昭和三、四年度



昭和三年度の業績は、前年度と同傾向にあり、昭和四年度上半期は二月一日より施行された支那輸入關稅の改正による見越買のため、多少の荷動きはあつたが大勢に變化はなく、いくらか好轉の氣配が見えた。下半期は前期末の餘勢を受け時恰も需要期に直面してゐたため前途を好望しつゝあつたのであるが、突如、内閣の更迭——所謂政友内閣の積極政策により民政内閣の消極政策に想到して金解禁の氣分漸く濃厚となり、聽て政府の施政方針が緊縮節約の一途にあることが漸く闡明されるや形勢は逆轉した。かくて一般市場は前途の深刻な不況による實需の減退を慮り争ふてその手持品賣捌の態度に出でたので市價は落潮となつた。

更に滿洲にあつては露支間の國交斷絶の不祥事があり、爲に貿易上の圓滑を缺き銀價の低落もまた市場に影響するところが尠くなかつた。殊に鐵材の如きは今春に至るまでの比較的順調な漸騰氣分のため思惑輸入が企てられてゐたが、入荷に先だちて本國相場の下落と金解禁の氣構を受けたため、爲替相場の漸騰に禍せられて一部には破産に瀕する向きも出る等、一般我が業界は波瀾を重ねつゝ本期を終つたのである。

此の間に處して原田組においては、夙に市場の趨向を察し、來るべき金解禁影響の重大なることを考慮して、専ら在庫品の賣捌きに努め、殊に投機的思惑を爲さない營業方針は物價

下落に因る傷痍を極めて僅少に食ひとめ得た。

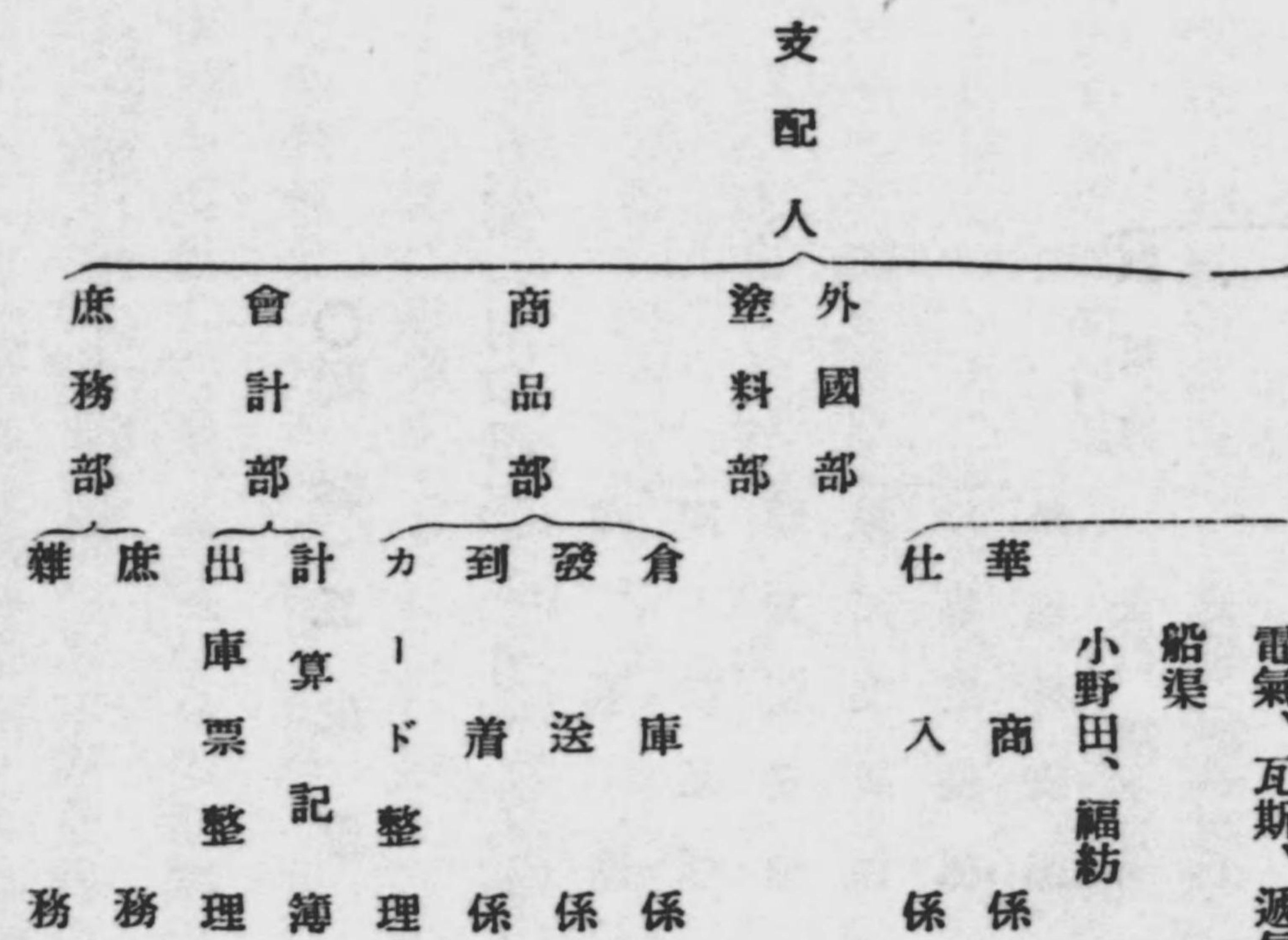
尙日本ベイント株式會社製品の代理取扱ひは、從來原田組營業部でこれを爲してゐたが、昭和四年八月一日以降原田組營業部より分離して、新に塗料部を設置して専ら同部にて取扱ふやうに改革したのである。

### ○昭和五年度

上半期の初頭（昭和四年十二月）左の如く事務分掌が改正された。

販賣部	滿鐵係	地方販賣係	奉天支店係	地場店賣係	地場外交係
	同納品係	地方販賣係	奉天支店係	地場店賣係	地場外交係
		大汽、陸軍官衙、土木課、市役所、警察、油房其他	大機、窯業硝子、民政署、高岡、航空、金福其他		





この職制改革に基づいて、奉天支店長理事小田村信一氏は八月に大連本店支配人に任じ、奉天支店長兼務を命ぜられ、同月には更に理事安田萬次郎氏が一身上の關係で圓滿退職をさ

れたのであつた。

本年初頭、店主原田氏は左の如き年頭所懐を明かにして、原田組の本年に處する指標を與へられてゐる。

私ハ各位ト共ニ前途光明ニ充ツル昭和五年ノ新正ヲ無事ニ迎へ得タル事ヲ歡ブモノデアリマス  
過去ニ於ケル我が國ノ財界ハ實ニ不況ノ底ニ沈倫シ一般國民ノ思想ハ益々惡化スルノミデアリマシタガ  
昨夏以來漸ク緊縮實質ノ精神ガ官民ノ間ニ漲リ、財界ノ整理ハ其ノ緒ニ就キ僅々半歳ノ短時日ヲ以テ多  
年ノ懸案タル金解禁ガ行ハル、事ハ御同慶ニ堪ヘヌ處デアリマス。是ニ依リ吾人ニ示サレタル訓ハ「誠  
意ト努力」ガ如何ナル難事モ遂行シ得ザル事ナシト云フ事デアリマス  
想フニ今年ノ前途ハ尙必ズシモ樂觀ヲ許サズ、寧ロ解禁後ノ財界ハ産業ノ不振、物價ノ低落、需要ノ減  
退、失業者ノ増加等、幾多ノ難件悲事ノ展回サル、事ハ疑ヒ無キ事ト思ハル、モ、我々ハ前述ノ「誠意  
努力」トヲ以テ常ニ緊張シ又希望ノ陽光ヲ持シ業務ニ終始セバ必ズ豫期ノ成績ヲ克チ得ル事ト信ズ  
如何カ各位モ此ノ精神ヲ失ハズ、吾々原田組事業ニ奮勵努力セラレン事ヲ希ヒマス  
大連本店ニ於テハ

一、合理的經營ノ研究、即チ

取扱品ノ整理

第五節 大正八年後における遂年別業績



主力商品ノ販賣増加

宣傳方法ノ研究實行

一、和衷協同、チムウオークニ努ムルコト

朝カラ暮迄ニコニコ主義ヲ以テ事ニ當ル事

溫容笑顔ハ何事モ圓滑ニ解決ス 以上

何事ノ降り積ルトモ春ノ雪

解クルハ人ノ陽氣ナリケリ

一月四日

大阪支店ニテ

原田 猪 八 郎

かくて上半期を迎へたが「採算ヲ度外視スル販賣ノ競争ハ、勢ヒ獲ル所ノ利益ヲ制限セラレ只僅ニ商品ノ新陳代謝ヲ行フノ程度ヲ超ユル能ハズ、遂ニ半歳ノ努力モ銀價暴落ニ依ル缺損ト基礎ヲ堅實ニセンガ爲メノ滞貸整理ニ依リ遂ニ缺損ヲ計上」するの止むなきに立ち至つたのである。

下半期も金解禁後の財界は依然として暗愴たる過程を脱し得ず、日を追ふて増々深刻を加へ、政府の緊縮政策・對外貿易の不振は諸事業に反映するところ愈々顯著となつた。殊に滿

洲方面においては、滿鐵會社の運輸收入減に依り一般市況の萎靡沈靜は其の極に達し、一面銀價暴落後の悪影響はいまだ回復しなかつたので、購買力は更に振はず、又金融の梗塞は賣掛金の回収も意の如くならなかつた。加ふるに内外諸物價、殊に鐵材金屬類は二十有年來の稀有の市價に暴落し、原田組の經營をして最も困難ならしめたが、克く堅忍自重して大勢を顧慮し、將來の飛躍に備ふるところがあつたのである。

而してその飛躍へ具ふるものとして、原田恵伍氏は大きい意義を有する。原田組といふ活動力に満ちた組織は、統率者たる店主原田猪八郎氏によつて限りなき新生命を賦與され培養されつゝはあつたが、地域的に事業系列を擴大し、量的に經營分野を掘鑿しつゝある原田組には、その後継者長男誠一氏が末だ年齒小にして學業半ばにある時に方り、原田店主の良き補助者であり且又高級參謀を要請するに至つた。しかもそれは時代の意向を正確に把握し、透徹せる經營眼を持ち、そしてまた氏の事業精神——即ち國家奉公への念願に燃ゆる青年でなければならなかつた。氏はこゝに遠藤徳彌氏の三男恵伍氏を懇望して、昭和五年椰子嬢と華燭の典を結ばれることになつた。恵伍氏は一高を経て東京帝大商學部の出身、卒業後日魯漁業に勤務して大いに其の將來を囑望されつゝあつた俊秀であつて、發展的段階に對應する原



田組の若き指導者としての稟質に恵まれてゐた。原田家入籍後の惠伍氏は、大阪支店に入りて岳父の薫陶を受け、後述する如く昭和八年原田組支配人として渡滿されるに至つたのである。

### 第六節 取引先の變遷と奉天兵工廠

本節には原田商事の發展を得意先の變遷といふ角度から考察する。敘述の關係上、第二期（充實時代）と第三期（建設時代）とを包含してゐる點は諒せられたい。

既に前章に於いて記述したる如く、原田商事は創業の當初より、鐵鋼、機械、工具、油脂、船具、工業用雜品等を主要取扱品目としてゐた關係上、其の得意先は概して一般大衆民需よりは、鑛、工業、鐵道事業等の實需家、或ひは之を目標とする中間業者への卸賣に重點が置かれて來た。

原田商事株式會社の前身原田組が、滿洲の門戸大連に於いて發足をなしてゐる關係上、變遷の記録が滿洲を中心として行はれてゐる事は當然の事と思考される。滿洲に於ける各種の近代的開發、生産工業、運輸事業等の發達は、日露戰役を契機とする戰後經營に其の端を發

するもので、歐洲大戰に依つて之に其の飛躍と堅實性とを加へたのである。明治三十八年日本軍の所管に歸してゐた南滿洲野戰鐵道提理部は、明治四十年四月一日を以て其の經營を滿鐵會社に遷し、滿鐵は戰後日本の資金難にて相等の苦心を嘗めたが、野戰鐵道時代の狹軌線を廣軌線に改築した、當時安奉線敷設工事に、原田組は逸早くセメント其他の物資を供給して幾多の努力を拂つたことは、前章第四節に記述せるところである。

滿鐵の創業當初、米國はハリマンをして買收運動に乗り出さしめ、小村外相の明敏によつて破棄された後も、執拗に滿蒙鐵道の畫策を圖り、吾が邦の滿洲に於ける特殊權益を破らんとした。茲において我日本に於いても亦、列國のそれらの行動に鑑み、大正二年支那政府との間に滿蒙の五鐵道敷設權乃至投資優先權を獲得したのである。後年我邦の資本、技術を以て建設せられた洮昂、四洮鐵道等には直接間接に原田組から相當莫大な納品をなし、原田組として滿鐵社業の進展に資する處が大であつた。

爾來幾星霜、大滿鐵の經營はあらゆる部門に涉つて擴充を示し、或は鐵道工場と謂ひ、鞍山の製鐵所と稱し、撫順炭礦の開發と謂ひ、或ひは又港灣の施設、船舶、水運、化學工業の面にまでも其の領域を廣めたが、原田組の滿鐵會社との取引は終始一貫、大局的に見れば殆



んど渝ることがなかつた。眞に滿鐵會社は原田組の最重要な顧客であると共に、相互共榮の立場にあつた。

次に特記すべきは、鑛業、工業の隆盛に伴ふ需要先の變遷である。原田組と古く且深い關係のあつたものに本溪湖煤鐵公司（既出）があつた、是は日露戰爭中大倉組が先づ石炭の採掘に着手し、後明治四十三年製鐵事業を興すと同時に、同公司に包含せられたのであるが、建設の當初、原田組は力點をこゝに集中して納品した事は先に述べた。由來同公司与原田組の取引は長きに及んでゐる。

このほか滿鐵經營の撫順炭礦も、原田組の重要な顧客であつた。日露戰直後僅々日産三〇〇噸位に過ぎなかつた同炭礦は、遂次礦坑の擴充を圖り、歐洲戰爭頃より大正末期にかけて急激なる増産をなすと共に、莫大なる資材、機械類の需要を告げ、此の間原田組が同炭礦に寄與するところ甚だ大なるものがあつた。撫順炭礦はまた大正十年頃より油母頁岩工業の開發に着眼し、昭和二年以降は急速な生産業績を示した。特にフェルタークロス製品等は同工業に莫大な需要を伴つたものであるが、それ等の供給に原田組は相當の力を注いだ。

前にも述べたる如く、滿洲に於ける近代工業の興隆は歐洲大戰後日本人側に起つた工業熱

であつた。（本章第二節奉天の大工業化と原田組の進出）。奉天地域に於ける南滿洲製糖株式會社（現

滿洲製糖の前身）の設立であり、滿蒙毛織株式會社、滿蒙纖維工業株式會社の創設である。

一方支那側にも工業熱は湧然として起り、大正十一年には奉天紡紗廠の設立となりその當時原田組奉天支店は現地出張員を派して、専心その需要に最大の努力を拂ひ所期の目的を完遂した。

一方關東州においても油房工業（大豆油製造）、大連機械製作所（車輛工業）、小野田セメント株式會社等の建設勃興を見、各種工業用品の需要を見るに至つた。なほ地方的には哈爾濱の呼蘭製糖會社、製粉會社、開源・撫順・遼陽・營口・安東方面に於ける幾多の工業會社との取引があり、原田組の當時に於ける販賣額は著しく上昇したのである。

然るに此等の事業も、歐洲大戰後土崩瓦解し、或ひは滿身に瘡痍を受けて再び立ち上るの氣力を失つたものも多數發生した。其の頓挫によつて商社の蒙つた打撃は甚大なものがあつたが、原田組は良く投機的思惑を避け、堅實商策によつて此の難關を突破し得たことは既に前節において述べた處である。

次に特異すべき取引先として擧げられるものに奉天に於ける張作霖の兵工廠がある。これ



は張作霖が第一次・第二次の奉直戦争を契機として、其の勢力を支那四百餘州に派及し、大軍閥大覇者たらしめんとする野望の下に設立されたものであった。

即ち張作霖は遂次其の勢力を全支那に打ち立て、武力統制の意圖を以て民國十年兵工廠を奉天に設立し、二萬餘名の技師・職工を使役し、當初の投資五億元と謂はれてゐた。爾來擴充につぐに擴張を重ね、終に東洋一とも稱すべき兵工廠は完成を見たのである。

昭和四年現在に於ける組織を見れば、總務部、工務處、材料處、審檢處、庶務處、槍彈處、砲彈處、葯廠、槍廠、鑄造廠、火具廠等に分れ、其他にも造幣廠、兵器廠、醫務所、稽查所、科學研究所等があつて實に完備したものであつた。

又技師も日本、英國、丁抹、瑞典、獨逸、露國等より招聘し、兵器彈藥材料を日本より、電話機、鐵線、被服廠機を米國より、兵器製造機を丁抹より、無線電信機は獨逸より、無煙火藥用酒精は獨逸及米國より、飛行機は伊太利及獨逸より、夫々購入してゐたので、各國の所謂外商は、其の注文獲得又は納品に火の出る如く鎬を削つた。原田組も當時奉天支店に特設（前節並に「第二篇奉天支店史」參照）を設け、青木豫備中佐を該工廠擔當の主任として招聘し、鐵鋼、機械を納入して異常なる成績を挙げたのである。

然るに當初日本軍部の支援指導によつて發足した兵工廠も、逐次排日の氣勢が頓に上り、いつか外人商社の獨占的市場と化し、張作霖爆死事件によつて代金決済に相等の憂慮を伴ふやうになるに至つたので、後年原田組はその取引を休止した。

當時の競争外商は、獨商カローロウイツツ商會外十三餘、英商ジャーデン・エンジニヤリング會社外四社、米商アンダーソン・マイヤー外一社、チエツコ國スコダ工場、奧國ボーラー會社、丁抹、諾威、露國等の商社があつた。尤も原田組は外國製造會社の滿洲代理權を有して居り、外國貿易に重點を置いてゐた關係上、これらの外人商社を経て引合せのあつたのも相當あり、全く莫大な取引額を得たのであつた。

また日本商社としては當時五、六十店にも及び、原田組の外に、大信洋行、永發洋行、大倉組、三井物産等はその有力なものであつた。尙前記機械、工具材料以外にも、獨商は兵工廠建築請負の獨占を得てゐたので、原田組はその取扱商品たる獨逸製ナショナル・ラヂエーター、暖房器具及び水道用品等の需要に應じ、兵工廠との間接的な取引もなしてゐた。

之を要するに、原田組の取引先は、日露戦役直後において軍部關係に重點が置かれ、次に第一次歐洲大戦後は好況によつて勃興した諸會社との取引が第二段階をなし、戦後整理時代



に入つては、諸會社ならびに兵工廠に力點を置き滿洲事變を迎へた。

而して其の時代々々の波によつて興隆或ひは凋落した各方面の需要先の盛衰によつて、原田組も幾多經營上の盛衰を味ひ來つたが、滿洲帝國建國以來は國家的要請に基く特殊會社及び軍部關係との取引を主體とし、滿洲國經濟統制方針に照應しつゝ營業し來つたのである。これらに就きては章を改め次章において述べることにしようと思ふ。

## 第四章 滿洲事變以後現在迄

### (第四期飛躍時代)

#### 第一節 滿洲事變と原田組

九月十八日夜半柳條溝鐵路の爆破は、滿洲事變の端緒となつたが、その翌十九日本庄關東軍司令官は幕僚を從へて、奉天大廣場東拓支店樓上に入つて之を臨時關東軍司令部となし、在滿皇軍の指揮に當ると共に、二十二萬邦人の生命財産を擁護し併せて我が既得權益の確保を期された。更に二十一日には次の如き聲明書を發して、公明正大なる我軍の自衛權行使の眞意を民衆に知らしめて人心の安定を圖られるところがあつた。

#### 日本軍司令官布告

昭和六年九月十八日午後十時三十分東北軍ノ一隊ハ奉天西北北大營附近ニ於テ日本軍守備隊ヲ襲撃シ彼ヨリ對敵行爲ヲ開始セリ。抑々南滿洲鐵道ハ條約ニ基キ正當ニ獲得セル日本帝國ノ所有ニ



屬シ帝國ハ之ニ對シ他國ヲシテ一指ダモ染メシメザル所、民國東北軍ニシテ敢テ之ヲ犯セルノミナラズ更ニ帝國軍隊ニ對シ銃砲火ヲ開キシガ如キハ是レ東北軍自ラ求メテ明カニ我帝國ニ對シ挑戰シ來レルモノナリ。

之ヲ輓近簇發スル我權益侵害行爲ト到ル處ニ生起スル毎日行動ニ照スニ決シテ一時的感情ノ誘因ニ非ズ、國際道義ノ無視慣用ト毎日行爲ニ狎レタル民國軍權ノ計畫的ナルモノ、外何物モナク、勢ノ趨ク所今ニシテ之ヲ芟除殲滅スルニ非ザレバ我在滿利權ノ覆サルベキハ火ヲ賭ルヨリ明カナリ、然レドモ熟々惟フニ此ノ如キ暴舉ヲ敢テスルモノハ支那一般民衆ニアラスシテ、民生ヲ芟除シテ顧ミザル一部野心軍權行爲ニ外ナラス。

本職ハ南滿洲鐵道保護ノ重責ニ鑑ミ既得利權擁護ト帝國々軍ノ信威確保ノタメ斷乎タル處置ヲ執ルニ寸毫モ躊躇スルモノニアラス。帝國ノ膺懲セントスルハ東北軍權ニシテ一般民生ノ休戚ニ關シテハ本職ノ夙ニ苦慮スル所、之ヲ一般部下ニ徹底セシメ其福利ノ擁護ニ就キ最大ノ努力ヲ要求シ置ケリ。故ニ一般民衆ハ毫モ憂フル所ナク業ニ安ンジ居ニ成ミ聊モ疑懼逃逸ノ舉ニ出デザランコトヲ希ム。

雖然我軍ノ行動ニ妨害ヲ加フルモノニ對シテハ秋毫モ看過スルコトナク斷乎タル所置ニ出ヅルコトヲ重ネテ聲明ス

昭和六年九月十九日

大日本關東軍司令官 本 庄 繁

更に翌二十日には、特務機關長土肥原大佐を臨時市長に任命して、奉天市の市政公所を城内小西門大街に開廳した。當時の佈告によれば「奉天市政ノ範圍區域ハ奉天城内及商埠地ニ限リ滿鐵附屬地ハ從來ノ通トス」と定められ、祕書課・總務課・警務課・財務課・衛生課・事業課・工程課・技術課等に分署してゐた。

かくて張軍閥は果敢な皇軍によつて敗退せしめられ、東北政權は急速度に崩壊し東三省は無政府状態を呈したが、此の間多年軍閥の壓制下に呻吟してゐた省民の中からは民衆を基礎とする新政府要望の聲が熾烈となり、遼寧省民は袁金鎧・干冲漢・丁鑑修・朝雲等を擁して地方自治委員會を結成して遼寧省を奉天省と改稱した。昭和六年十二月には奉天省城に奉天各界代表會議を開き、地方維持委員會を廢して奉天省政府が組織され、省長に臧式毅を推戴して滿洲新國家成立の母體となつた。

吉林省に於ては熙洽が學良政權よりの離脱を聲明して、吉林省を獨立區域とし、哈爾濱の特別行政區長官張景惠は東省特別區治安維持會を作つて自ら會長に就任し、黑龍江省に於て



も日本軍の眞意を諒解して抵抗を断念した馬占山と張景惠の提携がなり、熱河の湯玉麟も建國運動に参加するの旗幟を漸く鮮明にするに至つた。

東北四省が一應獨立形態を整備し、張學良の錦州政府が昭和七年一月七日を以て瓦解するや新國家建設の運動は日を逐ふて熾烈となり、奉天省長臧式毅を中心にして、商埠地趙欣伯邸に歴史的な建國會議が開かれた。ついで二月十六日、臧式毅・張景惠・趙欣伯・熙洽・馬占山の五巨頭は張景惠公館に會し、所謂「五巨頭建國產婆會議」を開催し、新國家建設に關する重要事項を決議する機關として東北行政委員會を組織したのである。同委員會は前清宣統帝推戴に關する重要會議を開いた結果、元首傳儀執政の出慮を懇請することになり、三月一日「三千萬民衆の意響を以て即日中華民間と關係を絶ち滿洲國を創立す」との建國宣言を發して、新國家滿洲國が誕生するに至つたことは周知の通りである。

滿洲事變を語るとき、原田組奉天支店員の活躍を逸するを得ない。ある時は「遼陽多聞師團の精銳が奉天に到着、尖兵を案内して、日頃城内の兵工廠その他官衙を熟知し且つ支那語をよくする中西君が勇躍部隊の先頭に立ち城内に道案内を承り、奉天支店員の面目を發揮した」事もあり、或はまた「戦局の進展と共に奉天支店員は夫々、當時の關東參謀長三宅少將

の傘下に入り、涼工廠、被服廠、糧秣廠、或は東北無線電信局等の守備に服した。滿洲事變勃發以來十二月十八日迄は、支店員は全く業務を取る餘暇なく、召集解除を反復すること三回」に及んで、ヘンオキタの第一報を大連と大阪に打電したのみといふ多忙さであつた。尙、奉天支店の活躍については、第二篇奉天支店史に詳しいから、就いて参照されたい。

滿洲事變は伸びんとする大和民族の自衛的行動であつた。外國資本主義の重壓をつき破りその桎梏を脱して産靈の肇國理念を顯現し、民族の新しき創造をなさんとするものであつた。事變前の譬へようなない沈鬱性と、事變後の蒼空のやうな明るさは、それは祖國自體のものであると同時に、當然また原田組の業績にも反映した。いまこれを昭和六年度上半期の營業報告に見よう。

經濟界ノ不振ハ益々深刻ノ度ヲ加ヘ母國政府ノ緊縮政策ハ漸ク各方面ニ徹底シ諸事業ノ疲弊困憊其極ニ達セリ。滿洲ニ於テハ空前ノ銀價低落ト滿鐵會社ノ收入減トハ市況ヲシテ萎微衰退ヲ來サシメ從テ支那側方面ノ需要ハ全ク枯涸シ滿鐵會社ノ購買力ハ極度ニ減額ヲ來シ殊ニ本期ノ大半結氷期ナリシトニ依リ各種ノ條件頗ル悪シク暗澹ノ裡ニ本期ヲ終了セリ。(以下略)

と記し更に「蓋シ今後果シテ何日ノ時ニカ市況ノ好轉ヲ見ルヤ豫測ヲ許サズ」として、暗い



重苦しいものがあつたが、滿洲事變の勃發した下半期には

世界的不況ハ本年ニ入り益々深刻ノ度ヲ増シ、滿洲ニ於テハ滿鐵官衙ヲ始メ一般ニ極度ノ緊縮ヲ實行セシ爲メ諸事業ノ疲弊ニ伴ヒ商用ノ需要激減シ、殊ニ滿鐵ハ六月首腦者ノ更迭ト共ニ既定計劃事業ノ内未着手ノモノハ全部中止スル等徹底的緊縮政策ニ傾キ加フルニ九月十八日勃發セシ日支軍衝突事件後ハ奥地方支那側對取引殆ンド杜絶状態トナリ、次デ英國ノ金本位制停止ハ世界經濟界ニ大衝動ヲ與ヘ惡材料ヲ生ムニ至レリ。爲メニ鋼材其他諸製作品ニ至ルマデ價格ハ低落スルノミニテ回復ノ曙光ヲ見ルニ至ラズ不況裡ニ本期ヲ終了セリ。(以下略)

とは記してあるが、この末尾に「次期ハ尙幾分ノ難關ニ遭遇スルモノト覺悟シ細心ノ注意ヲ怠ラズ益々自重大勢ニ順應シテ過誤ナカラント」を期して、豫測を許さざる前期に比すれば幾分の難關にまで進展した見透しの下に積極的意圖を裡に藏してゐる。昭和七年度上半期も不況に終始はしたが既に曙光は見ゆるに至つた。すなはち

本期劈頭ニ於ケル政變ニ伴フ金輸出再禁止ノ斷行セラルルヤ對外爲替ハ大變動ヲ來タシ輸入品ノ暴騰ハ勿論内地一般物價ノ騰貴ヲ招キ、更ニ新滿洲國ノ建設ハ需要ノ喚起ヲ豫想シ景氣ノ恢復ハ將ニ滿洲ニ待望スル所多カリシガ世界的不況ノ大勢ニハ抗スル能ハズ、期央ヨリ再ビ需要ノ不振ヲ來タシ依然トシテ不況沈

滞ノ裡ニ本期ヲ終了スルノ止ムナキニ至レリ

此間當社ニ於テハ先ヅ年初大阪ニ原田組本部ヲ設置シ各店ヲ總轄シ、次デ東京支店ノ店舗ヲ移轉シ陣容ヲ改メ、更ニ大連、大阪ニ於テモ内部ヲ改革シ清新ノ氣ヲ鼓舞シ經費ノ節約ト能率ノ向上ニ努メ不況時ニ處スル凡ユル手段ト努力ヲ爲シ、タメニ幾分ノ利純ヲ計上スルニ至レリ。思フニ今後ノ業界ハ尙混沌トシテ豫測ヲ許サザルモ滿洲國ニ於テハ新タニ鐵道ノ建設アリ更ニ資源利用ニ伴フ工業ノ振興等幾多希望ノ材料ナキニ非ズ。吾人ハ内地及滿洲ト相呼應シ努力奮闘以テ所期ノ業績ヲ擧ゲント欲スルモノナリ。

皇軍の壓倒的な戦局の進展、滿洲帝國の成立等々、逞しい大和民族の胎動は活天地滿洲を舞臺として、壯大な構圖を描きつゝあつた。慧敏な店主原田氏は新事態に照應する新機構を樹立されたのである。一に原田組本支店の一元的統制を企圖する原田組本部の設立であり、二に東京支店の店舗を現在の東京市丸ノ内三菱廿一號館に移して新經營政策を採り(第二篇東京支店十八年史)、三に本店並に大阪支店の内部機構を改革されたのである。

大連本店の機構改革を見るに、理事小田村氏を總帥として四部制を布き、販賣部(主任―材料・小川氏・機械・大浦氏)に滿鐵係・奉天支店係・地方販賣係・地場販賣係・地場外交係・華商係・代理係・外國係・宣傳係・考案係(調査・計畫・統計事務)の十を置き、塗料部(主任



稻垣氏)に塗料係を、商品部に仕入係・倉庫係・到着係・カード整理係の四係を設け、更に會計部に現金出納係・庶務係・計算係・地場集金係・雑務の五係を整備して鵬翼の陣を張つてゐる。たゞこのうち塗料部は昭和七年十二月一日に廢して、日本ペイント滿洲販賣株式會社を設立し、奉天に本社を、大連に支社を設けたが當分の間大連に本社が置かれてゐた。同日付「回覽簿」を見ると小川邦雄氏が同會社の囑託を兼任され、今中市郎・杉井虎雄兩氏が原田組塗料部から轉動してゐる。

新陣容成つた昭和七年度下半期の營業報告によれば

前年來ノ不況ニ明ケシ本期ハ依然トシテ財界ノ沈鬱ニ伴ヒ需要ノ不振ヲ來タシ商勢抄々シカラザリシガ八月中旬ニ至リ對外爲替暴落ヲ告ゲ爲ニ輸出ノ旺盛トナリ、加フルニ軍部方面ノ需要頓ニ劇増シ各地生産工業ノ活況、商品市場ノ殷賑ハ蓋シ數年來見ザル所ナリ。一方滿洲國ニ於テハ鐵道ノ新設、都市建設ノ進捗ト共ニ是等ニ要スル需要ヲ喚起シ多年ノ不況ヨリ離脱スルニ至レリ(以下略)

多年の不況沈鬱はこゝに全く拂拭されるに至つた。第一次歐洲大戰後の好況に商權を擴大した原田組が、好況後の恐慌によく堅實商策を以て充實を計り、今こゝに飛躍時代への段階を迎へたのである。左に昭和八年度の營業概況を掲記して、本節における結びとしたい。

(上半期)——客秋以來一般財界ノ狀況ハ延イテ我金屬界ニ好響ヲ齎ラシ就中本年ニ入り軍需品製作旺盛トナリ民間工場ニ其餘澤ヲ及ボシ内地支店ノ取扱ニ係ル高級鋼並ニ工具類ノ需要頓ニ増加シ、大阪・東京兩支店ニ於テハ創始以來ノ販賣記録ヲ示スニ至レリ。

更ニ滿洲國ニ於而ハ熱河討伐終了ヲ轉機トシ代フルニ政治經濟ノ工作着々進展シ、新京國都ノ建設ヲ始メ滿洲國鐵道ノ滿鐵委任經營ノ實現トナリ新線ノ布設日ト共ニ進ミ尙多年ノ懸案タリシ昭和製鋼所、滿洲化學工業會社等基礎的事業逐次設立サレ從テ鐵鋼機械並ニ建築材料ノ需要著シク激増シ滿洲商品市場ハ正ニ殷賑ヲ呈スルニ至レリ。加フルニ期央鐵價ノ昂騰ニ伴フ製品ノ暴騰ハ一層斯界ニ拍車ヲカケ近來稀有ノ盛觀ト稱スベキカ

此間我原田組ハヨク其機會ヲ捉ヘ賣買ノ措置謬ルナク時期ニ善處シ以テ相當ノ利益ヲ收得シタルハ大ニ欣幸ト可云。然リト雖モ經濟界ノ推移變轉容易ニ逆睹シ能ハズ。外ニハ經濟會議ニ列國自國ノ保全ニ汲々タルアリ、内ニハ圓價ノ昂騰ニ伴フ輸出ノ激減アリ將來ノ豫測必ズシモ樂觀ヲ許サズ。吾等ハ常ニ經費ノ節約ト事務ノ合理化ニ努メ内容ヲ堅實ニシ吾原田組ノ向上發展ヲ期セントスルモノナリ。

(下半期)——本期一般ノ業況ハ前期末ノ餘勢ヲ受ケ内地ニアリテハ軍需工業ノ旺盛ニツレ高級鋼並ニ工具鋼ノ需要増加、滿洲ニアリテハ時恰モ滿洲國建設ト需要期ニ直面スルトニヨリ引續キ建設用諸材料ノ需要益々増加シ滿洲商品界ハ近年稀ナル殷賑ヲ極ムルニ至レリ。此間我原田組ニ於テハ強固ナル基礎ト多年ノ信



用ヲ武器トシ本店各支店相呼應好機ヲ逸セズ積極的ニ邁進シ従業員亦奮闘努力其效ヲ奏シ、販賣高ニ於テ前期ニ倍加スルノ好績ヲ示シ利純亦之ニ伴フ優良ナル收穫ヲ得タルハ大ニ慶スル所ナリ。

思フニ次期ニ就テハ今日ヨリ豫測シ難シト雖モ此ノ餘勢ヲ持續シ前途洋々タル滿洲國ノ發展ト共ニ吾原田組ノ向上ニ益々奮勵シ本期ヲ凌駕スルノ好績ヲ結バンコトヲ期ス。

かくて合名會社原田組は其の多年蓄積培養せる強靱な力を以て、歴史的胎動期に對處したのである。それだけに活動力ある聰明な指導者は全原田本支店の特に希求するところであり、店主原田氏は原田組支配人として原田恵伍氏を大連に派して、その才腕を縦横に發揮せしめられたのである。振古の民族發展期といふ天の時に配するに若き俊毫を得て原田組の覇圖滿々たるものがあつた。

## 第二節 滿洲國の經濟建設工作

大同元年三月に誕生した新興帝國滿洲國は、翌二年大滿洲國經濟建設要綱を發表して、日滿經濟ブロック樹立の爲にする具體的な建設方策として左の四大根本方針を畫定した。

- 一、國民全體の利益を基調とし、利源開拓、實業振興の利益が一部階級に壟斷されるの弊を除き萬民共榮ならしむ。
- 二、國內賦有のあらゆる資源を有効に開發し、經濟各部門の綜合的發達をはかるため、重要經濟部門には國家的統制を加へ、合理化方策を講ずる。
- 三、利源の開拓、實業の振興に當りては門戶解放、機會均等の精神にのつとり廣く世界に資本を求め特に先進諸國の技術、經驗其他凡ゆる文明の粹を集めて、これを適切有効に利用する。
- 四、東亞經濟の合理化を目的とし、先づ善隣日本國との相互依存の經濟關係に鑑み、同國との協調に重心を置き、相互依存の關係を益々緊密ならしむ。

かゝる根本原則を現實的に具體化する經濟統制方式の大綱として、國防的若しくは公共公益的性質を有する重要事業は原則として公營又は特殊會社をして經營に當らしめることとなり、これ以外の産業および資源等各般の經濟事項は民間の自由經營に任せしめる事になつた。ただ特に國民の福利に關係し生計維持のために直接的影響を與ふる部門に對しては、生産消費の兩面に亘つて必要な調整が行はれることになつたのである。そしてまた經濟建設途上當面の課題であつた鑛工業の振興については、要綱第六において左の如き方針が決定して聲明



せられるに至つた。

一 鑛業資源を開發し、基礎工業及國防工業の確立を圖り國民經濟を豊富ならしめ國富を増大せしめることを以て方針とす。

二、鑛業

(イ) 石炭は諸炭礦を統一し合理的生産と供給を行ひ、以て低廉豊富なる燃料を提供すると共に輸出の増進を圖る。

(ロ) 國防鑛産資源は原則として特殊會社をしてその鑛業權を確保せしめ以て無統制濫掘を警むると共にその開發に便す。

三、工業

(イ) 左記工業は國內需要に伴ひ所要の統制下に逐次發達せしむ。金屬工業・機械工業・油脂工業・パルプ工業・曹達工業・酒精工業・柞蠶工業・紡織工業・製粉工業・セメント工業・醸造工業。

(ロ) 前記以外のものは差當り自然の發達に委すも、將來必要に應じ所要の統制を加ふることあるべし

(ハ) 電氣事業の統一經營を行ひ豊富低廉なる電力を供給す。

四、施設

(イ) 工業地域の健全なる發達を促進し、施設集中の利益を圖るため左記の地方に工業地域を設立す

奉天、安東、哈爾濱、吉林附近

(ロ) 工業品の規格を統一す。

かくの如き經濟統制方式が確立せられるや、民間の一部には農本的な國家社會主義的經濟統制と混同されて、日本における民間資本はその流入を逡巡したのである。然るに滿洲においては舊軍閥資本は既に崩壊し、土着の蓄積資本は言ふに足りなかつたから、勢ひ日本民間資本の投下資本に俟つ外なく、滿洲國政府は康德元年六月下の如き聲明書を發して日本資本家の誤解を解くところがあつた。即ちその一部を抄録すれば「政府は客年三月一日經濟建設に關する聲明書を發表し以て滿洲國の經濟建設に關する大體の方針を示す所あり、右聲明書に於いては滿洲國に於ける各般の事業中一般民間の經營に委せらるるもの、範圍必ずしも明かならず、民間事業家に對し稍々趣旨徹底を缺くやに觀測せられたるも、既に政府に於ては關係方面の意嚮をも徴し慎重審議を重ねたる結果、國防上重要なる産業、公共公益的の事業及び一般産業の根本基礎たる産業即ち交通通信、鐵鋼、輕金屬、金、石炭、石油、自動車、硫安、曹達、採木等の事業については特別の措置を講ずることゝせるが、其他の一般企業については事業性質に應じ時に或る種の行政的統制を加ふることあるべきも大體廣く民間の進出經營



を歓迎」するの志向を明かにし、更にこの趣旨を法文化するため滿洲國政府は重要産業統制法の立案に着手した。

康徳四年（昭和十二年）五月一日公布、十日より實施された重要産業統制法の中核となす點は

- 一、企業計畫は許可制とする。
  - 二、營業者は事業年度毎に事業計畫書及事業報告を提出すること。
  - 三、主管部大臣は會社に對し公益命令及び統制命令を發し得る。
  - 四、各會社の營業及び財産に關し政府は必要と認むるとき之が報告を求め又検査をなすことが出来る。
  - 五、統制協定、生産設備の變更、事業の讓渡、法人の合併については政府の許可を要する。
- の五點で、十九産業が指定された。尙同法公布に際し滿洲國實業部では、「滿洲國の産業開發は日滿一體の原則に則り日滿各自の個別經濟に偏せず日滿全體經濟を確立し以て外に對しては廣義國防の増強を圖り、内に向つては國民經濟の安定向上を期するを以て終局の目的とする。従つて開發さるべき産業の種類は適地適應主義に従つて採擇調整せらるゝことを要するのみならず、これが開發建設の方途に至つては、眞に日滿を通ずる全體經濟の確立強化の

上に最も有効適切であることを必要」とする旨の當局談を發表して、日本資本の對滿投資流入策を講ずると共に、過剰生産を避けて國內産業の合理的發達を期せんとしたのである。

滿洲國における産業經濟の發展は、特殊會社ならびに準特殊會社の設立過程によつて明確に把握できる。換言すれば特殊、準特殊會社こそ建國經濟理念の具體化であり、滿洲經濟體制の基礎骨格をなすものである。「特殊會社設立要綱」の決定は康徳二年であるが、それに先立ち大同元年には單獨法に基づいて滿洲中央銀行の設立を見、續いて滿洲國國家資本・準國家資本および滿鐵資本を中心として特殊會社が相踵いで設立された。康徳四年九月までに特殊會社二十三、準特殊會社十六（このうち奉天工業土地會社は康徳四年十月解散）に達し、總資本金實に六億二千八百十五萬圓で、事變後滿洲に設立された新設會社公稱資本總額の六割を占め、滿洲産業開發の計畫資本として壓倒的優位にあつた。

いま年代順に設立を見れば、特殊會社として、昭和七年に滿洲中央銀行・奉天造兵所、昭和八年に滿洲石油株式會社・滿洲電信電話株式會社、昭和九年に同和自動車工業株式會社、滿洲棉花股份有限公司・滿洲炭磺株式會社・滿洲採金株式會社・昭和十年に滿洲鑛業開發株式會社・滿洲火藥販賣株式會社・昭和十一年に滿鮮拓殖株式會社・滿洲林業股份有限公司・



滿洲鹽業株式會社・滿洲弘報協會・滿洲計器股份有限公司・滿洲生命保險株式會社・滿洲輕金屬製造株式會社・滿洲興業銀行・昭和十二年に滿洲映畫會社・滿洲拓殖公社・滿洲鴨綠江水力發電株式會社・滿洲合成燃料株式會社がある。

更に準特殊會社に就いて見れば、昭和七年に滿洲航空株式會社・昭和八年に滿洲化學工業株式會社・昭和製鋼所・大同酒精株式會社、昭和九年に滿洲電業股份有限公司、昭和十年に奉天工業土地股份有限公司、本溪湖煤鐵股份有限公司、昭和十一年に滿洲曹達有限公司・日滿商事股份有限公司・滿洲畜産工業株式會社、昭和十二年に滿洲畜産公司等設立されたのである。

かくて一産業一企業主義の構圖のもとに一應は特殊會社の設立が完了したが、偶々康德四年（昭和十二年）七月七日に日支事變が勃發し、滿洲の産業開發計畫も、更に一層日本との一體化が要請されるに至り、日本産業資本と技術の大量移駐に依る滿洲重工業會社が康德五年十二月一日に新設されたのである。

以上の如く滿洲國の産業開發統制方式は着々制度化しつゝあつたが、一方において國際情勢は愈々緊迫化し、日滿を有機的一體とする高度の國防經濟運營の要は、日一日と痛望せら

れ茲に現地調辨を基調とする産業五ヶ年計畫が康德四年を第一年度として計畫的實行に移されることになつた。その實行課題は

一、準戰時體制の完成のために最大條件とし現地調辨主義に基づく軍需工業重工業の積極的遂行

(イ) 軍需品、自動車、車輛等の軍需工業の確立

(ロ) 石炭を始め鐵鋼其他鑛産資源の増産及開發

(ハ) 之等を原料とする重工業の確立即ち鐵鋼の増産、石炭の液化、オイルセール等基礎工業の開發

(ニ) 之が原動力たるべき水力電氣の開發と配電網の整備

二、完全自給と輸出増加とを見越した農業生産の積極的増加と農林産業資源の開發

(イ) 輸出農産物たる大豆の栽培獎勵と共に多角的農業經營による米・麥・大麥・燕麥・麻・棉等農業資

源の増産

(ロ) 馬・綿羊等の積極的増産と森林資源の開發

(ハ) 之等に伴ふ邦人移民政策の確立、二十ヶ年百萬戸五百萬人移民計畫の實施

かくて自由主義的經濟より綜合的計畫經濟への移行は、必然的に原田組の經營方式にも變貌を加へ、その取引先も特殊會社及び準特殊會社を主體とするに至つた。また永い取引を有



する滿鐵會社とは、同社が滿洲國の建國以來國有鐵道は總てその傘下に委任經營せられるに及び益々密着性を以て取引に當つたのである。

### 第三節 鐵鋼統制と原田組の對策

#### 第一項 原田組と鐵同志會

鐵同志會の濫觴は、これを遠く第一次歐洲大戰後の不況對策として發誕した鐵商交換會に求め得る。鐵商交換會は大連市内の有力な業者が相寄つて在荷品の整理および各自の無益過剰な仕入品を防遏する目的で設立されたものであつたが、昭和二年に至り前述の如く財界の恐慌を見るに至つたので、更に一層の結束團結を必要とするやうになつた。そこで資金の合理化を計るため共同仕入を實現し、主として外國品を大量に購入して低廉な價格を以て需要家の要求に應じたのである。

然しながら昭和四年以降は金解禁の氣分が濃厚となつて市價は落潮し、加ふるに支那内亂

の續發、露支國交破綻等の不祥事が相踵ぎ、更にまた銀價未曾有の暴落の影響は支那側の需要を頓に減少せしむるに至つた。昭和五年金解禁の實施を見てより以來は、華商當業者中幾多の破産者を出して、全く警戒を要する状態にあつたので、組合員は在庫品の整理と販賣に力をそゝいでこの難關を切抜け得たのであつた。

かくするうちに組合員の中には、八幡製鐵所一手販賣權を獲得して脱會するものがあつたので、これを一轉期として各自資金を醸出し、昭和五年五月に結合力の強い鐵會を組織してアイ・シー會と命名したのである。アイ・シー會は會員の各々が持つ資金と經驗と廣汎な販賣網を總結集して、着々購買・販賣の共同體制を確立して深刻な競争に對し常に優位的位置を確保してゐた。

昭和六年四月にはアイ・シー會を鐵同志會と改稱して、組織ならびに規約に一段の改良を加へ、新商策を樹立して大勢に準ずるの意圖に出たのである。此の間、鐵同志會は相當の準備金ならびに數千噸の在庫品とを保有してゐたので、着々仕入、販賣の大綱を樹立してゐたところ、昭和七年に八幡製鐵所製品の購買權も亦有するに至つたので、外國品仕入を國産品の仕入に轉換した。



時恰も滿洲問題が擡頭し、昭和六年九月以降は徹底した強力外交並びに積極政策をとつた結果、圓價は暴落したために鐵價は第一次歐洲大戰後の好況時にも比すべき昂騰を見た。鐵同志會はその仕入をドイツ・ベルギー・フランス・アメリカおよび會員の直輸入してゐた店に仰いでゐたが、更にまた當時の八幡製鐵、小倉製鋼を主として、三井物産、岩井商店、安宅商會等から國産品を仕入れ、其の事業は膨脹して鹿島町敷地に大倉庫を持ち數千噸の鐵材をストックしてゐたので、鐵價の暴騰に伴ひ大幅の利潤を得たのである。

昭和七年には新興滿洲國が成立して、土木、建築、港灣その他の諸工業が旺然として起るに至り、これが圓滑な需給に對しては非常な努力を以て寄與をなし、堅實第一主義を以て着々と其の地盤を固めつゝあつた。而してこの鐵同志會は、原田組原田社長の提唱になる滿洲亞鉛鍍株式會社（第二篇滿洲亞鉛鍍會社の項参照）の建設に際して資金的に大きい役割を果した。

昭和十一年二月における鐵同志會の動きについて暫くこれを眺めて見たい。當時の事務所は大連市鹿島町九番地にあり、取扱品はもちろん一般鋼材であつた。構成メンバーは合名會社原田組を初め、畑中、鳥羽、大信の各商社で、組織資本金は四十萬圓。運用は幹事制で前

記四商社が四ヶ月交替で幹事となり、毎日同志會へは一人づつ派遣されて會務を執りつゝあつた。

當時買入は三井を通じて國産製鐵品を主として取扱つてゐた。而して昭和十年秋日鐵との申合せにより、三井、岩井、安宅の三社にて鐵同志會向取扱品に限り三井を幹事として日鐵の交渉に當り日鐵よりの供給不能のものに限つて、外註又はアウトサイダーより供給を受けて居つた。建値について見れば、月に三回建値及び在庫表を發行して小口需要に應ずると共に、入札物ならびに纏つた受註に對しては、各店より毎日派出される四名の合議によつて見積値を決定してゐたのであつて、各店の買入品に對しては月末に一%の歩戻があつたのである。

販賣方法としては、四店に等しく照會を受けた場合は順番を設定して交互に落札して居つたが一般には自由販賣であつた。特にストック品の中で賣捌き度いものや競争相手による情勢の如何によつては、見積値に拘束されずその下値を潜つて受註することがあることは當然であつて、鐵同志會の利益金はその七割を積立てその三割を各店の賣上に應じて配分する取極めであつた。



かくて鐵同志會の活動が活潑化するにつれ、これに對抗する競争相手が生ずるのは必然的であつて、其の主なるものには三菱をバックとする進和商會、外註を主體とする村信大連支店等の地場商社の外に、日本内地に於ける大手筋として、岡谷（名古屋）岸本（大阪）伊藤（東京）森岡（東京）等の各社があり、滿人商社としては盛記棧、政記五金行、協成泰、仲盛昌、仲盛泰、復興木廠等が比較的確實なものであつた。當時の原田組金物部の報告書に左の記録がある。

國際的ニ變動嚴シキ商品ニ加ヘテ寸法多岐ニ亘ル爲メ、常ニ細心ノ注意ヲ要ス。最需要期或ハ物ニ依リテハ昨日在庫アリ越百圓ノモノガ本日ハ殆ンド在庫出盡シ越百二十圓ヲ稱フル事不尠、故ニ或程度販賣目鼻付キオルモノハ其ノ在庫ノ多寡ヲ注視買取ル事必要ナリ。故ニ需要状態ノ報告ト本店トノ連絡怠ルベカラズ

かくて堅實な歩みを續けて來た鐵同志會も、滿洲鋼材組合の成立と共に發展的解消をとげたのであるが、現在の鐵鋼配給機構の先驅的役割を果した歴史的意義は高く評價さるべきものであらうと思はれる。

### 第二項 原田組金物部關係各組合

昭和十一年二月現在における原田組金物部關係の各組合を、資料について見るに、鐵同志會のほか左の如きものがある。

まづ瓦斯管一式を取扱ふ「鋼管同志會」があつた。鋼管同志會は事務所を大連市三井物産會社金物掛内に置き、三井、原田、鳥羽の三商社を以て組織されてゐた。而してその買入方法は

昭和鋼管ガ日本鋼管ニ合併後本會設立當時ハ日本鋼管製品ヲ取扱フノ止ムナキニ至リシモ、昨春 註昭和十年 以來獨乙マンネスマン製品(1"以下バットウエルド)以上引拔)ヲ獨逸製鋼株式會社ヨリ買入販賣シツ、アリ、マンネスマン製品ハ往年ノ米國ナショナル製品同様ノ軟質品トテ各方面共評判ヨシ昨年十一月ヨリ在鞍山滿洲住友鋼管製品製造開始ノ結果之モ我鋼管同志會ニテ取扱フ事トナリ、以上ハ今後滿洲住友製引拔瓦斯管ヲ、亦1"以下ハ内地住友製品ヲ供給受クル事方原則トナレド本年末ニ至ラネバ不可能ナルベク、結局1"以下ハ當分獨乙マンネスマン製品ヲ取扱フ事トナル筈、尤モ特ニ日本鋼管製品指定ノ向ニ對シテハ大連岡谷、齋藤ヨリ買入可能、買入値ハ先方建値4%引見當。



と、當時の書類に記載してある。

販賣建値は日本鋼管賣値を基準として、それよりも約2%乃至3%値引して建てゝゐた。尤も官廳等の入札品や、競争のある向に對しては建値の如何に拘はらず、特別値を出してゐたが、此の場合に於ける賣上は三等分して各店の賣上と爲してゐた。また建値取引のものは當該賣捌店のみ賣上となり、期末に特別値取引と建値取引との兩者を集計した數字に對して利益金を分配してゐたのである。即ち利益金のうち三割は平等の所得とし、残りの七割は該期における賣上によつて配分を決定する協定であつた。

かくの如く「鋼管同志會」が三井バツクであるに反し、鐵材の場合と同じく三菱を盟主とする「滿洲鋼管會」(岡谷、關原、進和、大信、齋藤長八郎出張所の五店)があつて、日本鋼管の一手販賣をなしてゐた。原田組金物部の記録によれば、

此會ニハ各自比率アリ。毎年賣上數字ニ依リ翌年ノ比率更改ニ影響アル事トテ互ニ賣上増加ニ努メツ、アリ。當方(編者註鋼管同志會)ガNKK製品ヲ先方(編者註滿洲鋼管會)建値以下ニ買ヒ得ル原因ニテ普通通りレート四、五%位ノ模様ナリ。外ニ獨乙製及ポーランド製ヲ少量輸入在庫セル政記五金行ノ外ニ在庫ヲ爲サズ專ラ輸入ニ當レル獨商豐隆洋行アリ。此處ハ時トシテ非常ニ安ク賣ルコトアリ。昨秋(編者註

昭和十年)哈爾濱へモ五、六車販賣セシ模様ナリ。政記並ニ豐隆ハ國際シンヂケート成立迄ノ問題ニテ之ハ何レ結成サレルモノ故、今後ハ滿洲住友ヲ扱フ我鋼管同志會ニ絶對有利トナリ、滿洲鋼管會トハ其位置轉倒サレルモノト思フ

因ニ滿洲住友鋼管ハ、大連販賣品ニ對シテモNKK大連建値ノ5%引ヲ以テ供給シテ呉レ、奉天販賣品ニ對シテハ、以上へ税金運賃加算、更ニ5%引セシモノヲ以テ奉天驛貨車乗渡トシテ供給シテ呉レルモノナリ。

としてゐる。鋼管は單價の變動が鐵材ほど激しくなく、加ふるに鞍山において大量生産が爲されるやうになつたので比較的容易に入手ができると共に、品切寸法も少いといふ取引上の好條件が、鋼管同志會の活躍を活潑化してゐた。

前記の如く住友鋼管の滿洲進出に伴ふて、その内地總賣捌店たる町野商店が奉天に出張所を新設した結果、この町野商店と、大連鋼管同志會の構成メンバーたる三井、原田、鳥羽の合せて四商社をもつて、出資各一萬圓宛の奉天火曜會が結成された。火曜會の販賣區域は鞍山より公主嶺間であつて、新京、哈爾濱に同一組合が結成されるまでは、これをも包含してゐたが、公主嶺のみは奉天火曜會の販賣區域外であつたのである。



また滿洲鐵手組合といふのがあつた。これは事務所および倉庫を大連市三笠町五番地に置き、瓢箪印、龜甲一印、龜甲印、指輪印のマークのある鐵管鐵手販賣株式會社取扱鐵手を販賣し、輸入組合員は

一口金壹千圓百口ヲ以テ資本金拾萬圓ノ組合組織トシ内七割即チ七萬圓拂込濟各店及持口左ノ如シ  
 關原二十一口、岡谷十七口、原田十口、奉天河村十口、藤川四口、享利四口、徳昌三口、新安三口、大信二口、齋藤長二口、政記二口、杉元一口、瓢會十一口以上十四店。  
 瓢會ハ舊組合甲部會員四店（關原、岡谷、原田、鳥羽）ノ外ニ奉天河村ヲ加ヘ各店五分ノ一宛ノ平等所有トス。以上ニ對シ夫々現金又ハ現物出資ヲ終リシモノトス。

こし、販賣組合員は輸入組合員十三店を以て組織し信認金として一律に五百圓宛を組合へ積立てゝゐた。而してこの滿洲鐵手組合の運営は一ヶ年交替の幹事制を採り、昭和十年十二月一日生誕以來同年十一月末迄は、原田組が幹事としてその運用の全般につき管掌してゐたのである。本組合の買入方法は左の如くであつた。

(イ) 買入ハ總テ鐵管販賣會社ヲ通ズル事トシ輸入組合ノ買入元價瓢箪印昭和八年定價三割引、龜甲一印同上四割引、龜甲及指輪印昭和九年定價四割引。

ロ) 輸入組合ヘ利益保留ノ爲メ販賣組合員ヘ仕切値段ハ何レモ昭和九年改正定價大連庫渡瓢箪印二割五分引（亞鉛引二割増） 龜甲一印三割五分引（亞鉛引二割五分増） 龜甲及指輪印二割五分引 亞鉛引二割五分増

販賣建値について見るに、販賣組合員は原則として昭和九年の定價を基準として、瓢箪印二割引、龜甲一印三割引、龜甲および指輪印二割引として、可及的に嚴守することに取極められてゐた。販賣方法について見れば、幾店かへ照會を受けたものに對しては交互落札の方法を執りつゝあつたが、最底二割三分引（龜甲一は三割三分引）とし、輸入組合の利益金は四割を積み立て、あとの六割を各店の販賣実績によつて配分されてゐた。

この滿洲鐵手組合が取扱ふ瓢箪印および龜甲一印に相當する競争品は國産品にはなく、米國クレーン製品も輸入がなかつたので殆んど獨占的位置を保持してゐたが、龜甲印および指輪印等の並等品には、これに對抗するものとして分銅印、マユ印、三ツ丸印等があつた。尤もこれらの對抗品も精密に見れば龜甲・指輪印に幾分の劣りはあつたが、並等品には嚴重な試験がなかつた事と、五%乃至一〇%位安値であつたから、その點に於てのみ限定すれば彼に有利であつた。然しながら分銅印・マユ印・三ツ丸印等は品種多岐に亘つて大量の在庫を



なす商社がないために、その勢力は未だ甚だ強くはなかつたのである。

次に大連市敷島町五品ビル三階十五號室に事務所を置く昭和會がある。その取扱品は昭和製鋼所製の丸鐵で九耗以上二十五耗のものを滿鐵商事部の經由で取扱はれてゐた。會員は進和三八%、同志會六二%で、同志會の内譯は原田組一六%、大信二二%、畑中一四%、鳥羽一〇%であり、大信・進和の二商社が常任幹事となつてゐた。

買入方法について見れば、毎月二十七日頃、昭和製鋼所・滿鐵商事部と昭和會々員とが會合して、翌月分受渡品の數量を申込むと共に買入値を決定する事になつて居た。この買入値は從來、日鐵建値および東西市場の建値を基準とし、且つ内地品の進出を防ぐために二圓安値を建てゝゐたが、内地鋼材界不振に起因する東西市場の採算度外視的建値のために、平浪板同様滿洲独自の建値を後には決定するやうになつた。支拂方法は當時の原田組の記録にみるに

立山積出後四十五日目拂手形發行トシ契約品未取引ノ場合ト雖モ引取月最終日計算四十五日目手形發行スルモノトシ、我々ハ結局其責任十六%ハ何處マデモ責任ト義務ヲ負ハサレ居ルモノナリ  
右買入値ニハ一・五%ノ「リベート」ヲ含ムモノトス

と記してある。また販賣建値は

此丸鐵ハ昭和會五店ニテ販賣ノ外五店引受量ノ大體三分ノ一見當ヲ商事部 編者註滿鐵商事部 ハ實需家本位ニ直賣シ得ル建前ナル爲メ商事部諒解ノ許ニ賣行狀態ニ應ジ昭和會ハ隨時協議會ヲ開キ賣値改訂發表スルモノトス。以上ニ依リ何時ノ場合モ商事部直賣値ト昭和會發表値同一ナル爲メ法外ノ利益加算ハ事實上許サレヌ事ナリ。

と述べてある。

昭和會が昭和製鋼所の丸鐵を販賣する組織であることは前述したところであるが、更に昭和製鋼所製の平浪板、黒薄鐵板を販賣する目的を以て、原田組のほか、進和、大信、鳥羽、岡谷、畑中の六商社を以て結成される平浪會があつた。この會は二名の幹事制とし、内一名は三ヶ月が常任幹事で、その下に會務を執る制度になつてゐた。この平浪會の買入方法を原田組の記録に見るに

毎月二十七日頃昭和會同様全會員集合ノ上翌月分數量並ニ其月上旬受渡スベキ三分ノ一量ノ單價決定ノ事ニナリオルモ十年冬昭和獨自ノ賣値決定セシ事トテ大シテ相場ノ變動モナク、十一年二月十日會合ニ於テ毎月二十七日數量申込ヲ爲シ月上旬値確定ノ上ハ買主個々ノ希望ニ依リ翌月分全數量或ハ半數或ハ全



部次句ニ引延ス等各自ノ任意トスル事ニ決定、尙中旬渡ノモノハ毎月七日頃下旬渡ハ十七日頃決定スルモノトス。何レニシテモ翌月(三月)五日迄ニハ全部ノ取引ヲ爲スモノトス。

支拂ハ各自銀行保證ヲ差入居リソノ範圍ノ金額ニ限り六十日サイドノ手形發行トス。

平浪板ノ發表賣値ニハ(黑板ニハ別ニリベットナシ)二錢ノリベットアリ此内五厘、外ニ昭和ヨリ五厘、計一錢積立ニテ結局手取一錢五厘トス(厚物手數料増額交渉中)

と、昭和十一年二月二十日付を以て報告されてゐる。同報告には販賣建値および販賣方法につき左の如く記されてゐる。

昭和製鋼所ノ發表スル各地渡賣値其儘販賣方希望アレド之デハ一枚一錢五厘ノ手數料ヨリナク殊ニ右ハ各地共一車扱着地驛渡賣値トテ自然引取貨等モ要スル事トテ各地共最低一錢以上加算シツツアル模様ナリ。

昭和製鋼所ハ六店協同的販賣方法トノ希望アリ。餘り競争ヲ爲サザル様ナ方針ノ許ニ進ミツツアレド賣場ヲ持ツモノト持タヌモノトノ間ニハ自然値差ヲ附スルヨリ外ナキ事トテ漸次會員間ニテ競争ヲ爲ス傾向ニハアレド我々ハリベイト迄切込ミ取引スル事ハ中止シ何處迄モ堂々ト進ミ他ノ違反行爲發表値以下ニ販賣ヲ發見ノ場合ハ早急ニ報告スル

平浪會が昭和製鋼所製平浪板、黒薄鐵板を取扱ふのに對し、鞍山井口洋行鞍山製鐵所のリベ

ット及びポールの2吋以上1吋迄の製品を取扱ふために原田、畑中、鳥羽の三商社を以て會が組織された。會名は未定として前記報告書に左の記録がある。

安宅商會ニテ一手販賣權ヲ取ル事トテ安宅商會鞍山出張所ニ於テ一切ヲ扱ツテ呉レル豫定。但シ本年(編者註、昭和十一年)三月ニナラネバ何レモ確定セズ。左記ハ大體豫想ヲ誌スモノナリ。

買入方法 安宅商會ヲ通ジ一ヶ月分又ハ數ヶ月分ヲ纏メ申込ヲ爲スコト、シ買入値ハ内地値並ニ大連進和及滿鉄値ヲ基礎ニ奉天ニ於テ以上ノモノニ比シ五%ハ安ク賣リ得ル程度ノ値ト爲スト同時ニ其買値ニ對シ三店ハ一律ニ五%宛積立ヲ爲ス事トシ右積立ハ三店平等ノ權利ニ屬セシムル豫定

販賣建値 三店ニテ協議、鞍山・奉天・新京・哈爾濱四ヶ所位ノ最低賣價決定ノ豫定

販賣方法 買入品ニ對シ一律ニ五%ノ積立金ヲ爲ス事ハ何處迄モ協同的精神ト各個間ニ於テ無益ノ競争ヲ防止スル意味ニ外ナラズ。三店トモ販賣協定ハ十分圓滿ニ之ヲ爲ス用意ヲ有ス。

以上の各組合・各會のほかには新京廿日會と、哈爾濱七日會とがあつた。新京廿日會は滿洲住友鋼管製品を取扱ふために、三井を中心として、原田、鳥羽、町野の四店で組織したものであつて、大連鋼管同志會の出張所であり、これと同趣旨のもとに哈爾濱において結成されたのが七日會であつた。



本項において述べたところのものは、原田組金物部の資料を基礎として、昭和十一年初期における原田組の一活動部門を瞥見したのであつて、時期的にも活動部門的にも一断面を見ただけ過ぎないが、これ等を通じて我々は原田組経営の新方式を発見することが出来ると思ふのである。即ち滿洲における經濟統制は漸く強化されんとして、これに對處するには一會社の恣意的經營にては萬全を期し得ず、必然的に組合もしくは同志的な結合を以てする會を結成し、協調せる一團のカルテル的結合を以て新事態に即應せんとする意欲を見得るのである。而してこれが發展するところ総合的計畫經濟下の配給機關たるの性格にまで轉移していくわけであるが、我が原田組が良く時態の動向と世運の進展とを見誤らず、強力な地盤をいよいよ堅實に獲得しつゝあつたことを知るのである。

而してかくの如く原田組の經營性格を次の方向に進ませつゝあつた統制經濟機構はいかなるものであつたであらうか。我々はこれを鐵鋼部門における統制強化に一應問題を限定し、それと原田組との相關作用を次項において考察したいと思ふ。

尙、原田組金物部鋼材係新設の趣意を資料について見るに左の記録があり、昭和十二年八月二十五日付のゴム印が押捺せられてゐる。

滿洲國の鐵鋼統制の精神に基き、新に設立せられた滿洲鋼材組合並に一層強化せられた平浪會の有力なるメンバーたる我原田組金物部は、今回の統制に對する徹底と販賣網擴充の爲め新に鋼材係を設け日滿商事株式會社により統制せられたる鐵鋼全般の取扱ひを爲す事にせり。

#### 統制品目

平浪板、黒薄板、丸鐵、平鐵、角鐵、アングル、ヂョイスト、チャンネル（平鐵以下は十月一日以降完全統制せられるものなれどそれ迄一ヶ月餘原則として丸鐵同様見積前、日滿商事の認諾を受くる事になり居るも現在見積寫を提出、事後承認の形を許容されて居る）中厚板統制は來年度より行はれ現在準統制品として共同仕入、共同保管を慫慂せられ之を實施する事として準備中。

#### 鋼材係

本店に主任を置き田中之に當ると同時に、本支店、出張所共必要數の専門係員を設け専ら此統制品販賣に努力す。

各支店出張所鋼材係の人件費、旅費、運賃、交際費、通信費等一切本店に於て負擔すると同時に、決算期に於ては各店出張所販賣實數利益、經費を明かにする事とせり。

但し各係員は鋼材係主任者の指示により熱心に販賣に努力するものとは言へ販賣先は最も選擇を要する事は言を俟たざる處なり。故に官廳及回收上注意を要せざる會社への賣込以外殊に、土建業者・鐵工所